

た。
家に籠り、書架に本を探り、ペンをのべて創作に没頭するだけでは、彼の心身に動く熱意と青春が承知しなかつた。そして彼の如き人間を千九百十年代の日本の社會は切實に要求してゐたのであつた。たとへ未熟な國手にもせよ、それを求めずにはゐられない疾患を日本の社會が持つてゐたのであつた。

實際運動——それが順吉の生活の主體であり、創作は従であつた。

妹の美津枝は〇女學校へ通つた。

お峰婆さんが家政萬端を忠實に切盛した。

一月下旬の或る夜であつた。

灰のやうな結晶の小さな紛雪が風も交へずに降つてゐた。

傘に當つても音もしない程靜かに降つてゐた。或は深い夜霧かとも思はれる程密度濃く降つてゐた。こんくと降つてゐた。

ぢつと眺めてでもゐなければ降つてゐるのか、逆に地の底から湧き上つてゐるのかも分らなかつた。

つた。

順吉は外套の襟を立てて芝園橋附近の或る建物から街路に出た。彼の頬は、外の寒さにも似ず血の氣をほんのりと泛べてゐた。

昂奮した微笑の色の漂つた双の眼が何事かの愉快さに輝いてゐた。

「何故こんなに愉快なのだらう？」

彼はつるりと片手で頬を撫でた。そして電車へも乗らずに日比谷の方を差して大股に歩いて行つた。

彼は、彼を愉快がらせる原因の或る出來事を思ひ出した。

その前日から、順吉は鐵工所の罷業團と共に、罷業團の本部になつてゐる或る建物の階上で、幹部の職工達と、對策や、今後の運動方法などについて色々對策を凝らしてゐた。

鐵工所は古川橋附近の小さな工場であつた。罷業職工の數も六十人足らずの小さな工場に過ぎなかつたが、順吉はその職工のなかに個人的に知り合ひの人達が數人居たので、罷業が起ると、好意的の援助を求められ、又自分も與へるつもりでさうして一緒に本部に集つてゐたのであつた。

その罷業の原因は賃銀問題であつたが、直接の動因としては、職工の大部分が、工場主にとつて、面白くない思想を抱いてゐると云ふので、工場側で、職工の結束的逆を警戒しつゝ、一人二人宛その狙ひをつけた職工を解雇して職工の入替を行ひ出したので、それと氣着いた職工側が防衛の手段として結束して罷業したのであつた。

工場主の所謂「面白くない思想」を抱いてゐると云ふのは取りも直さず順吉達との交友があつかつて原因をなしてゐるので、順吉は自分の主義思想の當然の擁護のためにも棄てておけない關係にあつた。

明日の午前十時、工場主側との最後の交渉を聞くと云ふ前夜であつた。

十二時を少し過ぎてゐた。

明るくも無い電燈の下にむづくりと一人の職工が起き上つた。

「おい、起きろ、起きろ、火事だ！ 火事だッ!!」

彼は慌しう叫んで皆を叩き起した。

数日の交渉やいざいざで働き疲れてゐる職工はぐつすり寝込んでゐたが、それでも火事と聞く

「何だい、何だい。」

と叫びながら各自に起き上つた。

「火事だ、」

「何處だい！」

「白金方面らしいぞ！」

「工場らしいぞ。」

「何、工場が!!」

「行くんだ！ 用意しろ!!」

ぱたぱたと騒ぎ廻る聲に順吉は眼をあげた。

尻を端折つたり淺黄服の裾を褰けたりした一同は一人残らず街路に出た。

順吉も續いて出た。

冬の星空に向つて赤い火の手が赤く燃え上つてゐた。

寒い風が、走つて行く一團の人間の上を容赦無くビュー／＼吹いて通つた。

電車も途絶えた町の中に風の音と、無言で走る一團の足音が地の底からでも起るかのやうに一

様な律を作つて古川橋の方へ向つた。

「どうも工場らしい。」

順吉と並んで走つてゐた職工は喘ぎ喘ぎ云つた。

十町以上も走り續けて火事場へ来て見ると、それは工場から四五軒を隔てた商家が燃えてゐるのであつた。

「風向が悪い、警戒しろ！」

一同は工場へ雪崩れ込んだ。

水を汲んで屋根へ駆け上るもの、工場内の雜品を搬ひ出すもの、右に左に、走せ廻り、動き歩きする彼等は、今の今迄對抗し憎悪して來た工場主の持ち物であると云ふ事をすっかり忘れてゐるやうであつた。

消防隊が駆けつけた時にはもう隣家迄火が移つて、めりくと屋根の崩れ落ちる音が凄まじかつた。

が彼等は異常な努力を以て工場を救つた。

混亂しきつた火事場の中で指揮者も無い不統一な努力——水を汲む、物を搬ぶ、叫ぶ、走る——

——が指揮せられざる統一を示した。

隣迄燃え移つた炎の明りが、工場内に流れ込んで、職工の亂れた姿を明るく輝やかした。

「足を切つた！」

「しまつた！ 痛い！」

混亂の中で時々傷ついた者の叫びかきこえた。

火は漸く下火になつた。

彼等が遂にその工場を無事に彼等の努力によつて救ひ出す事が出來たのは黎明近くであつた。

燃え落ちた木がぶすく燻ぶつてゐた。

職工達はホツとした。

「喰ひとめたなア。」

「有り難え。」

口々にさう呟きながら、水にびしょくになつた工場の隅に佇んだり、しやがんだりした。

順吉は、水に濡れ、手を傷け、足を傷つけた職工が、或は跣足で、或は足袋のまま、嚴冬の朝方の寒さの中に居て、寒さをも感ぜぬが如く、彼等の工場を救ひ出した歡にうたれて居るのを見

ると、胸の底からなる悲壯な感激を覺えた。

そこには、もう賃銀問題の抗争も、工場主に對する憎惡もなかつた。

彼等には唯、彼等の愛する仕上臺、鑿、鉋——總ては彼等の節くれだつた腕に親しみ多い機械が完全に保たれたと云ふ歡より他になかつた。

彼等は、胸の中で愛しいハムマーよと叫んだに違ひなかつた。彼等は毎日彼等を脅やかして、彼等の血と肉と青春とを絞りとるやうに呻る調革——モーター——ハムマーに對しても、「焼けるぞ！」と思つた瞬間一種の愛をそれらにさへ感じたに違ひなかつた。

「夜があけたなア。」

誰かが云つた。

霜柱の立ちさうな朝の冷たい空氣の中で、燃えすたりが、ぶすく煙つてゐた。

そのうち工場主も顔を出した。

工場主の方では火事ときいて、必ず職工が放火したものに違ひないと思つて特に警察から人を派して貰つたりしたのであつた、と語つた。

その滑稽な——然し當然さうあるべき工場側の想像を裏きつて、却つて罷工中の職工が火事

を消しとめたと云ふ、豫想に反した行爲の結果が工場主に何ものかの感激を與へたらしかつた。

思ひがけなく、さうした不意の出來事によつて、罷業團と工場主側とは愉快な満足を以て紛糾が解決された。

順吉は、それに對して何の説明をも加へたくなかつた。唯一つの感激と人生の何物か尊きもの示唆にみちた藝術として彼は、その印象を甦らせて、愉快な昂奮を胸に感じてゐるのであつた。全く、燃える火明りのなかに動く人々の姿——それは眺めるものにとつては立派な繪であつた。

順吉は内幸町の停留場迄歩いて來た。

雪は猶も降つてゐた。

停留場の柱の赤い灯が嬰兒の魂のやうに粉雪の中に眠つてゐた。

順吉は電車へ乗らうとして、公園の方の側で本郷行を待つた。

建物も樹木も電柱も、鐵柵も、灰色の粉雪の中にひつそりと姿を潜めてゐた。人通りも少なかつた。

ふと、彼の眼に一つの人影が映つた。

右手の櫻田本郷町の方から歩いて來るその人影は、雪にほかされて男とも女とも見わけがつか

なかつたが、唯何となく興味を唆られるる姿であつた。

それは普通の日には、此の繁華な都會で滅多に見る事の出来ぬ静寂で神祕的な情景であつたらう。

音も無く降る細かな粉雪の中を黒い人影がだん／＼と近づいて来る。

彼は漸く近づくに随つて、その黒い人影が、蛇の目傘をさした若い少女であることを認めた。

灰色の粉雪、赤い停留場の灯、ふと現はれた若い少女、紺蛇の目の傘——それは、どうしても若い青年をして故もなく微笑させる情景でなくてはならぬ。

少女は彼の傍へ来て立ち止つた。

電車を待つらしかつた。

そのうち一臺の電車が緩い速度で進んで来たが、車の前面は粉雪に包まれて何處行か分らなかつた。

「本郷行？」

順吉は訊いた。

「春日町廻りです。」

車掌はふつきら棒に云つた。

少女も乗らうとはしなかつた。

電車はす／＼と出て行つた。

まもなく本郷行が来た。

順吉は先に乗つた。

少女も乗つた。

内部は空いてゐた。

順吉は外套の雪を揺り落して中央のクッションに腰を下した。恰度その少女と向ひ合つて。

順吉はその刹那殆んど直覺的に「満津子では無いかしら……」と思つた。

彼はその直覺を信じたかつた。

偶然を信じたかつた。

五つばかりの時始めて見て六つの時には別れてしまつた満津子の顔貌は、紗を通して見る物體のやうに茫つとして彼の胸に残つてゐたが、彼女の母のお十和さんの顔だけは睫一本でもはつきりと思ひ出す事が出来た。

六つの時、お十和さんが死んでから満津子は神戸へ行つてしまつた。それ切り二人の間には何の交渉も無かつたが、順吉の胸の中では立派に彼の戀の對象として彼女は生長してゐたのであつた。

彼は眩いけに少女の顔を見た。

圓な視線がちらと注がれた。

「だが、神戸にゐる筈の満津子が東京に居るわけは無い。」
と、彼は自分の空想的な想像を打ち消して見た。

「然しだ、呉に居る筈の俺達兄弟が東京にゐる。過去十年の間に満津子が神戸から東京へ来る運命にぶつからなんだと誰が確言し得よう……満津子だ……見て見ろ、お十和さんにそつくりぢやないか。」

彼は色々と考を縮めたり擴けたりし乍ら、停留場へ来る度に女が降りはいしまいかとひそかに注意をしてゐた。

少女は真中がら分けた髪を後で束ねてゐた。

聰明さうな感じのする廣い額、圓らかな腫、女らしい嬌羞と優雅とを隅の方に滲えてゐる短かい

唇……順吉は満津子の母のお十和さん其儘の顔をその少女に見出す事が出来た。

「おやもう須田町を過ぎたのかしら……」と、勾配を登つて行くやうな電車の運行に気がつくと同時に、

「湯島五丁目……お降りのお方は御座いませんか……」
と乗客の騒ない車中を覗くやうにして車掌が云つた。

あつ、降りるんだ、と思つて彼は周章して立ち上つたが、その刹那電車は動き出した。

「お降りですか。」

車掌は不満げな語調で云つた。

「いや、次だ。」

彼は撥が悪いので出鱈目を云つてしまつた。

そのうち本郷一丁目へ來た。

少女は降りさうな氣配を見せなかつた。

彼は降りなければならなかつた。

車を出やうとして、もう一度と振り返つて見た時、はつと少女の視線とぶつかつたけれどもそ

の少女は直ぐに眼を外らした。

彼は電車を降りると又元へ引返して五丁目の角から左へ曲つて新花町の自分の家の方へ急いだ。

「どうも満津子らしい。もし満津子とすれば、峽風氏の處へ行つてきけば或は分るかも知れない……」

彼は、満津子を陰に陽に保護する事を彼女の母のお十和さんと約束した片山峽風氏を思出した。然し其の後彼は自分に追はれていつかもう峽風氏の處へ出かけて満津子の事を聞いて見る事を忘れてしまった。頭から消えたのでは無かつたが、今日は行つて見やうと云ふ日がなかく來なかつたのであつた。

その後順吉が再びその少女に出會したのは夏の終り頃であつた。

九月の五日に、順吉の友達の一人が、米國に居て成功してゐる親戚へ養子として渡米するのを、順吉は、弟の秀則や、美津枝や、お峰と一緒に横濱迄送つて行つた。

京濱電車で東京驛へ引き返した時には皆相當疲れてゐた。

莫迦に天氣の好い日だつたので東京驛のの構内を出ると、明るく澄み切つた高い高い空が小籠一つ寄せずに擴がつてゐて、晩夏の太陽が、漸く午後を示したばかりの強烈な光を以てくるめいてゐた。

「氣丈な奴だなア、涙一つ出さなかつたぢやないか。」

順吉は、短い自分の影を白靴の爪先で踏み乍ら秀則に云つた。

「死ぬるんぢやあるまいし亞米利加位で泣いてたまるかい。」

秀則はさう云つてさつさと歩んだ。

その友達と云ふのも餘り幸のいい男では無かつたので順吉はさう云つたのであつたが、弟にさう云はれて見ると自分にも似合はない感傷的な事を云つたものだと思つてそれ切り黙つた。

驛前から本郷行に乗つたけれども、相當混雜でゐたので順吉は三人と一緒に車掌臺に立つてゐた。

その時東京驛方面から來たらしい俥が一臺埃を浴びて光る街路樹に添つて神田橋の方へ走つた。

何の氣なしにひよいとその俥に眼を留めた順吉は驚いた。

俥の上にはクリーム色の日傘をさして満津子に似た例の少女が乗つてゐるのであつた。

俤は後になり、先になりして動いてゐるが、神田橋で電車が停車した時俤は先へ越して一つ橋の方へ向けて河岸を走つて行つた。

弟や妹は順吉が俤に注意してゐるのを傍で見えてゐた。

稍風の出た街路に砂煙が時々舞ひ上つた。

家へ歸ると皆汗びつしよりになつてゐた。

夕飯が済んでから秀則は友達の處へ行くと云つて出かけた。

順吉は二階の書齋の障子を開け放して、狭い椽側せらに洗ひさらしの浴衣の尻を据えると、欄干に兩手をあてて顎を凭せかけて、晝間の炎熱を靜かに吐き返し乍ら息ついてゐる街の屋根を見おろしてゐた。

高低の不揃なその屋根を越してニコライの會堂が見えてゐた。

順吉は例の滿津子に似た少女の事を又考へてゐた。

「兄さん。」

美津枝が背後から忍ぶやうな柔い足どりで近づいた。

「あ。」

順吉は振り返つた。

「今日のねえ。」

美津枝は彼の傍へ腰を卸して口を開いた。

薄い浴衣を隔てて、むつちりと盛り上つた美津枝の股は彼に壓しつけられるやうに崩れて來た。

髮の香や化粧水の溶けるやうな香に交つて女性のみ持つ芳艷で魅惑的な匂が、手を舉げ、顔を動かす度にばつと彼の腦漿に泌み入つた。

彼は自分の中に潜んでゐる、柔くて粘つこい、咽喉首を縁めるやうな特異な力がむくくと身體中に充滿して來るのを覺えた。

「兄さんは今日何を見てらつしやたの？」

「何處で……」

と素氣なく順吉は訊き返したが、何となく腹の中を見透されたやうでならなかつた。

「電車の中ですよ。」

と、微笑みながら云ふ妹の語調と態度の中には、明らかに生長し切つた處女の隠し持つ力が自然に溢れ出てゐた。

「うん、あの時かい。あれね、此の間話したらう、ほら満津子に似た少女に出會したと云つたらう、今日のが又あの人だつたから驚いて見てゐたのさ。」

「今も、その方の事を考へてゐらつしやつたのでせう。」

順吉は妹の中で不可抗に生長してゐるものの姿を、つきりとその言葉附の中に見出した。そして、處女から脱け切らうとする力が、髪の毛一筋に迄潮のやうに満ち渡つてゐる妹に對して妬ましいやうな氣持さへ感じて勢よく云ひ切つた。

「さうだ、満津子の事を考へてゐたのだ。あの少女が満津子だつたら宜いがな、と思つてたのだ。」

「さう……」

美津枝はそれ切り黙つた。

「考へちや不可ないのかい。」

「さうぢやないのよ。兄さん。」

美津枝は、兄の突つかかるやうな語調に愕いてあはてて答へた。

「あ、あ、ちよつ、ちよつと待つて、動いぢや駄目だよ。」

その時恰度生き残つた蚊が一匹美津枝の左の頬に垂れ下るやうに喰ひついでゐた。

「何？」

「駄目だ、蚊がとまつてるんだよ、そつと、宜いかい。」

順吉は立ち上つて彼女の前からそつと體を近づけて平手で頬を打つた。

その手の閃きにパツと眼を閉じた美津枝の胸のはだかりから惱ましい香が散つた。

「ほれ御覽、ね。こんなに吸つてやがる。」

彼は、標本のやうに形よく潰れてゐる掌の蚊を妹の鼻先へ突き出した。

「まア。」

美津枝は潰れた蚊から吹き出てゐる血を見て、くるくると眼を瞠つて仰山な聲をあけた。

翌くる朝、順吉は高い二階部屋の障子に、べたべたと陽の光の當る迄寝てゐた。

障子越しの光の明るさに、うつとりと眼を開けた順吉は光を除けるやうにして、そつと體を横にして鼻柱迄毛布の襟に埋めた。

美津枝と秀則の書齋兼寢室になつてゐる隣の六疊には、開け放たれた窓から陽が一さんに流れこんでゐた。

美津枝が一人、座敷の真中に右膝を立てて足の爪を剪つてゐた。足の下に敷いた新聞紙へも、胸に埋めた彼女の顔の上部へも總て、九月初旬の透明で強烈な午前九時頃の光が流れてゐた。

爪が剪れる度に、びちん／＼と快い音をたてて、白い指の間の缺が時々きら／＼と光つた。

立てた膝頭から衣の裾が流れ落ちて、脛の處迄見えた。

順吉は細り眼をあけてそれを見てゐた。

びちん、びちん。

音がする度に彼は盛り上つて來たやうな微笑を浮べた。

「あらッ、兄さん！」

ふと、横に外れた美津枝の視線が順吉の恍惚とした視線にぶつかり、彼女はさつと耳朵迄振めて足を引いて座り直した。

そして切り溜めた爪を新聞紙にくる／＼巻くと、急いで階下へ降りて行つた。

「あつはつはつ。」

彼は笑ひながら床を出た。

そして元氣さうに胸をはだけて、障子を明け放しながら、ビュー／＼口笛を吹いた。

輝かしい空に飛行機が幽かにプロペラの吼りを傳へてゐた。

彼は小手を翳して機影を求めたが、寝疲れた網膜に陽の光が泌みてくらく／＼とした。

やがて眩いけに眼を擦つて階下へ顔を洗ひに降りて行つた。

お峰が縁側で新聞を讀んでゐた。

順吉が降りて行くと氣疎けな眼を投げて、

「お早う御座います。」

と云つたなり又背を折り曲けて新聞に眼を通してゐた。

「お峰、日の當る所で讀むと眼を悪くするよ。」

と云つて彼は洗面場の方へ出た。

洗面を終つて二階へ戻るとお峰が茶を汲んで上つて來た。

「深刻味とはどう云ふ意味合の事でせう。」

お峰は順吉の顔を窺ふやうに突然訊いた。

お峰はまだ故郷の訛りの抜け切れない言葉が多かつた。

「何處で覺えたい、そんな難かしい言葉を。」

順吉は善良で撲訥一方のお峰が、田舎育ちの癖にそんな言葉を知つてゐるだけが不思議であつた。

「今朝の新聞紙に貴方の事が出て居りました中に有りました。」

「今日の新聞に、一寸見せて御覽。」

お峰は階下へ新聞を取りに行つて來た。

それは文藝月評の中に出てゐる彼が八月號の雜誌へ書いた創作の批評であつた。

お峰は、順吉の名を毎日の新聞で鶉の眼鷹の眼で廻し廻つた。そして傭人とは云へ十四五年近く兩親のない頃から、手鹽にかけて來た順吉の事なので、社會運動の方面にしろ、文藝の方面にしろ、彼の名が出てゐると自分の事やうに貪り讀んで世評を氣にした。

然し彼女の解るやうに假名のついてゐないものの方が多く、又假名振つきの記事でもその意味の解し難いものの方が多かつた。

彼女は妹の美津枝に解らぬ點を問ひ正したり、弟の秀則にそれとなく訊いたりしてひそかに満足するより他はなかつた。

お峰は自分達の讀めない文字を自由に驅使して物を書いたり、自分達の意味の解らない言葉で批評されたりする順吉を盲目的に尊敬し、他へ對しても一種の優越感と、年寄らしい誇を感じてゐるらしかつた。

順吉はお峰の持つて來た新聞の月評式の批評欄の記事を見ながら、

「はア、是れか……蓄音器のやうな態度で、物を取扱つて行く作者が、好い加減な氣分で書いたものと思はれない。深刻味と云ふ言葉が近頃云云……か随分こつびどくこきおろしてるな。うんさうだ深刻味と云ふのは郷里の方の言葉で云ふと、切り込んであると云ふやうな意味だねえ。」

順吉が、深刻味と云ふ言葉を教へてやるとお峰はひよこ／＼階下へ降りて行つた。

順吉はその日、満津子の事が氣になつて仕方が無く、是が非でも片山峽風氏の處へ出かけて行つて一應聞き正して見やうと思つてゐたので、朝飯を済ますと、錢湯へ出かけて行つた。

正午近い錢湯の中には四五人の人が無言で、沐浴の快味を靜かに貪つてゐたが、天井の明り窓から正午近い晩夏の陽の光がゆつたりと水蒸氣の立ち罩めた風呂場へ流れ込んでゐた。

錢湯から歸ると、軽い晝飯を攝つて、リンネルの洋服に着換へて家を出た。

「明るい晝だなア。」

順吉は全く明るい晝だと思つて空を仰いだ。

柔く頸に巻いたソフトカラーの邊へ小さな弱い風が涼しく吹いて、ホワイトシューズ靴の先に、罌粟の麥稈帽子の影がくつきりと短く地に落ちた。

現在では文壇の一方の權威者として押しも押されぬ地位にゐる片山峽風氏がまだ漸く賣り出した頃順吉は初めて會つたのであつた。

それから十年になる。

峽風氏の進む道と、順吉の道とは可成りの隔たりがあつた。

で、其の後は一度だつて顔を合せた事も無かつたが、満津子らしい少女に出會してからは、其の眞疑を確める爲にはどうしても峽風氏の手を煩はす必要があつたので思ひ切つて出かけたのであつた。

順天堂前から市ヶ谷新宿行に彼は身軽く飛び乗つた。

牛込區通寺町××番地。

それが峽風氏の住居であつた。

牛込肴町の停留場で降りて神樂坂を上つて、活動寫眞常設館文明館の向ひ側の引つ込んだ處に同氏の宅はあつた。

蠟燭屋と陶器屋との間を通つて暫く入ると、昔は名のある寺院の境内でもあつたらしい廣場があつて、無縁の卒婆塔などか泥にまみれて半分方土に埋まつたりしてゐた。

日當りの好い廣つ場の一隅には洗ひ張り屋の干場らしい杭が打つてあつて、紺がかつた色の洗張物かもやくくと水蒸氣を立ててゐた。

その一隅に峽風氏の住んでゐる立派な二階建の家があつた。

硝子張りの玄關の戸を引くと、順禮の鈴のやうな可愛い鈴がチリン／＼と森閑とした内部の空氣の中に零れ出た。

「御免下さい。」

順吉は、汗の滲んだ帽子を手に取つて玄關に立つた。

急に、汗がじく／＼滲み出て、初對面の人を不意に訪れた時のやうな軽い不安けな心持がした。

「はーい。」

綺麗な若い女性の聲が玄關の直ぐと次の間でしたかと思ふと、間もなく障子があいた。

慎ましげな小さい束髪の下から淑やかな眼をあけたその女は、

「いらつしやいまし、何方様で御座います。」

とてきばきした物の云ひ方をして、又眼を自分の指の上に落した。

「片山先生はいらつしやいますか、私は有吉順吉と申しますがちよつと先生にお目にかかりたいのですが……」

順吉は立て續けにさう云つて、内ポケットから名刺を出して渡した。

「はア居りますでございますが、ちよいと御待ち下さいまし。」

と、その女は、とつつけの階子段を二階へ向つて上つて行つた。

白い素足に浴衣の裾が戯れるやうに搦みついたり跳ねたりするのを順吉は恍惚と見てゐた。

「奥さんにしては若いし、誰だらうな。」

そんな事を思つてゐる時に、又とんくと階子段を下りる足音がして主人の峽風氏が現はれた。

鈍い銀縁の眼鏡の底から、柔和さうな眼を動かして峽風氏は待ち設けた來客かでもあるかのやうに「さアお上り下さい。」とぶつきら棒な、けれども虚飾の無い打ちとけた聲で云つた。

順吉はさつさと靴を脱いだ。

今迄靴に蒸されてゐた足の甲へ涼しい感觸がさつと忍びよつた。

「さア此方へ。」

と先に立つて行く峽風氏の後から二階へ上らうとして、ふと左手の部屋を見ると無く眼を注いだ時順吉はあつと驚いた。

「おや！」

驚きとも喜びともつかない感情がさつと彼の胸を掠めた。そして思はず足を停めてその部屋を覗いた。

部屋の真中で、机に凭つて何か讀んでゐる少女こそは、順吉が今朝の訪問の目的である満津子によく肖た少女であつたのである。

「確かに満津子だ。」

と視線を凝らした瞬間、その少女の顔は正面に順吉に向けられた。心持その顔は微笑したやうでもあつたし軽く羞かんだやうでもあつた。

彼は幾つかの階段の一階宛を、彈仕掛の人形のやうにひよいくと身輕に上つて行つた。二階は廣かつた。

長い廊下が一直線に續いて左手に三つ許りの部屋があつた。

順吉はその一番奥の部屋に通された。

開け放たれた障子の外に、遮るものもない空が一面に見渡されて、流れるやうな風が通つては抜けて行つた。

清楚な模様の絨緞を敷いた上に角い應接用の卓子ツクシあつて、新らしい籐椅子が、向ひ合つて据えてあつた。

「まア、掛け給へ。」

ぶつきら棒にきこえて、それでゐて、却つて氣のおけぬ親しみを覺えるやうな峽風氏の態度が順吉をすつかりおちつかせた。

然し、それは峽風氏に對する態度のおちつきであつて、彼の内心は階下で見た少女に對する好奇と想像とでせかせかしい混亂を以てなか／＼おちつかずにいるのであつた。

峽風氏と向ひ合つて籐椅子を腰を卸して、久々の挨拶を交してしまつた處へ、先刻の女の人が冷たいコーヒーを運んで來た。

「これは私の妹だ。」

順吉は、改めてその妹と云ふ人に可憐な挨拶をした。

「先生、然し、突然お伺して、お仕事邪魔にでもなるんぢやありませんか。」

社會的地位——もつと狹義に文壇の地位から云つても、年齢からしても、又、從來の關係からしても、この親しみ深い人に對してはやはり先生と呼ぶのが一番適はしい呼び方であると順吉は思つた。

「いやいや私は構はない……があれからもう十年以上になるねえ。」

「え、もうさうなります。」

順吉は感慨深さうな顔をして答へた。

峽風氏が、あれからと云つたのは、まだ順吉が中學生であつた頃、滿津子の母のお十和さんの紹介で、お十和さんの病床で二人が會つた時の事を指すのであつた。

それからその頃の話が順序も無く出て來た。

順吉は滿津子の事をもう切り出さうか、切り出さうかとその好い機會を狙つてゐるうちに話は順吉の仕事の上へ移つて行つた。

「君もなか／＼精を出しますね。創作と實際運動と——内からと外からと進むだけ偉い。然し

あの頃最も感傷的な浪漫主義者だと思はれた君が、匕首を擬してぐんぐん進む勇士にならうとは私も思ひがけなかつた。尤も少年時代は大抵の人が浪漫的な人間に見えるものではあるがね。それにしても在學中に発表した二三の短篇は私も感心して讀んだ。それ以來非常に期待してゐた處暫く引つ込んでしまつてどうした事だらうと思つてゐる矢先、豫期しない方面で君の名が出て來たのを見て驚いてゐるわけだ。が是は驚く私の方が間違で君の作を注意して讀んでゐた人は君が今日實際運動に押し進んで行く事を豫め知つてゐたに違ひない。が何にしてもあの頃から見ると隔世の感があるね。」

順吉は峽風氏が案外に自分の立場や自分の心持を洞察し得てゐるのを知つた。

「がまアよく訪ねて呉れた。實は私の方でも機會が無くて訪ねもしなかつたが、君の方からも餘り訪ねて來ないので有吉君は私を忘れてしまつたのぢやないかと思つてゐた。ははは。」

順吉はちよつと恐縮した。

階下で峽風氏の妹と、満津子に肖た少女との話す聲が庭へ洩れ出て、更に二階へも幽かに聞こえてきた。

妹さんが、果物を運んで來た。

「どうぞお構ひなく……」

と、順吉はその方へ向つて云ひ乍ら、妹さんが出て行くと同時に、

「先生！」と呼びかけた。

「階下に居られた方は、満津子さんでせう。」

順吉は、ゆとりの無い自分の聲音を恥じ乍ら訊いた。

「あ、さうだ。」

峽風氏はちよつと微笑んで、

「君は何時の間に見つけたね？」

「え、上る時にちよつと……」

「君は満津子さんを覚えてゐるかねえ。」

覚えて居なくつてどうするんだ！と思ひながら、

「覚えてゐますとも……」と元氣よく云つた。

そして蜿蜒ながら、満津子に對する自分の心持や、東京で二度程出會した事などを話した。

「満津子さんは、ずつと此方にゐらつしやるんですか。」

「いや、さうでも無いがね……」と冒頭して峽風氏が語り出した處によると、満津子は母のお十和さんが死ぬると間もなく、父でない父の磯部と一緒に神戸へ移り住んだ。磯部は満津子が自分の子供で無い事をよく知りぬいてゐてわざとお十和さんを自分の手に繋ぎつけて置いた程の男だから、自分を裏切つたお十和さんや満津子の眞實の父の野間さんに對する復讐心から、直ぐ第二の妻を迎へて、その妻が繼子の満津子を苛めつけるのを見て、

「ざまを見ろ、満津子は泣いてゐるぢやないか。」

と、満津子を通じて、死んだお十和さんや野間さんへ對する復讐の心持を満足させてゐた。

處が、第二の妻に二人の子供が出来るに及んで、却つて其は家庭のごたくを助長させるやうな結果になつたので磯部は、満津子を東京の友人の處へ預けてしまつた。

それより前、峽風氏は、死んだ野間さんへ對する友誼上、又お十和さんの頼みもあり、満津子が神戸へ行つてからは、峽風氏の友人が神戸にゐたのを幸、その友達を頼んで、それとなく満津子の身邊を注意してゐたのであつた。

で満津子が上京して本郷の東片町の磯部の友人の家からF女學校へ通ひ出してから、峽風氏は満津子に會つて一切を聞かせてやつた。

満津子が總てを理解し得る年頃になつたら一切を話してやつて呉れと云ふのが彼女の母のお十和さんの最後の頼みであつたのであつた。

満津子は母の死んだ時漸く六つであつたが、仄かながらも断片的な記憶もあつたし、其後の家庭の状態から察して自分の運命に對して深い疑を抱いてゐた處へ峽風氏から一切を聞かされてその疑も釋明したので、彼女は絶へず峽風氏の處へ來ては、死んだ父母の話聞いては自分を慰めてゐた。

その間には勿論順吉の話も出た。

そして彼女は順吉をよく覚えてゐるとの事、勿論それは幼ない頃の印象に過ぎないが、それから後順吉の名が新聞雑誌に散見するやうになつてからは殊の外なつかしがつてゐる事などを峽風氏から聞かされた。

「ぢや本郷行の電車の中で出會した時、私を知つてゐたのですね。」

「あさうだ。此の春だつたかな、君に電車の中で會つたと云ふやうな話をしてゐた。なアに、君なんか新進作家だ、そして社會運動の花形だ、雑誌や新聞の寫眞で顔を知つてゐるから直ぐと見當が着くさ。それに血と云ふものは不思議なものだね。君と満津子さんと幾らか血が繋つてゐる

ると云ふ事が非常に彼女の方ではなつかしいんだね。そりやさうさね、今の所血縁と云つては君達兄妹位なものだらうからね。」

「一度遇ひたいですねえ。」

「さうだねえ……おつうさん、満津子さんは居ますかね。」

のそく、藤椅子から立ち上つた峽風氏は階子段の方へ歩いて行つて階下を向いて叫んだ。

「居らつしやいますよ。」

「居たら上つてらつしやいと云つてお呉れ。」

「はい。」

階下の返事を聞き流して峽風氏は部屋へ歸つて來た。

續いて階子段を上る足音がきこえて、又廊下を傳つて近寄る柔い衣ずれの音が夢のやうに順吉の耳に傳はつた。

順吉が思ひがけ無く訪ねて來て、玄關を上る時、思はず見合せた視線でもう満津子は胸をわくくさせてゐた。

「あの方がお出でになつた。あの方がお出でになつた。」

満津子は處女としての總ての憧憬が一時に現前の事實となつたやうな異常な観喜を感じた。そして羞恥に燃える頬が火熱つて來るのをどうする事も出来なかつた。

順吉が二階へ上つてからも胸に重い壓迫を感じて心が落着かなかつた。

峽風氏に呼ばれた満津子は頬の火熱りを靜めるやうに努めながら上つて來た。

そして峽風氏からお掛け、と云はれる迄は卓子チャイブルへも近寄らずに居た。

峽風氏は馴れた態度で二人に挨拶をさせ合つた。

實際に斯うして會ふのこそ久し振りであつたけれども、お互に見えぬ間に、胸の中で生長してゐた心持は互の心に働きかけてゐたので、小一時間もたつと、順吉は、初めて彼女に遇つた時、その頃五つばかりであつた彼女が愛くるしい眼を輝かせて、兄ちゃん好きよと云つた時の印象などを笑ひ乍ら話せて聞かせる位に打ちとけてゐた。

お十和さんの臨終にこそ居合せてゐなかつたが、其前後は誰よりも詳しく知つて居た上に、少年時代の感じ易い感情が一緒になつてその頃の記憶を作つてゐるので、順吉は、古い名所繪葉書を一枚一枚と見せながら昔の旅の印象を思ひ出して語る人のやうに、自分の記憶を一つ一つ思ひ出すまゝに話した。

順吉のその頃の話は、満津子の心を痛くひいた。満津子は朧ろに覺えてゐる事をより明瞭により確にされたのが何より嬉しかつた。

「さう云へば何だか君がだん／＼野間君に似て來るのも意味深い氣がするねえ。」

ふと映風氏が順吉の顔を見ながら思ひ出したやうに云つた。

「肖てゐますかねえ。いつか初めて先生に遇つた時も、僕の横顔が野間さんに肖てると仰有つた事が有りましたねえ。」

順吉は無意味に頬つべたを撫でながら云つた。

「うん、さうだつたね。お十和さんも君が野間さんに似てゐるので一層君をなつかしがつてゐたのらしいね。」

涼しい風が絶え間無しに吹き入つた。

九月中旬とは云へ東京の晩夏は厳しい暑さであつた。

自分が限りなくなつかしんでゐる眞實の父に肖てゐると云ふ順吉の口から、自分の記憶より前の事實などを話しかかされるのは満津子にとつては此の上もなく嬉しいなつかしさでめつた。そしてお互に、もう或る堅い結ほれが、ちやんと出来上つてゐるのを感じ合つた。

四時過には、二人の坊つちやんを連れて外出してゐた映風氏の夫人も歸つて來、映風氏の妹のおつうさんも加はつて、頗る家族的な、まるで近しい親戚が或る共通の目的のもとに楽しく集つたのであるかのやうな晩餐の食卓がその部屋に用意せられた。

夫人は順吉とは初対面であつたが、豫め知つて居ると見えて隔意の無い様子を示した。

順吉と映風氏とはウキスキータンサンの爽やかな舌觸りと、あつさりとした料理とに、夏らしい味覺を楽しませた。

明るい、けれども浮々はしてゐない、しめやかな幸福が、漸く電燈の點つたばかりの部屋に卓子を圍んだ一團の上へふ／＼と流れ込んだ。

「然し先生！」

順吉がふと云ひかけた。

満津子の柔い潤んだ眼が順吉に暖く注がれてゐた。

「僕はお十和小母さんや、先刻の先生のお話やで、好い加減に自分の頭で想像してゐたのですが、實際はどうだつたのです。その野間さんと小母さんとの戀の経緯は……？」

「あ、君はそれを知らないのかね、私はもうお十和さんからすつかり聞いてゐるのだと思つて

みた。さうかい。」

峽風氏は玻璃盃を下に置いた。

神樂坂の通りを動く人のざわめきが野の果の嵐を聴いてゐるやうに鈍く皆の耳に傳はつた。遠くの家で鳴らしてゐる蓄音器の幅の狭い音がその中へ紛れこんでゐた。

——野間さんの話——

野間さんはべつとりと汗の滲んだ寢衣を畳の上へ放り出してをいて裏口へ出た。

野間さんの住んでる小屋は公孫樹で名高い寺の境内にあつた。もと此寺の掃除をしてゐた男の住んでゐたとか云ふ薄い板を張つたばかりの圍と屋根で出来上つてゐる粗末な小屋で、野間さんは其處で自炊生活をしてゐた。

お十和さんの寄寓してゐる井村の家の裏口は××寺の境内にかかつてゐるので、野間さんは井村の裏二階の部屋にゐるお十和さんの姿を毎日のやうに見る事が出来た。

寢着を脱ぎ棄てて裏手へ出た野間さんはぐつと胸を張ると大きな息をスウーッと吐いて境内の

大公孫樹の頂と空とを仰いだ。

五月も終る晩春の朝であつた。

野間さんは、脊伸びをしたり兩腕を意味も無く振り廻してゐるうちに、魂も體もピンと張り切るやうな強い歡を弄々と感じて「お十和！ お十和！」と呟くやうに戀人の名を呼んだ。

昨日迄野間さんの體内で薄い粘膜のやうなものに包まれてむづむづしてゐた一大情熱が、急にその粘膜を打ち破つて、身體全體に漲り満ちたやうな快感を野間さんは感じてゐた。

「お十和は起きてゐるかしら……」

と思ふと、井村の家へ馳け込んで、お十和さんを力一ぱい抱き締めてみたいやうな力が胸から腕へとぐんぐん沸き上つて來た。

野間さんは、その小屋に三年近くも住んでゐた。その頃二十三で或る私立大學の文科に籍を置いてゐた。そして風采なども一切構はずその小屋で穩やかな自炊生活をしてゐた。

その頃は、現在のやうに手つ取り早く文壇へ出られると云ふ頃でも無かつたので、野間さんが書きためた作物は野間さんの熱意と精進とを嘲笑ふかのやうに世間へも出ず長い間机の横に堆積してゐたが、その頃文壇での巾利きであつたTと云ふ博士が何かの折に野間さんの作物に眼をつ

けたのが機縁で野間さんの藝術が社会的に酬いられるやうになつた。

が、眞に野間さんの知己である友人達は、博士が推奨したしないにかかはらず世間が野間さんに與へた稱讃は當然過ぎる程當然で一にその天才が然らしめたのだと思つてゐた。

友人からさう思はれる位であつたから、友人はいつ迄も野間さんが、その見萎らしい小屋に住んでゐる事についても「おい、もう此の小屋を去つてはどうだ。餘り見萎らしいぢや無いか。」

などと、時々引越しをすすめたりする事もあつた。が性來無口な野間さんは笑つてゐるばかりで別に移らうともせず、相變らず油煙臭い洋燈の下で讀んだり書いたりしてゐた。

そして鼠色の煤けた壁には學校の古い制服だけがいつもぶらんと下つてゐて、壁に黒い影を投けてゐた。

その頃お十和さんは野間さんより三つ年下の二十で両親が二つばかりの時布哇へ行つて彼地で死んだとかで、遠縁の小母さんの嫁いでゐる井村の家で養はれてゐた。

井村はその頃陸軍の佐官階級の軍人であつた。

お十和さんが野間さんを知つたのは十八の年で、野間さんが大學へ入つた年であつた。

野間さんは手輕な自炊の夕飯を終ると、寺の境内へ散歩に出るのが習慣になつてゐた。

本堂の裏手は緩い傾斜面になつてゐて食後の體を横たへて物を考へるのには適はしい褥のやうな雑草が一ぱいに生え揃つてゐた。

野間さんは前の日の夕方も、いつもの通り鍋の飯を食ふと、手桶の中へ茶碗や箸を放り込んで置いて、耕の素袷一枚を引かけると裏口から出て行つた。

本堂へ通じる石疊の道を横に切ると傾斜面の草原へ出た。

陽が落ちて大分後であつた。

高低の不揃な東京の市街の一面が其處から瞰下された。

うつすら流れた夜霧の中へ、町の灯が橙色に流れ込んで明るう見えた。

草の葉の香と、濕氣を含んだ夜の微風がしつとりと頬の上を撫でて行つて、霧の中に息づいてゐるやうな市街の景色が、野間さんの心をだん／＼と靜かに落ちつけて行つた。

野間さんは星を眺める事が好であつた。

毎晩野間さんは數限りも無い好きな星を眺めては色んな空想に耽りながらお十和さんが出て來るのを待つのであつた。

その夜も果して軽い草履の音が入目を忍ぶやうにそつと草の上に寝てゐる野間さんへ近寄つて来た。

いつもならば、その草履の音を聞きつけると、野間さんは自分の方から、

「お十和さん？」

と小さな聲で呼びかけるのであつたが其の夜に限つて、意地悪い冷酷な衝動を故もなく感じて野間さんは殆んど耳のもと迄草履の音が近づいて來ても聲を掛ける氣にならなかつた。

何故意味も無くそんな意地悪い衝動が自分を黙らせたか野間さん自身でも分らなかつた。

そのうち寝轉んでゐる野間さんの胸へ、お十和さんの豊麗な體が近よると、野間さんは胸の中の情熱をほぐし出されるやうな惱ましさを感じたがそれでもむづちりと黙り込んで眼を瞑つてゐた。

「御存知なの？」

突然お十和さんが云つた。

それは悲しみに打たれ過ぎた繊弱い女性の涙と悲泣の豫告のやうな哀れつほい聲であつた。そしてその聲は漸く野間さんの心を和ませた。

野間さんはその夜に限つて意味も無いのにそんな意地悪い重苦しい衝動に動かされたりするのからして何となく不吉な豫感を感じるともなく感じてゐたのに、今お十和さんのさうした弱々しい聲をきくと、更に直覺的に悲しい不安な感覺にぶつからずにはゐられなかつた。

野間さんは急に優しくお十和さんの片手をとつて自分の胸の上をいた。そして兩の掌で力一ばいに握り締めて云つた。

「どうしたの？ 僕何にも知らないよ……」

「だつて、貴方今晚に限つてそんな厭な顔をしてゐらつしやるもの、きつと御存知なのだわ。」
暖い息吹は野間さんの顔に熱く惱ましく忍びより搦りついた。

「何を？ 僕何にも知らない、何かあつたのかい。何となく今日は自分でも不思議な程氣が沈むんだ。」

野間さんは辯解がましく云ひながら起き上つてお十和さんの肩を抱き竦めた。

お十和さんは溫柔しく野間さんの胸に顔を宛てて、小鳥のやうに胸を膨らませてふくよかな呼吸を續けてゐた。

「どうかしたの？ え、お十和さん。」

野間さんは自分の頬を肩に押しつけて訊いた。
さうして優しく云はれるだけお十和さんの胸は一ぱいになつて来て、何も云ひ出したくなかつた。

「あのねえ。」

「ん」

「あのねえ。」と云つたきり、もう次の言葉はぐつと咽喉にかかつて出なかつた。

「どうしたの、小母さんに何とか云はれたのかい？」

と野間さんが訊いても、胸に埋めた顔を振るだけで何とも答へなかつた。

「それぢやどうしたの？」

お十和さんは顔をあげた。

睫がすっかり濡れてゐた。

野間さんはその眼を見ながら、朝露に濡れた葡萄のやうなお十和さんの唇に幾度も幾度も熱い接吻をした。

お十和さんは小さい時から、神戸の貿易商の磯部と云ふ家の息子と許嫁になつてゐると云ふ事

を昨晚始めて井村から聞かされた。そしてもう結婚の準備もすつかり出来てゐると云ふ事を迄。

お十和さんは寝耳に水の況んや自分の一切知らぬ間に運ばれてゐる結婚に對して其場で直ぐ不承知の旨答へた。然し養育の恩や絶対服従の美德などが井村の口から強制的に説き出された。

お十和さんはそんな筋合の事を断々に話して泣き伏した。

「何と云ふ暴戻だ！」

無理強いの義理や恩義を押しつけて人の心を殺しても怪しまず、寧ろそれに従ふ事を婦人の美德などと考へてゐる人間の無智な暴戻が野間さんは憎くてならなかつた。

殊にお十和さんの話し振から軍人の井村が、自分より年若い人間ならば、部下の兵隊を右向け左向けと動かすやうに、どう云ふ風にでも動かし得るものだと思ひ込んでゐるらしい傲慢さも見え透いて、自分の戀人が奪はれると云ふ事實以上に、もつと別な感情からしても野間さんは彼等を憎み哀れませにはゐられなかつた。

野間さんとお十和さんとは時々憂はしげな眼を見合せた。深い沈黙の中を、お互の胸を苛む苦痛が駆けすり廻つた。

「妾どんな事があつても貴方の……よねえ。」

「さうだとも。」

野間さんは何もかも追ひ散らしたい程苛々して唯お十和さんの腕を求めた。

お十和さんはお前のものだ！

遠くの地の果からか、高い空の眞上からか、何者とも知れずさう叫んでゐるやうであつた。然しそれは地の叫びでも天の聲でもなく、脈打つて奔騰する野間さんの青春の血が胸の中で命令するやうに叫び上げた聲なのであつた。

野間さんの體はお十和さんを蔽ふやうに包んだ。

純一——ほんたうに唯一つの全身籠めた感情が恍惚の意識を傳へた。

義理も、情實も、苦痛ももう問題では無かつた。

凡ての上に超越した強い強い感情が幸福の意識を伴つて躍つた。

ミルク色の空へ昇らうとする二十日近い月が東の空を黄色く染めた……昨夜起つたそれらの事を野間さんは生々しく思ひ起した。

恐ろしいものにぶつつかるやうに野間さんは昨夜の傾斜面へ歩いて行つた。

そしてごろりと其處へ寝轉んだ。まどろむやうに眼を閉じると、野間さんは疲れ切つた病人の

やうにそのまま睡り入つた。

漸く野間さんが眼をあけて、惱ましい現實に返つた時には晝近い徂春の太陽の光が強過ぎる程その眼に泌みる頃であつた。

自分達の戀を貫く爲にはどうすれば宜いか、野間さんはその事ばかりを考へてゐた。

一緒に逃げる事、一緒に死ぬる事、其の他色々な方法が考へ出されたけれども、何れも野間さんを満足させはしなかつた。

さうかうしてゐるうちに、磯部とお十和さんの結婚式のあけられる六月になつた。

お十和さんも野間さんも、井村と云ふ男の性格を知つてゐるので、井村に打ちあける事もせず恐ろしいものが近づいて来る事を知り乍らどうすると云ふ決断も着かずに立ち竦んでしまつたのであつた。

「時を待つのだ！ 鳩はもとの巢へ必ず返つて来る！」

野間さんは焦燥と煩悶に疲れて殆んど無氣力になつた。そして唯さう考へて見るより他にはどうする事も出来なかつた。

「貴方はやつぱり詩人らしい事を仰有るのねえ、時を待つと云つていつの時を待つんでせう。」

お十和さんは野間さんの弱い心が怨めしかつた。何故死なうとは云つて呉れぬ、と口に出して云ひたい位に思つたけれども、さう思ふ下から、死んではつまらない、生きてゐなければ、生きて居るのだ、とやつぱり野間さんの云ふ通りの考に彼女の考も落ちて行くのであつた。

野間さんにしても、死ぬると云ふ考は一番手近に迫つてゐたし、幾度か、死なうと云ふ衝動にひつかかる事があるのではあつたが、まだ自分達の戀の運命を信賴して見たい心の方が強烈で、どうしても死ぬると云ふやうな考を肯定する事が出来なかつた。

「野間さんやお十和さんが死ねなかつたのを戀の熱意が足りなかつたと解釋するのは大變間違つてゐる。むしろその戀に對して非常な熱意があつたればこそ、飽く迄生きて戦はうとする悲壯な生の執着を感じ得たのであつた。」峽風氏は話の途中でそんな事をも云つた。

一方磯部はその父母と一緒に上京して井村の家で結婚式を挙げた。そして十日許り井村の家にゐる神戸へお十和さんと一緒に歸つて行つた。

「眼の前にそれを見ながらどうする事も出来なかつた野間君の悲痛な心持を考へると今でも自分にはたまらなくなる。野間君は狭い小屋の中で熱病者のやうにごろ／＼ころけ廻つてゐた。時には死人のやうに身動きもせず、全く空虚な眼をポカンと見開いたまま、ボロボロ涙を流してゐる事もあつた。」

峽風氏はその當時の野間さんを思ひ出して顔を暗くした。

お十和さんが神戸へたつと間も無く野間さんはその小屋から姿を消した。

神戸に居た友人の所へ野間さんは出かけたのであつた。そして野間さんはお十和さんが結婚してゐると云ふハンデイヤップを度外視して、許すだけの機會に於てお十和さんと會つた。

道が戀を誤つたか、戀が道を破つたか、それは何とでも云へやう。然し當時、野間さんの世話をしてゐた友人のRがそれについて峽風氏に書いた書信がある。

「野間のやつてゐる事が悪い事だ、許すべからざる事だと云ふやうな考は俺には微塵も無い。永い世紀の間眞實に觸れる事の眞面目さから廻避して、他人どころか自分を迄欺いて捏つちあけた道徳律の不當な強制に反抗してゐる眞摯な正に斯くあるべき人間性の眞面目な力と、その力を體現してゐる勇ましい戦士の姿を野間に見るだけだ。

不幸にしてお十和さんに會ひそびれた日の野間を見る事は俺にとつては何より辛い、お互が野間のやうな眞剣な力の體現者を友人とした事を歡ばうでは無いか……」
そんな意味の事がRからの手紙には書いてあつた。

そのうちその翌年の二月頃お十和さんは懐妊した。

Rは神戸でも有数の物持の次男で、早くから若い妻君を持つて、別家してゐたので野間さん一人位の世話をするのは何でも無かつた。

Rは神戸の郊外の摩耶山麓の松林の中へ、自分で考案して建てさせた云ふ和洋折衷の小ざつぱりとした家を持つてゐた。

廣い松林をその儘庭にとり入れた眺望の好い高臺のその家からは緩傾斜をして攝津灘へ流れ下る市街が一眸のもとに見おろされた。

四月初めの或る夜お十和さんが野間さんを訪ねて來た。

松林にはすつかり夜霧が垂れ罩めてゐて、十日近い月が霧の中に流れとけて、湖の底のやうな静寂さと幻のやうな柔いしつとりとした空氣がお十和さんと野間さんへ濕つほくまつはりついた二人は庭の方へ歩いて行つた。

夜霧のたち罩めた春の夜の色と光とは松原も、市街も、灯も、人も、地上の凡てを夢と化した。

松林の中の芝生へ二人は腰をおろした。

その夜お十和さんは容易に口を開かなかつた。重い鉛のやうな滯りが胸を凝固させてゐるらし

かつた。

が急に兩の手を野間さんの膝の上へ投げ出して、月に照らされた大理石のやうな額の下から、濕つた瞳をあけて野間さんを見上げた。それは全く眞に身を投げ出して人を信頼し切つた何等の反抗も企てもない哀れにも美しい女性の姿であつた。

お十和さんは懐妊した事を野間さんに話した。

懐妊したと聞くと野間さんは何とも云へない重い砲丸を投げつけられたやうに感じて口をもごごくさせてゐた。

「だが、何方だらう！」

暫くして野間さんは呟くやうに云つた。

「勿論貴方の……」

「きつとさうだね。」

お十和さんは頷き乍らそれが間違ひなく野間さんの胤である事を野間さんにはちよつと分らない細々しい事追加へて話した。

「時が來た！」

野間さんはさう思つた。

磯部に凡てを話してしまつてお十和さんを自分の方へ引取る時期が来たと思つた。そしてさうする事をお十和さんに話してみた。

「妾その事を磯部にすつかり話しちまつたのです。」

「何時？」

「一昨夜……さうしたらねえ。磯部はそんな事は無い、私はお前を信じてゐる。私は既に結婚式の頃からお前を知つてゐる。お前は私の妻だ！ お前はヒステリーに罹つてゐるのかも分らない、と云つて一切妾の云ふ事を聞かないのです。」

「ちや磯部は……」

「いえ、そりや磯部の云ふのは反語アイロニーなのです口ではさう云ひ乍ら、それと全く反対な冷たい表情をして妾を睨みんです。磯部は東京を發つ時からもう妾達の事を知つてゐたのです。妾があの家を出やうと思つてゐる事を知つてゐるから妾を苦しめる爲にわざとさう云ふのです。戸籍さへ繋いで置けば妾を擲り殺しにじり／＼と首を絞める事が出来ると思つてゐるのです。ですから夫婦と云ふのは名だけなのです……」

「ふむ。」

野間さんは黙つて聞いてゐるが、磯部の復讐の心持がすつかり分つた。然し野間さんとしては磯部のさうした手段に對抗する方法は無かつた。強ひて企てる事は牢獄の門へ向つて突進するやうなものであつた。

「で、お前はどうする考なのだい？」

「今迄通りにするより他に仕方が無いでせう。」

「さうだねえ。」

野間さんは呻るやうに云つた。

その瞬間、電光のやうに或る考が彼の頭を掠めた。

「或は磯部の子供かも知れない？」と云ふ考であつた。

二人の夫に仕へてゐるお十和さんの子供が一方の夫の子供だと決定すべき確實な證據は何處にも求められなかつた。

「きつと貴方の子供だと思ひます。」とお十和さんは云ふけれども、思ふと云ふ事は實際に現はれた事實では無い、畢竟するに不確實な想像に過ぎない。

野間さんの頭は、めちやくに亂れた。不快な混亂がぐるぐると濁流の渦のやうに彼の身體中を巻き廻つた。

「野間君！」

この時、Rの呼び聲が遠い家の方から起つてだん／＼彼の方へ近づいて來るらしい足音がした。二人は立ち上つて聲の方へ近づいて行つた。

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

それから間もなく磯部は、新らしく吳で海軍の御用商を始めたのでお十和さんも一緒に吳へ行つた。

磯部は、戸箱を楯に訴へ出るならば野間さんやお十和さんをわけも無く獄へ投げ込む事が出来るのをよく知つてゐた。然しさうした復讐では彼の心は満足しなかつた。飽く迄お十和さんを繋いで置いて生涯冷酷な復讐の鞭を加へてゐたかつたのであつた。

野間さんはお十和さんが吳へ行つてしまふと東京へ歸つて來て、峽風氏の處で世話になつて居た。

「それから後は語る自分の方が苦しい。」と峽風氏は暗い顔をした。

野間さんには、子供に對する懷疑が芽を吹き出したのであつた。

「お十和に罪は無い。然しお十和が磯部の子供を胎してゐるのかも分らないと云ふ事は考へられる、俺の子供を胎してゐると考へられると同様に。お十和が磯部の子供を生む心持——それは俺にとつては悲しみに絶した想像だ。然しそれがお十和にとつて、それが同様の悲しみであり苦しみであるか、どうかそれは俺には分らない。

磯部の子供だつたら、その時はその時で又何とかなる、そんな妥協的な心持が彼女の胸に動かないと云へやうか。」

野間さんはよくさう云つた。

然しそれは野間さんが二六時中考へてゐる事ではなかつた。どつちかと云へば、お十和さんの胎にゐる子供を自分の芽生メナシと考へて、それからそれへと楽しい將來を想像する事が多かつた。七月の末になつた。

野間さんはもう東京にちつとしてゐる事が出来なくなつた。そして峽風氏と一緒に吳迄出かけ

てお和さんに會ふ事にした。

途中で二人は思ひ出の多い神戸へ寄つてRと會つた。

處が恰度須磨の月が好いと云ふので、Rは無理に二人を引きとめてその夜須磨迄誘つた。

須磨行の途中でも野間さんはRと峽風氏に自分の苦しい心持を語つた。

「俺は子供の出世の日に生きて居る事は辛い、そんな大きな試みに果して人間は堪え得るものだらうか。」

などと野間さんは云つたりした。

複雑に紛糾し切つた、野間さんとお和さんとの戀に對して、二人は、どう斯う云ふ餘地が一切なかつた。

成行に任せる。さう考へる事は卑怯でも何でも其の場合さうした態度を執るより他に二人としては執るべき態度が無かつた。勿論その——成行に任せる——心持がどれだけ苦しいかと云ふ事が分らない二人では無かつたけれども。

淡路の島かけて、須磨浦一體の明月の夜に三人は哲學の話や、文學の話などを砂の上に座つて語つた。用意して行つたウキスキーはわけも無く空になつた。

と、突然、三人の話が小さな沈黙に出會した時、野間さんは突つ立ち上つた。そして兩手を空虚に向つて差し擴げた。

「WAHA!」

野間さんは體全體から咽び出たやうな意味の分らぬ叫び聲をあげた。

「WAHA」

二人もすぐそれに和した。

大きな三人の叫び聲の波動が、波の上へも空へも廣く深く擴がつて行つた。そしてまだその喚聲の餘韻の消えぬ時であつた。

野間さんは帶を解いて眞つ裸になつた。そして水汀へ向けて一散に走つた。

「おい行くぞッ、さよならア!」

「何處へ? おい。」

と酔つてゐた二人が呆氣にとられて云つた時には野間さんの姿はもう波の中にあつた。

月光に輝らされた艶々しい天鷲絨のやうな波の中をだん／＼と沖合へ野間さんの體が動いて行つた。

真白い野間さんの右手が波の上に出た。

「おーい。」

と同時に濱の方を向いて叫んだやうであつた。

「おーい。」

濱の二人も應へた。

ほんの一時の感興からだと思つてゐる二人は元氣よくそれに應へた。

然しいつ迄経つても引き返す様子が見えない。遂には姿さへ認め難くなつた。

「おやッ！」

と氣がついた二人は、はつとして顔を見合はせた。

「おーい。」

「おーい野間君！」

と周章てて聲を張り上げた二人に應へる聲はしなかつた。

野間さんの姿はもう一切見えなくなつて、波は靜かにその面に月光を受けてゐた。

二人はどつかと尻餅をついた。

「おーい。」

未練がましくRが再び立ち上つて叫んだけれども、野間さんも、波も、月も、島も、灯も總ては應へなかつた。

さうして野間さんは死んだ。

	X								
		X							
	X		X						
		X		X					
	X		X		X				
		X		X		X			
	X		X		X		X		

峽風氏は語り終ると唇を嚙んで俯いた。

順吉は涙を一ぱいに浮べてゐた。然し彼一人が涙を催してゐるのではなかつた。

峽風氏も、夫人も、おつうさんも、野間さんの遺兒の満津子も、泣いてゐた。

順吉は八時過ぎに峽風氏の家を辭して神樂坂の通りへ出た。

本郷の東片町の寓居先へ歸ると云ふ満津子も一緒に峽風氏の家を出て、順吉と並んで肴町の傳

留場の方へ歩いて行つた。

流れるやうに行き交ふ人の群に交つて順吉はまだ野間さんの事を思つて胸を濕らせてゐた。

「満津子さんは急ぐの？」

「いいえ。」

「ぢや歩きませんか。」

「え。」

神樂坂を突き抜けて二人は牛込見附の方へ出た。

「時々遊びにいらつしやいね。」

「え。」

「家には妹も居ますから。」

「え。有り難う。」

順吉は満津子の胸に満ちてゐるものを、はつきりと感ずる事が出来た。満津子も順吉の心に動いてゐるものの姿を察知する事が出来た。

順吉は、死んだお十和さんや、小さかつた頃の満津子に關する思ひ出をしみじみ語つた。彼の話の中では、死んだお十和さんも生きてゐた。幼い満津子の姿も判然と姿を現はした。

「僕はさうして考へてゐると、貴女と僕との間には宿命的な結ほれが有るやうに思へるので

す。」

順吉は實際にさう感じてゐた。
「妾どれだけか貴方にお眼にかかる日を待つてゐたでせう。本當に妾今嬉しい氣持で一ぱいになつてゐるんです……」

満津子は順吉を臆乍ら覺えてゐた事、そして峽風氏から順吉の事を聞いて以來誰にもましてなつかしく思つてゐた事などを語つた。

「今夜の僕の頭には詩的な情操と、幸福の愉快と、神秘に對する敬虔な戦き——いや何と云つたらいいでせう。全く、いや、全く愉快なのです！」

順吉は自分でも制しかねるやうな熱情的な口吻で云つた。

「妾もそんな氣がしてゐるのです！ 本當に嬉しいやうな……」

「野間さんの話に感激してゐるのか分らない、いや、それ以上貴女に遇へた事が斯う迄僕を愉快がらせてゐるのかも知れない。貴女の中には野間さんもお十和小母さんも皆有るんだから……」

吸ひ寄せられるやうに、満津子の體が彼にびつたりと寄添つた。

「幸福の夜！」

彼の熱情の裏を、さうした言葉が幾度となく來往した。

彼は空を仰いだり、地に眼を落したりした。

「満津子さん、きつと遊びに來ますねえ。」

「え。」

水道橋から本郷三丁目の方へ出て、交叉點の處で、二人は何時の間にか取り合つてゐた手に堅い握手をさせて別れて行つた。

「兄さん左様なら！」

満津子は、怯えたやうな聲で始めて兄さんと云つた。

順吉は時々満津子の姿を振り返り乍ら大股でスタ／＼と湯島の方へ歩いて行つた。

第 五 章

家へ歸ると九時に近かつた。

順吉は、満ち來る潮のやうにひたく／＼と彼の心を膨らますやうな幸福の愉悅に足どり迄輕うして門の内へ入つて行つた。

恵まれたるもの。

少年の時に、煙の如く消えて行つた戀人——幸福——が、再び、その夜の握手によつて確實に自分に還つて來た事は、充分自分の運命を恵まれたるものとして考へるに値する事であつた。

彼は、自分の生活に一つの清新な力が加はつて來た事をはつきりと感じた。そしてその力は、彼の心の外部に迄勢よく溢れ出て、彼に接する他人を迄幸福に潤さすにはおかない異常な力を持つたもののやうに思はれた。

薄く汗ばんだ自分の掌からまだ消え去らぬ満津子の掌の感觸を思ひ出しながら彼は胸の底から突き上つたやうな大きな微笑を顔全體に泛べた。

恵まれたるもの。

順吉は、軽く口笛を吹いてみたりした。

玄関に入ると、ふと見慣れぬ履物が彼の眼を惹いた。

征目の通つた新らしい桐の下駄と、太い鼻緒の脂染みた古い麻裏草履とが、格子戸から流れ入る軒燈の光のなかに浮いてゐた。

新らしい桐の下駄と、古い麻裏草履、その奇妙な対照が何となく彼の注意を惹いた。

「誰が來てるんだらう？」

順吉はちよつと小首を傾けたが、新らしい桐下駄の客は伊澤だと云ふ事が断定出來た。鼻緒の好みと云ひ、相當の値段を踏んでゐる具合と云ひ、伊澤のものと断定するのは容易であつた。

伊澤は、順吉と同じく×大學の文科を出た男で、その頃漸く、文壇と云ふ部屋の扉を開けて半身を内部に乗り入れたばかりの新らしい作家であつた。

日本橋の呉服屋の次男であつたが、家業の方は彼の異母兄が襲いで、彼は自由な作家生活を送つてゐた。

學校時代には「女王の情人」と皆から呼ばれた男で、何となく女性的な優肌の處が體つきにも

態度の上にも匂ひ出てゐた。

短く剃り上げたもみあげの上に、癖の無い長い毛が生え揃つてゐて、柔い感情の所有者らしい彼の性格を現はす處の柔和さうな眼はいつも靜かな微笑を含んでゐた。

むだの無い筋肉の暢達な發達が手傳つて、學校を出てからの彼は一層美しい男になつて行つた。伊澤と順吉との交遊は學校時代からのものであつたが、順吉の一家が東京に移つてからは殊に深く出入りするやうになつた。そして近頃では日に一度か二度か必ず順吉の家に彼は姿を現はした。

順吉は、伊澤が足繁くやつて來るのは單に自分との交友關係以外に、別の重大な原因に依るのである事は充分知つてゐた。

それは美津枝であつた。

そして美津枝も同じやうに伊澤に、單なる兄の友達と云ふ以上の感情を持つてゐる事も知つてゐた。

然し、順吉は、極めて自由に、善意の限りを持てる傍觀者として二人の戀を見てゐた。干渉がましい事の一切を彼は棄てた。たとへ、伊澤と云ふ男が順吉には不愉快な男であつたとしても、

彼は、妹の戀に對して何の干涉をも加へなかつたであらうが、實際に於て、伊澤と云ふ男は、彼の好感を喚び起す方の男であつたので、彼は二人の戀の順調な生長と、幸福なる進展とを祈つてゐた。

「それにしても美津枝の心には椎目は影をとめてゐないのであらうか。」

彼は、伊澤と美津枝とが、許されたる戀人同志として睦まじく散歩に出て行つたあとなど、ふと、そんな事を考へる事もあつた。

玄關の桐の下駄は、その伊澤のものだ、と順吉は見當をつけた。然し一方のその古い麻裏草履の主は皆目見當がつかなかつた。

狭い式臺に腰をかけて、猶もその疑問の麻裏草履を見ながら、白靴の紐を解くと、順吉は障子をあけて入つて行つた。

「あ、お歸りなさいませ。」

次の間からお峰婆さんが出て來て彼の帽子をとつた。

「あ、今歸つた。」

順吉が軽く頷くとお峰は、彼の晝間出かけて行つた目的を知つてゐたのか、待ち設けてゐたか

のやうに、彼の横顔をいけ／＼と覗めて云つた。

「あの、やつぱり満津子さんでござんしたかの。」

「なにが……お前は又どうしてそんな事を知つてゐるんだい？」

順吉は、何も知る筈の無いお峰婆さんがそんな事を云ふのでちよつと怪訝さうな顔をして訊き返した。

「……………」

お峰婆さんは、ちよつと當惑したやうに顔を外らして黙つてしまつた。

「美津枝が喋舌つたんだね？」

「……………」

「さうだらう。」

「へえ。」

お峰は訊問を受けてゐる罪人のやうに長つた語調で頷きながら、まだ氣にかゝるやうな顔つきをして、

「あの、満津子様でしたかの。」

と又訊いた。

「あ、満津子だったよ。そして會つて来たよ。」

順吉は、消え散らぬ幸福の感情に柔く包まれてお峰に答へた。

「あ、それから、誰が來てるんだい？」

「お客様ですか？」

「あ。」

「あの、伊澤さんと、もう一人は誰か知りませんで。」

「ふん……誰だらうな。伊澤と一緒に來たのかい？」

「いえ、伊澤さんはずつと前から來とられます。今來られたばかりですが、職工さんのやうな風でした。それに險しやうな顔をして、汚ない足でどんく〜と二階の方へ上つて行かれましたが……」

お峰は、その來客の無遠慮な態度を非難しながら思ひ出してゐるやうだった。

「さうか。」

順吉は、想像もつかないその來客に不審を抱きながら、靜かに重い足どりで二階へ上つて行つ

た。

彼は二階へ駆け上ると自分の書齋へ顔を出した。

案の通り伊澤が來てゐた。

美津枝も一緒にゐた。

お峰の云つた「顔の險しい來客。」は、巡查の穿いてゐるやうな白い洋袴を穿いて、素肌の上へ同じ上着を引つけて、如何にも勞働者らしい脂染みた汚れを服に滲ませて座つてゐた。

美津枝とその男とは何か話してゐるらしくつたが、順吉が入つて行くと、その男は、お峰の所謂險しい顔をあけて彼を見た。

順吉は、やア、と軽く挨拶してその前に座つた。

妙に重々しい空氣が部屋を占領してゐるやうだった。それはその男の險しい顔が醸し出したものらしかつた。

「誰方でしたかね。」

順吉は訝しげに訊いた。

その男は靴下も穿いてゐなかつた。おまけに跌座を組んでゐた。

「忘れただらうねえ。」

その男は妙に感慨深さうに云つた。と同時に、

「兄さん、椎目さんですよ。」

と美津枝が云つた。

「えッ、椎目さん！」

彼は殆んど意外だと云ふやうに叫んでも一度その男の顔を見た。

髪の毛は長く、長くと云つても伊澤のやうに手入をした美しい髪では無く、鉢も入れず湯も潜らせぬ蓬髪で顔の色は一體にどす黒く、冷酷さうに見える程鋭い眼が氣味悪く光つてゐた。

ぢつと瞞めると、中學時代の椎目の面影が探り出せぬでも無かつたが、早速にはその男が椎目だと信じられぬ程の變り方をしてゐた。

「あ、椎目君だつたのか、そりや失敬した。」

順吉は斷るやうに云ひ乍ら、

「随分久し振りだなア、然しよく來て呉れた。」

彼は漸く氣を崩して云つた。

そしてその男が椎目だと知つた時順吉は椎目の上に流れた十年近い歲月が此の男にどんな運命や境遇を押しつけたかを一瞬間に感得した。

「不幸な男だ。」

煎じつめた感じはそれであつた。

牛乳配達をしながら、苦學をした男、そして自分の妹の美津枝を戀しながら、性格的な自己卑下から、それを棄てて行衛不明になつた男——其處で順吉の椎目に對する記憶は途切れる。そして今、眼の前にボロ／＼した労働服を素肌の上へ引つけて険しい程の顔をして現はれた男。

此れが椎目君か？

彼はも一度自分の感覺を疑ひたい位であつた。

椎目の眼には意地悪く僻んだ反抗強い光と、何事を見ても満足出來ない不平と、冷嘲の光とが充ち満ちてゐた。

「有吉君、僕失敬します。」

伊澤は立ち上つた。

「まあいいでせう。」

と云つたのは美津枝であつた。

椎目の眼が美津枝のさうした姿の上に異様に輝いた。

「ま、いいぢやないか。」と順吉も云つたが伊澤は、少し用事もあるからと云ふので階下へ降りて行つた。美津枝も降りて行つた。階下では美津枝と伊澤が何か話してゐるらしい聲が暫くしてゐるが、どうやら伊澤と一緒に出て行つたらしい様子であつた。

「此男が美津枝を戀した男かしら……」

順吉は椎目の現在の姿から、昔の感情強い少年の彼を探し求めるやうにしたが、彼の現在から、さうした美しいもの柔いものは總て消え去つてゐた。

順吉は手を拍いてお峰を呼んだ。

「麥酒か何か持つといで、え。それから秀則はどうしたね。」

「夕方から又お遊びに出かけられました。」

「ふん、仕様のない奴だなア、折角古い友達が來てるのに……」

順吉は秀則の同級生であつた椎目に、秀則を會はせたらと思つたので口惜しさうに呟いた。
「お峰、お前は知つてるだらう、此の人を……」

「へえ……どなたでしたらう？」

お峰は首を捻つた。

「椎目君だよ。覚えてるだらう。」

順吉は多少叱りつけるやうに云つた。

「どいつも此奴も忘れてやがる。」と云ふ屈辱的な考が椎目の心の中を來往してゐるのに氣がついたから。

「はアはア、あの、うん、うん、さう、さう、あの方でしたか。」

お峰は老人らしい鈍な間の延びた領き方をした。

お峰は階下から麥酒を運ぶと、直ぐに降りて行つた。

「まア、一杯、全く久瀾だ！」

順吉は洋盃をとつてすすめた。

椎目は無言でそれを受けた。

物も云ひ度くない程陰鬱さうな影が彼の體中に忍んでゐた。

「君も大分變つたね。其後どうしたんだ。久し振りだ大いに聞かう……」

順吉は快活に云つた。

「話したつてつまらない事ばかりの連続さ！ ふん。」

椎目は投げるやうに云つた。

「いや、そのつまらない事がききたいのさ。」

「小説の材料になるからねえ。」

椎目は妙に皮肉つた。

「君もなか／＼皮肉屋になつたねえ。」

順吉は親しみやすい感情を以て進んで行かうとする自分の心持に對して、椎目の打ちとけぬ態度や傲岸な様子が氣に食はなかつたので多少むづ／＼として云つた。

「嘘つきよりは皮肉屋の方が取り柄だからぬ。」

椎目は順吉がむづ／＼としてゐるやうが、どう思つてゐるやうが更に構はずに云つた。

「それもさうだね。」

順吉も調子を合した。

「君はあれから何處へ行つたんだい？」

順吉は、僻み切つたやうな椎目に多少の嫌悪を感じながらも、何か訊いて見たいものが椎目の中に潜んでゐるやうな氣がした。

椎目は盛に呑んだ。

彼の眼は据つた。

何もかも嘲つてゐるやうな眼の光の中には、自分自身をさへ嘲り蔑んでゐる絶望的な影が潜んでゐた。

「聞いてくれるかい。」

「聞くとも……」

椎目は次第に粗野な態度を示し乍ら、

「美津枝さんに戀文ラブレターを上げた頃は是でも少しや人間らしかつたんですがね。へん、もう駄目ですア。」と、世の中に望と云ふ望を失つた放浪者が一句一句に他人と自分とを嘲りながら、他人事のやうに身の上を話す時のやうな調子で語り出した。

「僕ア朝の暗いうちに呉を出しましたよ、旅費を作る爲に本も何も賣つちまつてね、信玄袋一つが財産さ。その時まだ君の家では寝てゐたよ。金持つて甘え朝寢をしてやがると今なら思ふ處だ

が、まだ子供さ。僕は脊中に引つ擔いだ信玄袋を道路におろして腰をかけた。裏口から君の二階を見上げて、此の中に美津枝さんが居るんだがなア、と思ふと殊勝にも涙がぐんぐん湧き上りやがつて、動くのが嫌ひになつちまつたもんだ。ヘンその頃は、可愛いもんだ。貧乏なばつかりに好い加減に世間から蹴つ飛ばされた事も感づかずに、惚れた女の爲に泣く涙があつたんだからね。フン。」

椎目は言葉の調子を亂し乍ら、時々、フン、と鼻の先で弾いた冷やかな笑を言葉の間に挟んだ。「がいつ迄さうしてつたつて際限が無え、と立ち下つて又やつとこさで信玄袋を擔ぎあけたんだ。そして此の大馬鹿野郎が何て醜態だつたらう。人通りが無えのを幸に、大聲をあけて、美津枝さん、美津枝さんと泣きぐんぐん叫んで見たものだ。フン。そのうち停車場へ來ると、恰度汽車がある。貧乏人は可哀さうなものだ。汽車よりは汽船の方が運賃が安いなんてな事を後生大事に考へてるんだからねえ有吉君、しかもさ、それが色戀をやつてる時にそんな了見を出すんだからたまつたものぢや無からう。それで吉浦迄汽車へ乗つて、吉浦からは船ときめたんだ。が吉浦へ來て見ると何の事だ。船が無えと來る。がんときたから波止場の石の上へ寝て考へたね。何の爲に俺ア神戸へ行くんだ？ 馬鹿野郎神戸へ行くのに目的があるもんけ、呉を出て行くのにさへ

目的が無えんぢやないか。唯行くんだ。行くんだ。さうぢや、さうぢや考へるとたまらなくなつたね。そのうち尼ヶ崎汽船の菊水川丸かと云ふ船が來やがつたね。」

椎目は、順序だつて物を云ふ事さへ出來ぬ程心が荒んでゐるらしかつた。僕と云ふかと思へば俺と云つたり、東京の言葉かと思ふと、何處の訛とも知れない調子の言葉を挟んだりした。そしてぐんぐんコップをあけながら酔と共に自ら自分の興奮を制しきれぬらしく立て續けに喋舌つて行つた。

「俺だつて其頃は詩人だ。フン、貧乏して詩を作る無茶者だつたんだからなア。船へ乗り込むと七月中旬の朝だ。朝の陽を受けて匍ひつくばつてゐるやがる江田島の姿が莫迦に嬉しいんだね。」さア詩だ。裸で道中をして詩を感じるんだ。えらいもんだよ。船尾の方へ行くと、水がだんだん逃けて行きやがる。寂しくなつたね。欄干の錆だらけの汐臭い鐵に凭れて犬つころのやうにしぐんぐん泣く事さ。フン。麗女島を廻ると呉が見える。おまけに山の上にある學校が見える。あの窓が俺の教室だつた。あの窓の側の机には誰が居る。あの机の横にはインキのねえ壺がいつもぶら吊つてゐるやがつた。美津枝さんの居るのはあそこいらだ。あれはどこだ……と下らねえ事をぐんぐん廻れよいと、こぼいぢや無いが、めそぐ考へたのだね。フン。手前が裸で喰ふに困つた

旅鳥になつてやがつて、まだそんな味噌を買ふ足しにもならねえ事を考へてやがつたんだからねえ。可愛いもんさ。さうしてどうだとう／＼船底の三等室へ飛び込んで信玄袋の上へ碌でもない顔を押つけて泣き出したぢやねえか。エンヂンの音がトン／＼響いて空きつ腹にこたえつくその時二十三四の男が猫撫聲を出して、もしもしどうなさつたのですと云ふ。俺は嬉しくなつたね。空きつ腹へ牛肉を叩き込んだより嬉しかつたね。へえ腹が少し痛いんですと云つて嘘を云つてやると仁丹を呉れたね。俺は信玄袋の底から例のハモニカを取り出して、リノリウムを敷いた上甲板の運動場へのさばり出て、好い加減に陽の暮れた眞黒つけの海を見乍ら吹きまくつた。星が出た。海が薄ら光る、ひよいと見ると、仁丹を呉れた男が後に立つてる。俺は慌ててハモニカを引つ込める。

『暗い夜ですね。』

と親切さうに云ふ。

『はア。』

と俺は答へる。

『何處へ行くんです。』

『神戸へ。』

と云ふ具合さ。そこでもう直ぐお友達さ。高松へ船が寄港する頃には二人共身の上話迄済ましてゐるんだから人間も偉いもんさ。其奴ア久留秀夫とか云ふ奴だつたがね。何でも俺は神戸の外人の商會オライスに居るから世話をしやうと云つて呉れる。俺は萬事お任せしますと云つて腹巻の破れ財布を握つたね。此奴俺をこまかすのぢや無いかと思つたからさ。

それから俺が美津枝さんの話をする。奴が、九州迄女を訪ねて行つての歸りだなどと話す。神戸へ着いて見ると成程奴の云つた通り奴は佛蘭西人の會社の社長の處へ一緒に住んでゐてその會社へ勤めてるんだ。俺はまア事務員見習と云ふ格で奴の店へ勤めて、せつせと毛唐共の財布を肥やす爲に働いてやつたんだ。追ひ使はれてね。十九の時に久留とお女郎買ひに行つたねえ。もう立派なものさ、その頃は毛唐共の嘗めつ滓を三三十兩貰つて月給取さ。ヘン。三十兩の月給取さ。其處で可愛い女郎に出會したね。俺より貧乏で惨めな若い女郎さ。俺は毛唐共が絞り上げた滓の三十兩をわけもなく、俺より惨な奴に注ぎ込んだね。奴が喜ぶ。そりやさうさア。誰だつて嬉しからうね。處が奴が病氣ばつかりしてやがるんだ。心臓の痼疾を持つてやがつてね。おまけに脚氣迄踏ん張り出して儲はしない。病氣と來るので樓主奴、腐つたやうな煎餅布圍へ奴を巻き込ん

で板の間へ寝せて置く。俺ア可愛想になつて、一週間程奴の傍で介抱させて貰ふやうに樓主に頼んだ。まだ十九だ。可愛いやね云ふ事が。藝術屋の言葉で純とでも云ふのだらう。つまり初心つこのさ。向ふでは笑つて承知しやがつた。俺はその板の間で奴の介抱を一週間程續けたのさ。勿論店はごまかして休んでね。處が奴の喜びやうたら無い。死んでも忘れないと云つてポロ／＼泣く、木乃伊のやうに瘦せた顔に涙ばかり出してやがるんだ。そのうち他の女郎共が俺のお人好しを見て、やれ何を買つて来てくれのどのと云つて追ひ使やがる。しまひには風呂の水迄汲ませやがる。そりやさうさ。金の一文も出さずに飯を食はせて貰つて可愛い瘦せ病人の介抱をする特權を與へて貰つてゐるのなものなア。ヘン。處が俺もいつ迄もさうしては居られぬので一週間に戻つて來た。三日目に行つたら奴は死んで居やがつた。それから考へたね。病人だもんだから奴等が殺しやがつたんだ。しかもその病人には奴等がしたんだ。俺は貧乏故に女郎になつて好い加減に絞られた揚句の果に病氣したからと云つて酷く殺されたそいつが可哀さうでならなかつた。俺はそれつ切り女郎買をやめた。覺えてろ手前共、俺は齒を喰ひしばつて、俺の仇とすべき連中がどう云ふ種類の奴だと云ふ事を毎日毎日考へ續けるやうになつた。

その次に俺に惚れたのが、社長の甥とかで、會社の輸出課長をしてゐた毛唐の家の下婢なんだ。

此奴も貧乏故にこそ奉公してやがつたので願る俺の志を壯として御出世を待つ、それ迄は共稼ぎと來たんだ。哀れな妄想狂よ！　だ。貧乏人の爲に、人道の爲にと妄想を逞しうしてゐた年少の革命思想家がどうだ。そのお多福の手にのせられて毎日毎日密會ばかりしてゐる有様は。ヘン。戀なんて南京虫を捕へた程も値のあるものぢやねえんだが、その時は大馬鹿の俺だ。末は夫婦と云つて躍り廻つて喜んで、せつせと自分を磨り潰して會社の親玉が別莊をこしらへる金や妾を置く金を稼ぎ出してやつてたんだ。處がそのお多福奴、貧乏なばかりに、主人公の毛唐に札ピラ切られたのに迷はされてとうとう一緒にやりやがつたんだ。そして一緒に上海の支店へ行くと來たんだ。金で俺を踏み潰しやがつたと思ふとその主人公が憎くてやり切れねえのだ。一體その金は誰が稼ぎ出したんだ、店員共が、ヘン、哀れなる店員共が稼ぎ出した金ぢやねえかと思ふと、仇に刀を貸してその刀で打ち切られたやうに思はれたね。でとう／＼俺は奴が上海支店轉任の出發の前の日にやつつけたのだ。がやつつけ損つてとう／＼暗い穴へ暫く押しこまれると云ふ仕儀だ。しかも面白い事には俺が毛唐を切つたと云ふので貧乏人共が流行唄を作つて唄ひ廻つて飯の種にしたと云ふぢやないか。俺は暗い處で考へた。人間共が一人一人憎うなつた。今に見ろ今に見ろ、どいつもこいつも………と思ひ乍ら三年動めて世の中へ出た。神戸も厭になつて流れ流れ

て江戸三界迄来て、仇討ばかり考へては貧乏し、工場の職工を煽てたと云つては放り出され、おいおい確りしろなア兄弟なんて貧乏人共と腹を合せて談合の最中をふん捕へられたりして今ぢや此の有様さア、はつはつ、どいつもこいつもだよ。」

権目は語り終ると脂染みた洋袴の膝のあたりを叩いた。

「ふーん、さうか。」

順吉は魔されたやうな聲をあけた。

「そして今何處に居るんだい。」

「貧乏人の居所なんてきまつてるものかい。塵埃まみれの工場の隅が、路次裏の掃溜のやうな板敷か、さもなきや土の底か、監獄か位なものさ。その位の所を行つたり來たりしてるのさ。」

順吉は権目の言葉の裏から、彼の經來つた道と、その道に落して來た陰影とを充分に想像する事が出來た。

「ぢや今何處と云つてきまつてはゐないんだね。そして何をやつてるんだい。」

「仇討の稽古さ。」

「誰に？」

「幸福な者共に向つてさア。」

権目は本能的な凄い眼をした。

順吉は彼に向つて云ふべき言葉が出なかつた。

「や、失敬した。」

突然権目は立ち上つた。

「ま、ま、いいぢやないか。どうしたんだ。」

順吉は餘りの突然に驚いて云つた。

「や、どうしても無い失敬するんだ。折角好い夢を見給へ。」

権目はどん／＼立ち上つて階下へ降りて行つた。

順吉もそのあとへ隨いて降りた。そして草履をつつかけた彼のあとから追ひすがるやうにして

「君イ、又來給へね。そして是は何だけでも……」

とポケットから探り出した五圓紙幣を握らせやうとした。

「何だい。」

「僕の友情だ。」

「ふん。」

権目は彼一流の冷笑を鼻の先に散らした。

「君も幸福なんだな。まあ好いよお金は大事にし給へ有り難いからな。」

冷やかに云つた彼は両手を洋袴のポケットに突つ込んだまま身を翻すやうにして横路次へ飛び込んだ。

「おい、権目君！」

順吉はその紙幣を握りしめた儘叫んだが、彼の姿は一目散に走つて瞬く間に消えた。

「屈辱だ！ 屈辱だ！」

権目は一人になると右手をあけて髪の毛を掻き梳つた。

「ふん、奴等のする事はあれだ。友情だと呟いたな、友情も温情もあるかい。」

彼は何の爲に順吉の處へ行つたのか自分でも思ひ出せなかつた。

その翌日満津子がやつて來た。

お峰は、満津子が有吉家の家庭に加はつた事を喜ぶらしかつた。來る人間も來る人間も大抵は男ばかりで女の出入の無い家庭へ唯一の女性の満津子が入り出した事はお峰の心に一種のう

るほびを持たせるらしかつた。

満津子と美津枝も仲よく話し合つた。

順吉兄妹と満津子とが一緒になればきつと明るい談笑が湧き起つた。お峰迄老人の癖に除外されずその仲間入りをした。

権目はそれつ切り顔を見せなかつた。

その翌年の春になつてから、満津子にとっては親にも等しい片山峽風氏の夫人が遅ればせの流行性感冒で亡くなつた。

順吉兄妹も満津子もその葬ひに連つた。

峽風氏は夫人の死後一ヶ月許りして、夫人の郷里の宇都宮八家を疊んで退いた。

それから間も無く順吉は左胸部に折々疼痛を感じ出した。

無暗に水氣の多いものが欲しかつたりしだした。

「兄さん、お顔の色が悪いわよ。」

美津枝は心配氣に兄の顔色を見ながら云つた。

「うん、何だか胸が痛いやうだ。」

彼もそつと胸を撫でて見たりした。

「一度お醫者様へ行つて御覽なさいな、え。」

美津枝に侷められて順吉は家を出た。

醫師は肋膜炎だと云つた。そして相當の處迄病狀は進んでゐるから、入院して靜かに療養した方が宜いと思ふと附け加へた。

彼は早速入院した。

もう夏だと云つても宜い程太陽の光の強い午後であつた。

順吉は窓際の方にある寢臺の上に取り上つて眩しい外光に眼を注いだ。

耳を澄ますと、蜂の翅音のやうな睡氣を誘ふ幽かな音がどこからか聞こえて來るやうであつた。病勢は意外にも重い方へ進んでしまつた。元氣さうであつた頬が削けて、兩手の指は血の氣を失つてしまつて透徹るやうに蒼白くなつてそして萎びてゐた。

階上の彼の病室からは、お茶の水橋を隔てて駿河臺一體の高臺が見えた。

弟の秀則と、妹の美津枝と、美津枝の戀人の伊澤と、順吉の友人の一人で田村とが彼の寢臺の前の長椅子に並んで腰かけてゐた。

「大分瘦せましたねえ。」

伊澤が左の足を右膝の上へX字形に抱え上げながら、寢臺の上の順吉を見て云つた。

艶々しく櫛目の立つた彼の長い髪の上を微かな風がそよ／＼と吹いて行つた。

「うむ、大分瘦せた。」

順吉はさう云つて直ぐ又眼を閉じて萎びた指を膝に上げた。

それつ切り妙な沈黙が続いて、伊澤は膝の上へ手にしてゐた洋書を衝いてその上へ顔を載せたまま眼を外の方へ向けてゐた。

がその沈黙は田村の輕燥な聲に破られた。

「だが、斯うして特等室で病を養へる事は特權的幸福だねえ。外國のどの革命家の傳記の中にもこんな贅澤な病室で病を養つた事などは見えないからなア。」

田村は手を伸ばして、新しいシーツの端を弄り乍ら、肩の隅に皮肉な微笑を浮べて云つた。

伊澤も秀則兄妹も、まるで順吉に對して敵意を持つてゐるやうな田村の言葉に驚いて彼の顔に眼を注いで一樣に不快な顔をしたが、順吉は田村と云ふ男の平生を知つてゐるので黙つて苦笑した。

何等かの意味で自分より優越した人間に對して、感情的な嘲罵を浴せる事だけで革命家を自任してゐるやうな、可愛い單純な革命家の田村を知つてゐる順吉には、却つてそれは微笑まれる事であつた。

「田村がやり出したな」順吉は胸のなかで呟いた。

何處か此の男は椎目に似てゐた。貧しい育ち方と、不足勝な運命に苛まれてゐる處とが。けれども椎目程根強い獐猛さも無ければ熱情も無く、時々トキトキの小感情に自分を投げ込んで行つて痛快がる程度の男であつた。

「だが、仕方が無いもの、一日も早く健康を取り戻したいからなア。」

順吉は寢臺の脚の處にある陶器の痰壺に痰を吐き乍ら幽かに咽喉を鳴らした。

「さうだね。何せ君は救世主だ。日本の社會は一日でも早く君に健康を取り戻して貰はねば立ち行かん状態にあるからねえ。明日にも米が無くて、働かうにも働き口は無し、痩せ細つた萎れ茄子のやうな乳房に餓鬼は吸ひつく。厭な咳は出る。餓と死を待つてゐる窮民共も、君の健康さへ恢復すればまのあたり救へるからねえ。ハツハツ」

田村は立て續けに喋舌つてをいて引きつけるやうな短い笑を洩らした。田村を知りぬいてゐる

順吉も流石にむつとした。

「君はニヒリストだ。しかも悪い意味の……」

順吉がさう云つた時、伊澤が田村の肩を叩いた。

「君、君、田村君、君は餘り唯物的だ。人間の幸不幸をその位な程度で判断しちや困る。」

「餘りに唯物的だつて？ 君は詩人だよ。おまけに金持の坊ちやんだ。飯が食へない人間に幸福も不幸もあつたもんぢやない。」

田村は、君なんかの知つた事ぢや無いと云ふやうな顔をした。

「ぢや衣食さへ足れば人間は幸福だと云ふのかね。」

「勿論さ、先づ衣食足つて禮節だ。支那人が三千年昔に云つてらア。」

「だがね、人間自身が生れながらにして持つてゐる……」

「分つてるよ、宿命とか人間悲哀とか云ふ奴だらう。そんなものは見ずに過せば見なくつたつて濟む奴さ。現にそれを感じてる奴は廣い世界に幾人もありやしない。それはそれを感じる、いやむしろ捏造だね、故意に作成する連中が勝手に感ずる不幸さ。いや實際だよ、獨斷ドクワンでも何でもありやしない、飯を鱈腹食つたあとの無念無想境に悲哀も不幸もあつたものぢやない……伊澤

君、ちよつと火を借し給へ。」

田村は一寸言葉尻を押さへつけるやうに云ひ棄ててをいて、伊澤から煙草の火をかりた。そして煙草に火がつくなり、又續けて、

「え、君考へて見給へ、君に女房があるとする。そして二三人も子供があるとする。それで幾らうん／＼稼いでも養なへない。餓へさせてはならないと思ふから蟻のやうに夜晝忘れて働く。いや働くのぢや無い働らかせられる。さア精も根も盡き果てての末が病氣だ。その時の苦痛には理窟も糸瓜もなからうぢやないか。」

「いや私の云つたのはさうぢや無い。何にしてもです、さうした個々の例を離れて、今一步……」

と伊澤が焦慮り込むのをぐつと抑へて、

「だから、ちよちよつと待ち給へ。個々の例と云ふが個を離れて人類の存在が肯定出来るかね？ だから君達の云ふ事が永久に詩人の夢だと云ふのだ、抽象的に君達の作りあげた人類、實際の人類ぢや無いのだよ、夢幻の人類と何等かの交渉があると夢想し得ても、實際の人間共には何等の關係も無いと云ふ事になるのだ。」

「まるで子供の云ふ事だ！」

伊澤は腹の中で呟いた。

秀則は面白さうに聴いてゐるが、田村より更に皮肉な顔をして、

「要するに議論なんて是程下らないものは無い。」
と誰に云ふともなく云つた。

伊澤は秀則が云ふ迄も無く、強いて自分の意見を田村の前に固執しやうとする氣配は見えなかつた、相手にするよりは、黙つて自分自身の考に耽つてゐる方が餘つ程楽しいと云ふ風に見えた。微風と共に、特殊の甘酸い薬品の香が室内に流れ込んだ。

川向ふの斷崖の側面をお茶の水驛から出た院線の列車が水道橋の方へ向つて窓硝子をギラ／＼光らせて通つて行つた。

秀則は煙の出る煙草を挟んだ右手を語調に合はして動かしながら、

「お互に自分の主観を他人に押しつけやうとするから不可なのですよ。妾が好で妾が惚れて妾が苦勞すりや自由の權……と云ふ歌があるでせう。」

秀則のその硬ばらない態度や、妙な俗歌の節廻しなどが一同をちよつと微笑ませた。

「議論家に此の言葉を進呈しませう。いや僕の言葉ぢやない、アンドレーフだつたか、多分さうでしたらう、奴の言葉にこんなのがあつたんです。あらゆるものを否定する事によつて人間は象徴を信するやうになる。生活全體を斥ける事によつて人間は自らその辯護者となる。俺は今日に至るも人生に對して何等の信する所が無い。が俺は云ふ。此處に一個の人間あり、自ら考ふるま考へつゝ、しかもなほ生活する一個の人ありと、生活は偉大なり、生活は無敵なりと、ね、此奴はどうです。」

秀則は微笑ましい顔をして云つた。

「それぢや自分さへよければいいと云ふ事になるぢやないか。」

田村が直ぐ口を挟んだ。

「いや、それは違ふ、もつと別の意味がある此の言葉には……」

秀則は、とてつも無い事を平氣で云ひ出してむきになる田村の様子が可笑しくなつた。

その時廊下を迂るスリッパの音がして、恰度順吉の病室の前でとまつた。

一同は暫く話をやめて其の方を見た。入つて來たのは學校の歸りらしい紫色の袴をつけた満津子であつた。

「まア義姉さんいらつしやい。」

美津枝は椅子から立ち上つた。

美津枝は満津子を義姉さんと呼んでゐた。

みんなは満津子に對してそれぞれ挨拶を交した。

満津子は眞先に順吉の顔色に眼をつけた。

昨日よりも顔色が悪いやうに思へた。

「大變顔色が悪いのね。」

「うん、なアに大した事も無い。」

「貴方、起きていらつしやるのが悪いのぢや無くつて……」

うんさうぢやないと云ひながらも順吉は満津子に助けられて體を横にした。

秀則は煙草の喫殻を窓の外へ投げ棄てながら、用村を呼びかけた。その態度の中にはドンキホ

ーテ式革命家の田村を蔑すむ様子が明らかに見えてゐるのを他の者は感じた。

「でね田村君。」

秀則は椅子からちよつと乗り出して、

「僕の云はうとするのはだよ。」

満津子は秀則の方へ向いて、そんなに高聲で騒いで兄さんの病氣に觸りはしませんか、と云つてゐるやうな眼附をした。

「でね僕の云た事は簡單だ。」

秀則は又煙草に火をつけた。

「簡單は好い、總ての眞理は簡單過ぎる程簡單なものだ！」

田村は混ぜつ返した。

「おいおい、僕は眞面目なんだよ。」

「いや、僕も眞面目だ。」

田村はちよいと口を歪めた。

伊澤は、やつぱり物靜かに洋書を膝の上に立ててきいてゐた。

「で、僕の論點は確實です、餘りに簡單です。唯みんな酔つ拂へと云ふのです。貧乏人は貧乏に、宗教家は宗教に、戀をするものは戀に、革命家は革命に……どうです。僕の云ふ事が分りますかね。」

秀則は靴の爪先をコック／＼床に打ちつけた。

「分らない。唯横着なデカタンの投げ棄て言葉にしかうけとれない。」

伊澤が始めて云つた。

彼の戀人の美津枝が、さうよ、と云つた風の眼をした。

「酔へと云ふ君の意味は、何もかも肯定しろと云ふ事だね。」

田村は伊澤の言葉にかまはず言つた。

その時白衣の看護婦と、醫者が入つて來た。

「廻診で御座います。」

皆はそこで話の棒先を折られて又黙つた。

そして醫者のやる事を見るときもなしに見てゐた。

「お話でもなさつたのですか、餘り昂奮なさつては駄目ですよ。讀書もその意味で禁じてあるんですから……」

醫者は最後にさう云つた。

「ね、それ御覽なさい、皆さんが大きな聲で喋舌つてばかりゐらつしやるから……」

と、満津子は枕を直したり、額を撫でて見たりし乍ら、皆を嗜めるやに云つた。

「ははア義姉さんに叱られちやつた。」

秀則は自分よりずつと年の少ない兄の戀人を揶揄するやうに云つた。

満津子はちよつと赧い顔をしたが、

「だつてそんなに必要でもない議論を、や／＼山のお猿さんのやううに病人の傍で喋舌るのは
好い事ぢやないでせう。」

「成る程ね。」

田村が云つた。

「女には戀人より大切なものは無いんだからね。お叱りは尤もだ。」

「ぢや失敬しやうか。」

伊澤が立ち上つた。

「まア、宜いぢやないか。」

と順吉は寢た儘で云つたが、田村も續いて立ち上つた。

「又來るよ。ほんたうに早くよくなつて呉れ給へ。僕憂な事を云つたが、要するに勇敢なる人

道の戦士有吉氏を激勵するつもりで云つたのだから悪くとらないで呉れ給い。」

田村は歸りがけにさう云つた。

「あ、そんな事氣にしやしないよ。又來給へ。そのうちには僕もよくなるだらうよ。」

順吉も別に悪くも何とも思つてゐないので快く答へた。

「兄さん、僕も歸るよ。又夕方來るからね。」

秀則も田村や伊澤と一緒に病室を出て行つた。

第六章

順吉が退院したのは、暑中休暇の爲に神戸へ満津子が歸つて行くその前日であつた。

満津子は、暑中休暇でも、東京にその儘居たいのが彼女の心一ぱいの願であつたが、毎年歸省する例になつてゐるのと、憎みながら、慈愛とも受けとれるやうな監督的な態度を忘れない磯部から歸省を促して來たので已を得ず彼女は歸つて行つた。

病院は一と先づ退院したものの順吉の體は完全にもとの健康體に復してはゐなかつた。然し次第／＼に日一日と健康を取り戻して行きつつはあつた。

「旅がしたいなア。」

順吉は頻りに旅がしてみたくなつた。

「何處へ行かうかしら……」

毎日そんな行先の土地を撰んでゐる時に、恰度神戸の郊外に居る安井から手紙が來た。

「君動靜如何、其後絶えて御無沙汰、君此の節御閑暇もあらば熱鬧の巷を去り西下有りては如

何。我輩もとより君の話相手たらざるは云ふだけ野暮。君を待つに天下の佳姫を列ね山海の珍を以てする底の藝當は學ぶべくもあらねど、杯底に蚊龍を描いて宵を徹して且つ飲み、且つ語る亦快ならずや、如何に。安井此の地に鵬翼をひそめて既に數年、時には訪れて呉れても罰も當るまい何々。安井生。」

安井の手紙は順吉に非常な好い感じを與へた。

「昔の儘の安井だなア。」

順吉はその手紙を手にした夜、幾度もそれを讀み返して舊友の面影をしのんだ。

殊に、満津子が神戸に歸つてゐるので一層神戸に對しての誘惑を感じた。

安井は、彼と同時に×大學を出た男であつた。

中學時代からの大酒飲みで、體格の素晴らしく立派な東洋豪傑肌の男だつたので、思想の上からは密接な交渉もなかつたが、お互に好感情を持ち合つてゐた仲だつた。

彼は卒業すると間も無く、神戸の市外の大石の醸造家へ養子に行つてゐた。

で愈神戸へ行くと決心すると、順吉は早速安井へ、その旨の電報を飛ばして置いて、其の夜の列車でたつて行つた。

汽車が三ノ宮驛へ着くと、安井がちやんと迎へに出て居た。

「やア久濶だなア。」

「やア、久濶だなア。」

二人は元氣の好い握手をした。

安井は順吉が、藝術家として、又社會××思想家として元氣の好い名を走せるやうになつてから、友達として以上に一種の尊敬染みた感じを持つてゐたので、順吉が來た事を此の上なく喜んだ。それに學校を出て以來醸造家の若主人として單調な生活を送つてゐる事が多少彼に退屈を感じさせてゐたので、順吉の來訪はその意味に於ても充分彼を喜ばせた。

順吉は、順吉で、安井の今行つてゐる家が、安井と親類續きで安井の妻になつてゐる娘と云ふのも安井とは従兄妹になる事などを知つてゐるので何となく氣安い心持がするのであつた。

「まア、ゆつくりし給へ、夏の攝津灘は格別だぜ……それはさうと例の君の戀人は歸つてゐるんださうだね。」

「あ、此方へ歸つてゐるんだ。が君が知つてゐる通りちよつと面倒な關係で公然訪ねて行く事が出来ないのでは或は君の家を利用するかも知れないよ。」

順吉はさう云つて安井の顔を見た。

「大いに利用し給へ。是でも若主人だからねえ、絶対權さ。君の嫌な權力筋の人間だからねえ。但し家の中だけの專制君主だが、はつはつは。」

安井は大きく笑つた。

二人は阪神電車の終點へ出て、其處から電車へ乗つた。

「神戸、神戸、何だか感じの好い名だね。」

順吉は窓から吹き入る朝の風に帽子を脱いで、髪の毛を弄らせながら云つた。

「満津子さんのゐる町だからだらうよ。見知らぬ旅の町で、戀人に似た少女を見出した時、私は涙ぐむ程嬉しい。見知らぬ旅の町で、故郷の山に似た山を見出した時、私は地に跪いて泣きたい程嬉しい。けれども寂しい嬉しさだとか云ふ詩があつたねえ。況んや似た處ぢやない、眞正の戀人の居る町だからねえ、ハツハ。」

安井は飽く迄快活に笑つた。

郊外に進むに随つて眺望は美しくなつて行つた。

六甲山一體の山腹には赤い屋根の洋館が濃い緑の中に、透明な朝の陽を受けて清新な感じを示

してゐた。そしてその山裾が次第に平かになつた地に村落や町が生き生きとして點在してゐた。その果には朝の陽の光に紺青の美しさを増した攝津灘も見えた。

脇ノ濱、岩屋、その二つの停留場を過ぎて、大石に着いた。

「此處だ、君。」

順吉は安井に促されて小さな大石の停留場に降りた。

それから俤で二人は濱手の方へ降りて行つた。濱手に近くなるに随つて「××正宗。」とか「××の泉。」とか酒の名を書いた看板を揚げた酒倉や、酒造家のどつしりとした家構が並んでゐた。

安井の家は、其處らの酒造家中でも一番確りしたらしい構への家であつた。

「酒豪の安井が酒屋の養子になつた。」と云ふ事に就いて順吉は妙な皮肉を感じた。

「裏の座敷へ通して呉れ。」

安井は出て来た女中に云つた。

「まア脱ぎ給へ。」

やがて裏手の閑静な安井の居間へ通されると、安井の妻の幾枝と兩親が早速挨拶に来た。
「息子が色々お世話になりましたさうで……」

と母親らしい上品な人は、小さな丸髷の頭を疊へ押しつけるやうにして云つた。

「いいえ、私こそ此の度は……」

順吉は恐縮してばかり居た。

安井の妻の幾枝は二十二三の色の白い、愛嬌の好い、小賢しい教育を受けた人間には見る事の出来ない柔順な女で、安井の云ふがままに順吉の着換へ浴衣を持つて來たり、茶を運んだりした。若い女中が新來の客を珍らしげに見ながら妻君の手傳ひをした。

「君、僕を大分持ち上げて話してゐるね。息子がお世話になりましたには恐縮したぜ。」

順吉は稍あつて云つた。

「恐縮する事は無いさ。全くお世話になつたもの。がまアそんな事はどうでも宜い。風呂へ行つて來給へ。一風呂浴びてからまアまアだ。」

順吉は女中に案内されて、よく拭き込んだ長い廊下を踏んで湯殿の方へ行つた。

風呂から上ると、廣い座敷に酒の用意が出來てゐて、肌抜きになつた安井が障子をすつかり外した座敷から、すぐ眼の前の海の方をほんやり見てゐた。

順吉はどつかりとその傍へ座つた。

「あ、好い氣持だった。」

可成りに凝つた作りの庭の先は直ぐ砂濱になつて海に續いてゐた。

「なか／＼好い眺めだらう、尤も毎日見てゐると單調だがね。まアまア一つやらう。遠來の客だ。君を待つに天下の美姬を列ね、山海の珍を以てする底の藝當は學ぶべくもあらねど、酒は灘の銘酒、風は潮風、又大いに語らうぢやないか。え。」

「相變らずあの調子を出すねえ。然し僕はまだ駄目だ。此處が何だから……」

と順吉は胸を叩いて見せた。

「まア宜いよ、病氣なんか恐れな。天君を守る。天が守らにや満津子さんが守る。飲まう飲まう。」

順吉は團扇を使ひ乍ら跌座を組んで微笑し乍ら海を見てゐた。

晴れ晴れしいものが胸に忍び込んで來るやうだった。

「然し人生の行路又數奇なりと云ふべしだね。君の昨今の活動名聲と云ひ、僕の此の平凡なる生活と云ひ、學校時代に於て誰か今日あるを知り得たものがあつたらう。」

そんな感慨めいた事を安井が云つてゐるうちに、又兩親と妻君が來て、

「さア、どうぞ。」と町重に促されて一先づ彼も膳部の前に體を運んだ。

海邊特有な新鮮な魚類が綺麗に並べられてあつた。

ほんの形ばかりに二三杯傾けると兩親は安井以上に満足さうな顔をして座を立つて行つた。

順吉は幾枝を見るのは始めてであつたが、その顔はよく知つてゐた。と云ふのは學校時代に酒飲みの安井が酔つ拂ふと必ず懷から手札形の女の寫眞を引つ張り出して「濟まん、許せ、幾枝又酔つたぞ僕は……」と寫眞に向つて滑稽た身振りをして獨り言を云ふ癖があつたが其の寫眞の主が此の幾枝であつたからであつた

東洋豪傑張りの安井にもさうした戀があると云ふのが、皆から意外とせられて、何か豫想外な事でもあると、「安井の手札形だなア。」と云つては笑つたものであつた。

妻君が立つて行くと、順吉はそんな事を思ひ出しながら、

「おい、手札形の主人公だらう。」と消えて行つた妻君の姿を追ふやうな眼を投げて云つた。

「さうだ。可愛いぞあれでなかなかね。ははは。」

安井は手にした盃を揺り動かして笑つた。

「然し酒飲みの君だから妻君よりは酒の方に大いに食指を動かしたんだらう。」

「いや、敢てさうでないで。彼女の方が主要目的だつたねえ。」

と安井が輿に乗つて喋舌つてゐる處へ幾枝が出て來たので安井は順吉と顔を見合せて妙な笑ひを潜めて口を噤んだ。

幾枝は安井の顔を見ながら、

「何を話してらつしやつたの、貴方。」

と近く迄寄つてきた。

「何も云ふものかい。唯お前は可愛い優しい貞淑な勿體ない程の妻君だと云つて大いに有吉君を捲いてゐたのさ。お前が可愛いばかりに、天下の安井が鵬翼を潜めて大石あたりに引つ込んでゐると云つたのさ。そのニアつだけ。」

幾枝は微笑んたばかりで何とも云はなかつた。

病後ではあるし、一晚中寝なかつたので順吉は一と先づ二階の風通しの好い場所へ上つて寝る事にした。既に出發の前満津子に向けては安井の處へ來た事が知らしてあるので何時訪ねて來るかも知れないので、安井夫婦にその事を頼んで置いて二階へ上るとぐつすり寝込んでしまつた。

午後になつて漸く順吉は眼を醒ました。

と同時に幾枝に導かれて満津子が姿を現はした。

満津子は一ヶ月餘りの夏の休暇を順吉と離れて暮らす事とあきらめてしまつてゐた處へ、突然順吉がやつて來た事を知つて夢では無いかと思ひながら取るものも取敢へずやつて來たのであつた。そして順吉の顔を見ると、そのまま膝へ飛びつきた程に思つた。が安井の家へ來るのは始めてなので、じつと逸る心を抑へて、安井にも初對面の挨拶をした。

安井は順吉に對すると同様に快く満津子を迎へた。

「まア、本當に驚いてよ。餘り意外でせう！」

満津子は挨拶がすむと、抑へ切れぬ歡喜を打ちまけるやうに性急に云つた。

「そしてもう體は大丈夫なのですか？」

「ん、もう快くなつた。暫く何處かで靜かに保養したいと思つてゐる矢先、恰度安井君が來いと云つて呉れたので是幸と無遠慮にやつて來た譯さ。そしてお前も達者かい。」

「え、でも本當に夢のやうなのねえ。」

満津子は未だそんな事を云つてそはくしてゐた。

「まあ安井君によく頼んでをいてくれお前からね。」

順吉がさう云ふ言葉を、安井が受けて、

「何だい、厭に固くなるね、頼むも糸瓜もないぢやないか。」

と満津子の方を向いてカラ／＼笑つた。

「本當に、いいんですよ、そんなにお改まりにならなくても……」

幾枝も、指を突いて頭を下げやうとする満津子を押し止めた。

女中が氷の破片の入つた壺と、大粒の苺の艶々しいのを盛つた皿とを運んで来た。

「まあ、ゆつくりし給へ。そのうち濱へでも出て見やうぢや無いか。話がすんでから……」

安井はさう云つてをいて、幾枝と二人で階下へ下りて行つた。

二人きり、残されると、順吉は直ぐにも満津子の薄ら汗ばんだ頬に熱い接吻を投げつけてやり

たいやうな切ない衝動を感じた。

「妾遇ひたかつたわ……」

「僕もだ。お前が東京に居ないとなると何をやる元氣も出なかつた。がまあよく来た。そして

お前家の方は大丈夫なのかい？」

「え。」と満津子は頷いた。

「でもね、うう家ではちやんと知つてるんですもの……」

「知つてる、……どう云ふ風に？」

「どう云ふ風について……貴方との事よ。」

「ふん。さうか。知つてて貰へばその方が宜いぢやないか。どうせお前が卒業すれば結婚の申

込もしなくちやならないんだから……」

順吉は事も無げに云つたが、満津子はちよつと暗い顔をして俯いた。

ほつれ下つた揉上げの下に上氣した耳朶が眞珠のやうに光つてゐた。

「でもね。」

「うん。」

「あんな關係なのでせう。貴方が結婚の申込をして下さつた時に承知するでせうか磯部が……」

「そいつは分らないね、親にせよ他人にせよ、事實は扱置いて磯部が戸籍の上でお前の父になつてゐるのだからそれはあの人の権利さ。然し今からそんな事を心配したつて仕方が無いさ。その時になつて見なくちや。もし不承知だと云へばその時は又方法があらうぢや無いか……」

「そりやさうですけどもね。」

「けどもどうしたんだい？」

「どうもしやしないわよ。」

「ぢや宜いぢやないか、ね、さうだらう、たとへ磯部がその時に不承知だと云つたつて、お前と僕との心持さへ確りと結びついてりや、又方法の執りやうがあるさ。」

順吉は元氣さうに云つたけれども、満津子の心配も無理からぬ事だと思つた。

「そして貴方は何時迄いらつしやるの？」

「此處へか？」

「え。」

「十日許りるやうと思ふのだが……」

「ほんたうに。」

「ほんたうさ、何故そんな事云ふんだい、こんな事嘘云つたつて何にも成りやしないぢやないか。」

「でも。」

「でもどうしたんだい。」

「何でもないのよホホホ。」

「可笑しな奴だねえ。」

「本當に居て下さるの？」

「まだ疑つてる、首をやるよ。」

「いらぬ首なんか。」

「ぢや何でもやるよ。」

二人はもうすつかり、明るい氣分になつてゐた。

「おーい濱の方へ行かんかア。」

突然安井が階子段から首だけ出して叫んだ。

「あア。」と順吉は一應その方へ答へてをいて、

「お前行くかい？」

と満津子を顧みた。

「え、参ります。」

満津子も立ち上つた。

「訊かなくつたつて君が行けば満津子さんだつて行くさ。あはつはつ……」

安井は毒のない擲楡振りを示した。

「おい幾枝！」

彼は妻を呼んだ。

「美津ちゃんはどうしてゐらつしやつて、秀則さんは？」

階子段を降りる時に満津子は思ひ出したやうに、順吉の弟妹の事を訊ねた。

「みんな。相變らずやつてる。」

× × × × × × × × × ×

酒倉と酒倉との間を通つて、直ぐ砂濱に出た。

満潮時と見えて、砂濱の幅が一體に狭くなつて一條の道のやうに陽の光を照り返し乍ら眞白う

新在家邊迄續いてゐた。

四人は陽に温もつた砂の中へ、草履をめ入りこませながら、物でも跨ぎ跨ぎ歩いてゐにうるや

ポツツツ〜歩いて行つた。

安井は、阪神間の風景や氣候の好い事を順序もなく並べ立てたりした。

紺青の海の果には煙るやうな空氣がたちこめて、大阪の築港の突端らしい所が遙かに見えた。

香爐園海水浴場集る人の姿も遠く小さく渚の果に見えた。

「神戸へは是で二度目だ。尤も初めは中學時代に修學旅行で素通りしただけだがね……」

順吉は砂を蹴りながら云つた。

「あ、さうか、君は來た事があるのか。」

「あるとも、恰度その修學旅行の時だ、これの母が病氣をしてゐて可成り重態だつたもんだから、旅行に出やうか出まいかとちよつと考へたが、まア大丈夫だらうと思つて出たんだよ。處が歸つて見ると死んぢやつてるんだ。何でも僕が文學をやり出した頃なので、その人には随分啓發されたので非常ななつかしさと尊敬を持つてゐたものだから、僕は四五日の間は戀人でも失つた程泣いて通したね。」

「ふーん、すると母と子とを戀する罪を犯してゐるわけだね。」

「よせよ、變な冗談は……」

順吉は安井の滑稽口を封じたが、何となく安井が云ふやうに満津子の母のお十和さんに對しても戀に似た心持を抱いてゐたやうにも思はれた。

「水へ入つて見ませうか。」

すつかり満津子と親しんで來た幾枝は満津子に向いて云つた。

「え。」

満津子は直ぐに頷いて、草履を脱ぐと、そつと裾を捲し上げた。そして幾枝と並んで漸く脛の中程迄浸る位の所へ入つて、子供のやうに興じながら足をちやびくさせてゐた。

安井と順吉は熱い砂に尻を卸して、膝を立てながら、満足さうな微笑を浮べて二人を見てゐた。水の中の二人は時々顔をあけて、砂上の二人を見ては微笑んだ。

「あの美しい總てが自分のものだ！」

「あの雄々しい男性の全部が自分のものだ！」

と云ふ愉悅がお互の胸にしつくりと篋まり込んだ。

波が小さく穏かに美しい女達の脛を洗つて砂に消えた。

波の來る度に裾を捲し上げて燥ぐ満津子の魅惑的な姿を、順吉は眩ゆけに眼を細めて眺めてゐた。

「のんびりするだらう。大いに英氣を養つて歸り給へ。」

「あ、有り難う。」

安井は時々小石を拾つて渚へ投げて二人を調弄つたりした。

その度に水は小さく跳ね上つて二人の女を益々興がらせた。

白い脛——赤い裳——黒い髪——紺青の海——紫の山——跳ね散る波——若く美しい女性の二人を中心にしてのものが、青春の強さと熱とを象徴化したやうな情景の中に、立體的に、煌き、踊り且つ舞つた。

「もういいよ 海の踊手上つておいで……」と安井が顔を上げて二人を呼んだ時、紀州の岬の山の上に動んだ雲が、清流に淀み込む濁り江のやうに満ち擴がつて來るのが眼に入つた。

「おや！」

と安井が眼を聳てる間も無く陽が蔭つた。

「嵐だぜ。」

と安井は空の一方を凝視した。

いつの間にか出たらしい風が次第に波を高めた。

満津子と幾枝は急いで砂濱に上つて来た。

熱く焼けた砂が、濡れた足の裏へ擦つたく何をか唆かすやうな感觸を傳へた。

「風が出たのねえ。」

幾枝も蹲んで足を拭ひながら云つた。

「雨になるかも知れないぞ、歸らう歸らう。」

「さうかい——何だい、急に變な事になつちやつたねえ。」

順吉も空を見上げて空一ぱいの黒い低い雲を眺めた。

四人はさつさと元來た道へ引つ返した。

順吉は満津子と並んでその肩に柔く手を置いた。

水の中に立つた満津子の艶麗な印象を生々しく思ひ出して一人で微笑んでゐた。

「見ろ、僕の云つた通りだ、ね。」

と、安井が指さした遙かの海の果は既に降り出したらしく、しかもそれは恐ろしく迅速な速さで此方へ近寄つて来てゐるらしかつた。

折々、電光が閃いて、海の上には白い波頭が見え出した。

「急がうよ、え。」

と安井が三人に向つて云つた時、向ふの方から若い男が一人シャツ一枚でどん／＼走せて來たが、四人を見附けると、

「あ、旦那居やりましたか。」

と、息を急はしくはづませながら頑強さうな筋肉の引き緊まつた顔を上げた。

「何だい、どうかしたのかい？」

安井は鷹揚に云つたが、若い男は、

「いや、大旦那がえらい心配しやりました、もし水へでも入つてはると、えらい暴風雨が來るさかいに早う行て來い云はりましたなア。」

男は、先づ安心らしい顔をして一緒に足を元へ戻した。

五人が一緒に小走りに家へ歸つた時、既にもう大粒の雨が叩きつけるやうに降り出してゐた。裏手の潜り戸から入つて行つた皆を見ると、安井の母親は、

「まア宜かつたな。」

と四人を引き上げるやうにした。

「是で涼しくなるわい。」

座敷へ歸ると、安井は早速素裸になつて、足の裏を天井に向けて兩腕で頸を支えて横になつた。そして雨が叩きつけるやうに降り濺いで、踊るやうに跳ね返す海を見てゐた。

「いや、是はなか／＼あがらしまへんで……」

と、母親も安井の見てゐる方向に眼をやつて呟いた。

遠くの方に聞こえてゐた雷鳴が間近の空で轟々と鳴り始めた。突然に昏くなつた海の面に、繁る雨を貫いて電光が物凄く絶え間なしに閃いた。

幾枝は子供のやうに眼をぐるぐるさせて海の方許り見てゐた。

「あら、又鳴るわ。」

と、幾枝が物凄い紫電に、さつと觀念の眼を閉じた。

地の底迄覆すかと思はれる大音響が忽ち起つた。

「あつ！」

其迄石のやうに固くなつてゐた満津子が、ぱつたり突つ伏した。

「おい、どうしたんだ。」

順吉は膝で歩いて突つ伏してゐる満津子に近づいた。

満津子は小さく固くなつてゐた。

「おい、確りしなくちや。」

順吉は突つ伏してゐる満津子の肩に兩の手をかけて引き起したが、満津子は物も得云はず蒼い顔をして放心したやうな眼をあらぬ方に投げてゐた。

「恐いのかい。」

順吉は優しく訊いた。

「いや雷はんの嫌な方は無理ありません。」

安井の母は、順吉が満津子を叱りつけるやうな強い語調で云ふのを氣の毒にでも思つたのか、さう云つて満津子を見た。

順吉自身もさうした殿い調子を執るのは皆の手前があるので、實際満津子の耳に響いて來る彼の言葉は優しい心持を一ぱいに含んでゐた。

「さア膝へ來るんだ、弱い奴だなア。」

と、順吉は小さな子供をでもあやすかのやうに満津子の肩を自分の膝の上に抱え上げた。満津子はべつたりとその顔を彼の膝に埋めて、兩の手を彼の腿に宛てて、泣き寝入りをした子供のやうな格好をしてゐた。

紫の電光が閃く度に、雷鳴が轟く度に満津子は身を硬ばらせて、力一ぱいに彼に獅噛みついた。それは實際に雷鳴を恐れてゐるやうでもあつたが、何だか一種の企てを以てわざと雷鳴を利用してゐるのではないかと思はれる程満津子はその兩腕に恐ろしい力を籠めて彼の太腿に嚙りついた。

小さく萎めた肩に、髪の毛のほつれかかるのを撫でてやりながら順吉は、もつと劇しくなつて呉れ、間斷なく鳴つて呉れと、意識外の意識を以て叫びながら、凄い程の雷鳴の中に、柔い腕先が吸ひつくやうに觸れる感觸を夢見るやうに楽しんでゐた。

「まアひどい！」

と幾枝も顔を伏せた途端、たとへやうのない大音響が裂けて、紫の細い火柱が海の真中に突き立つた。

「今のは落ちたな。」

と、安井が立ち上つて縁側へ出やうとしたが、ふと、幾枝が突つ伏してゐるのを見ると、

「何だい傳染したね。」

と、順吉の方を見て、にやりと笑つた。

順吉は變な揆つたい氣持がした。

「皆あつちへ行きまへう、賑やかな方が宜しよつてに……」
と、母親が皆を促した。

「さうだ奥へ行かう、皆でわいわい云つてれば多年氣が散るよ。」

と、安井は幾枝の肩を叩いた。

「おい、幾枝、あつちへ行かう。」

「はア。」

「はア、……」安井は幾枝の口眞似をしながら、

「甘へてるな此奴。」

と、苦笑した。

順吉はそれにもちよつと揆い思ひをした。

「有吉君行かう、え。」

と、誘はれると、順吉は膝の上の満津子に向つて。

「おい、あつちへ行かう。」

と、云つたが、満津子は顔を上げずに、聞き取れぬ程の小さな聲で何か呟いたやうであつた。

「何だい。うん、聞こえないよ。」

順吉は満津子の耳朶へ顔を押しつけて云つた。

「え、なに？行けないつて……」

彼は頬を押しつけた。熱い耳朶が彼の頬に觸れた。そしてそつと手をやつた彼女の蜂谷には粘々しい脂汗が滲んでゐた。

「さア、そんな事云はないで肩につかまるんだ。」

順吉は無理に拘え起して自分の肩に手をかけさせた。

そして物でも引つ擔ぐやうにして順吉は満津子を奥の間へ搬んで行つた。

其處へは、安井の両親始め、二人の番頭迄集まつて、わざと高聲で話して氣勢を揚げてゐた。

「困りました餘の程賑らしいのです。」

と、順吉は一座の人々にそのあられない姿を辯解するやうに云つて又もとの通り満津子の肩を自分の膝に拘え上げた。

「なアに、もう大分遠くなりました。」

と、安井の父は尾を引く雷鳴の餘韻をきいて云つた。

果して暫く經つと雷鳴は次第に遠くなつて行つた。

「止んだやうだね。満津子さんもう大丈夫ですよ。餘り嫌はれたもんだから雷君の方で逃げちまつた。」

安井は満津子の横へ来て云つた。

そつと満津子は顔を上げた。

取り亂た自分の姿を恥じるやうに會體の知れぬ笑ひ方をした。

順吉は、發作的な強い接吻キッスを要求されるやうな魅惑をその微笑の中に見出した。

一時前の動亂昏迷を忘れたかのやうに空は、カラリと明るくなつた。

満津子は歸ると云ひ出した。

順吉は停留場迄満津子を送つて行く事にした。

「先刻は驚いたよ。」

安井の家を出ると順吉は満津子の晴れ晴れしい顔を見て云つた。

「でも、恐かつたのですもの……」

「幾ら恐いたつて他人の家ぢやないか。」

そんな事を云ひながら停留場迄来ると、満津子は思ひ出したやうに、順吉の手をとつて、

「貴方有馬へ行かなくつて……」と媚びるやうな上眼を使った。

「有馬へ。」

「え。」

「遊びにかい？」

「え、妾家の方をちやんと云つて出て来ますから行きませうよねえ。」

「そりやお前が行けるんなら一緒に行つても宜いよ。」

「ぢや、明日ね妾安井さんのお家へ出かけますから待つて頂戴よ。」

「あ、ぢやきつとだよ。」

そんな約束をして満津子は岩屋の自分の家へ歸つて行つた。

その夜は月が出た。

雨と嵐と雷鳴とに、一粒宛磨かれたやうな砂が、濱の方で光つてゐた。

静まり切つた海は、一つの船影も見せなかつたが、それだけに清澄な涼氣がそこから湧き上るやうであつた。

「美しい方なのね。」

幾枝は順吉の傍に跌座を組んでゐる安井に囁いた。

「うん、なかなか美しい方だ。けども俺はお前の方が美しいと思ふねえ。」

「厭ですよ、又そんな冗談を仰有つて！」

幾枝はちよつと眼を斜いて見せた。

順吉は満津子が歸つてしまふと氣抜けがしたやうに、とりとめもない話を安井としながら、ごろくしてゐるが、もう睡氣がさしたので、

「君イ、僕失敬して寝やう……」

と、惰さうに胸を撫でた。

「まア宜いよ、折角の月だ。月明の海の詩的美を賞しながら盃底に蚊龍を描いて大いに飲まう

ぢやないか。」

「又酒かい、月明の詩的美はいいが酒は全然駄目なのだ。ほんたうに失敬するよ。寝せて呉れ。病人に逆ふのかい……………」

順吉は駄洒落を云ひながら、酒を断つて二階へ上つて行つた。

「ぢや俺も今日は臨事休業をやるかな。」

安井はごろりと横になつた。

二階へ上つて見ると、ちやんと寢床が取つてあつた。

「お疲れでせうにねえ。自分がお酒飲みなものですから、お友達がお出でになつたと云つては酒、やどうしたと云つてはお酒。お人さへ見えれば自分のお酒の相手に決めてゐるんでございませよ。ホホ」

順吉の後から随いて上つて來た幾枝は女らしい事を云つて笑つた。

「いや、そこが安井君の可愛い所なんですよ。」

彼は自分でも意味の分らぬ事を云つて調子を合せた。

「蚊はゐませんか。」

「え、蚊は珍らしく居りませんのです。」

幾枝は敷布を直し乍ら答へたが間も無く降りて行つた。

體は充分疲れてゐながらさして寢轉がつてみると妙に神経が充ふつて寢つかれなかつた。

じつと耳を澄ますと、先刻の雷雨の時自分に噛りついて離れなかつた満津子の力強い感觸が惱ましく思ひ出される幻想の間を縫つて、砂を洗ふ波の音がザーツツと律的に聞こえて來た。

満津子を留めておけばよかつた！ 彼は切なげな衝動を惱ましく感じながら、再び満津子の姿を頭に描き出さうとするかのやうに、ぢつと眼を閉じた。

「明日は有馬へ行かうと云つたな、そして二三日滞在しやうとも云つたな、うん、さうだ、有馬の宿、何も躊躇しなかつたつて宜いのだ。當然來るべき事なのだから……………」

順吉は蒸されるやうに醗酵して行く體内の青春の血の紆りをはつきりと感じた。或る幸福なものに對する豫感が次第に彼の決斷を強めて行つた。

耳慣れると、渚の波の音も耳につかなくなつた。

風が涼しく庭の樹を撫でる忍び音が時々起つた。

座敷迄匍ひ込んだ月の光に、腕を差しのべて見ると、蒼白い皮膚に同じように蒼白い靜脈がび

くびく躍つてゐた。

彼は生温い惱ましげな息吹を腕に吐きかけ乍ら、まだ満津子を留めて置けばよかつたなどと思つたりしてゐた。

彼はどうしても寝つかれなかつた、體は好い加減疲れてゐる癖に……………。

そしてむづくり起き上つて、電燈を點した。黄色い電燈の光が、水色の月光を座敷から追ひ斥けた。

春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時、西宮南苑……………

その時階下では白樂天の長恨歌らしい詩を中聲で吟じてゐる安井の聲がしてゐた。

「飲んでるんだらうか？」

順吉は一旦寝るつもりで二階へ上つて來たもののどうしても寝つかれないので寢敷の寄つた浴衣をべらつかしながら、のこく階下へ降りて行つた。

「やア……………」

と、彼は座敷へ飛び出したが、起きてゐるんだらうと思つた安井はもう床の上に踏ん返り返つてゐた。幾枝もその傍に足を伸ばして寝てゐた。

「ヨウ、どうしたい。」

安井が云つた。

「寝てたのかい。呻つてゐるからまだ飲んでるんだと思つて降りて來たんだ——そいつあ失敬した。」

順吉は辯解がましい物の云ひ方をして撥を合せた。

「まア宜しうございます、どうぞ……………」

と、幾枝はくるりと起き上つた。

「どうも寝つかれないものだからね……………」

半分口の中で呟きながら彼はきまりの悪い思ひをして二階へ又引き返して行つた。

その翌日、順吉が朝非常に遅く眼醒めたので、その時にはもう有馬行の支度をした満津子がやつて來てゐた。

順吉は安井に有馬へ行く事を話して安井も誘つたけれども、彼は見合せたいと云つた。

そして十一時頃の電車で神崎迄行つて其處から汽車に乗つた。

順吉も満津子も有馬は初めてであつたので、安井の教へた「兵衛」の河別莊を探して其處を宿に

した。

宿には阪神地方の避暑客が相當に詰まつてゐるが、順吉等は川沿ひの一と間を都合よく占領する事が出来た。

女中は、満津子を捕へて、奥様、奥様を連發した、それは實際に宿帳へ書いた通り二人を若夫婦位に思つてゐるのか、或は本當の關係を知つてゐて調弄氣味を交へて云ふのかは分らなかつたが、奥様と云ふ言葉は妙に二人を、唆かすやうな名附け難い魅力的な語韻を持つてゐた。

「奥様！」

順吉は始めての夜、頻りにその口眞似をして満津子を調弄つた。

始めのうちは満津子も、何だとかかだとか云つてゐるが、しまひには、

「はい。何です。貴方」

と、あたりを憚る小聲で逆に順吉を調弄つたりするやうになつた。

六甲山麓の峡谷の新鮮な水の流と青葉の色とに包まれた有馬の湯の宿の一室に夜が來た。

翌くる朝、満津子は順吉よりもすつと早く起きて、順吉が眼を醒ました時には、新温泉へ行つて歸つて化粧迄済ませてゐた。

「大變早いねえ。」

順吉は満足さうに、朝の化粧が終つたばかりの満津子に見惚れてゐた。

満津子は本當の女性としての最初の朝の微笑の中へ慎ましい羞恥を織り込んでゐた。

二日目の夜も、三日目の夜も、幸福と云ふ幸福の歡喜は總て二人を包んだ。

四日目の朝有馬をたつて歸つた。

満津子にも順吉にも悔に似た心持は少しもなかつた。お互に抵牾しがり合ひをして待つてゐた行手の殿堂へ辿りついた會心と安心の歡があるばかりであつた。

それから一週間許りも安井の家に居て、十日目の朝、すつかり健康を取り戻した順吉は東京へ歸つて行つた。

暑中休暇が終る終らないに關らず一日でも早く上京すると云ふやうな事を満津子は別れ際に云つた。

第七章

秋が来た。

十何年と云ふ長い間順吉兄妹の世話を見て来たお峰婆さんが、餘儀ない事情で郷里の娘の處へ歸らねばならなくなつた。

そしてお峰婆さんは暇を取つて歸郷した。

順吉の家では家のなかの事全部をお峰に任しきつてゐたので、さうなると差し當り人手がないので困つてしまつた。

で若い女中を一人兎に角傭つて来た。けれどもお峰婆さんのやうな具合には行かないので、自然美津枝が家事萬端に身を入れて、切り盛をして行かなければならなくなつた。

先づそれ位が家庭内の變化と云へば變化位で其の他には別に大した事もなかつた。

滿津子は上京して来て従前通りやつて來るし、美津枝と伊澤との戀も極めて順調に動いてゐるし、極めて落着いた秋であつた。

美津枝は時々日本橋の伊澤の處へ出かけて行つて、伊澤の母を伴れて歸つたりした。

伊澤の家では、伊澤の父は疾くの昔死んで居なかつた。家業の呉服の方は伊澤の異母兄が繼いで居た。その異母兄は伊澤に對しては全然無干渉な立場にゐたので美津枝との戀愛問題の承認を得なければならぬ人間は伊澤の實母一人だけであつた。その一人の實母と美津枝とが隔てなく往き來をするやうになつた昨今では、伊澤と美津枝との結婚ももう單に時の問題だけになつてゐた。

伊澤の母は、伊澤と美津枝との結婚を願りに急ぐ様子を見せてゐたが何せ順吉の家の有様が女手無しと來てゐるので、順吉が結婚して主婦らしいものが新に出來る迄は美津枝は家を動く事が出來ないやうな立場になつてゐたので、事情を知つてゐる伊澤の母は氣ばかりあせつて口にはさうとも云ひ出し兼ねてゐるらしかつた。

そのうち伊澤の母は、ふとした事から病褥に就くやうになつた。

するともう辛抱し切れなくなつたと見えて口癖のやうに「眼の開いてゐるうちに婚禮をさせた

501

と、云ひ出しだした。

その話を聞くと順吉は、伊澤の母の心持が氣の毒になつた。そして彼は滿津子と結婚してしま

はうと決心した。

秀則も美津枝も兄の決心については非常に賛成した。

或る夜満津子が来た時順吉は自分の決心を彼女に話してみた。

話と云つても當人同志は、既に此の夏以來夫婦同様の關係になつてゐるので、話らしい話とても無かつたのだが、唯一つ面倒に思はれるのは満津子の親權者になつてゐる磯部の事であつた。

「きつと磯部は反對するでせうよ。」

満津枝はのつけから否定的な言葉を使ひながら、

「磯部がお母さんを憎んでゐるのはそりや酷いのよ、そしてね妾の考では、お母さんもあつて死んだし、お父さんも死んだし、復讐をする相手が居なくなつたものだから妾を苛めつけて自分の腹癒せをしやうと思つてゐるらしいんです。ですから貴方だから反對するの他の人だから賛成するのつてんぢやなくつて、何でもかでも妾の幸福になりさうな事だつたら總て反對して打ち壊さうと思つてゐるらしいのよ。」

「磯部つてそんなに迄執念深い人だらうか？」

「そりやね傍に居て見るとよつく分るのよ、磯部はお母さんが磯部を裏切つたと思つて憎んで

ゐるし、妾は妾で、磯部が戸籍一つを力に、妾がお父さんの子供だと云ふ事を知つてゐながらお母さんを繋いでをいて生殺しのやうにした事を怨んでゐるし、妾と磯部とは、恰度お母さんと磯部とが睨めくらをしてゐると同じやうに、表向きこそ父子のやうな關係になつてゐても心の中ではひどい争鬭をし續けてゐるやうなものですわ。」

満津子が自分の心持を適當に表現しやうとする言葉を拾ひ拾ひ語るのを順吉は黙つて聞いてゐた。

「だが然し磯部が、お十和小母さんや野間さんを怨むと云ふのは逆怨みだねえ、何せお十和さんと野間さんとが立派に戀仲であつたのを無理矢理に自分が横取りしたのぢやないか。そりやお十和小母さんだつて結婚後迄野間さんとの關係を續けてお前を生んだりしたのは、ちよつと酷いやうだけれども、その罪が磯部にあるのは分り切つた話だ。おまけにお前が野間さんの胤だと知つてて、お十和さんを戸籍一つで縛り着けてをいた陰險な磯部のやり方と云ひ、既に現在の妻君とお十和さんがお前を生まないうちから關係があつたりした事などを考へると、怨むのはお十和さんやお前で、怨まれるのが磯部でなくちやならん。それをお十和小母さんや野間さんを苦しめた上にお前迄苦しめやうなんて、ちよつと考へられない心理だ。それが爲に野間さんは自殺したんぢ

やないか！」

順吉は、憤慨めいた物の云ひ方をしたが、

「そのやね、誰だつてさう考へるわね。けどもね愛が執念深いやうに憎みもそら愛以上に執念深いと思はれますわ。ほんたうに愛し合つたものでなくちや、愛の實際は分らないし、磯部と妾のやうにほんたうに憎み合つたものでなくちやちよつと本當の事は分りませんわ、憎み合つてればこそ磯部磯部と呼び棄ててに出来るんですわ。」

と、満津枝は磯部と彼女との間の内心の争闘の心持をしつかりと順吉に徹底させやうとした。

「だが何時迄も磯部の心の内を考へては居られないしね。況んやさうだとすると一層お前との前途も不安だし一刻も早く何とかしたいと思ふのだが………」と暫く考へた後「どうだらう手紙でお前と僕との關係や心持を一切書いて送つてそしてどうか貴方の娘さんを下さいお願ですからと云ふ調子でおとなしく出たら？」と、満津子の顔を見た。

「……………」

「それともだね、誰か適當な仲介者を頼んで結婚の申込みをするか當つて碎けろぢやないか。」

「え、それもさうですがね！……………」

満津子は、ちよいとさう云つて何か未だ云ひたけな格好をしてゐたが、別に纏まつた考へも出ないらしく、眼を内部に向けて胸の中の考を拾つてゐた。

「こんな時に、優しい伯母さんとか、物分りの好い伯父さんとか云ふやうな人間が居ると好い仲介者になつて呉れるんだがね、お前にしろ僕にしろ一切親類の無い人間なんだから困るよ。」順吉は黙つてゐる満津子を見ながら思ひ出したやうに云つて空笑ひをした。

「然しそんな愚痴を云つたて仕方が無いや。で、どうだらう、早速僕が直接磯部に會つて眞正面から切り込んで……？」

「それこそ貴方……………」

満津子は大きく遮つた、

「貴方はお父さんとその儘なんですもの、お父さんの大學の時の寫真を見たら貴方と間違ふ位よ。」

「それがどうして悪いんだい？」

「そりやさうでせう！ 坊主憎けりや袈裟迄で、誰だつて自分の厭な人に似てゐる人には好い

感じは持てなくつてよ。」

「ははア、さう云ふ意味か、成る程僕は野間さんに似てるさうだからねえ。」

「え、そりやそつくりなの。」

「するとお前と磯部ぢやない、僕と磯部の間にも相容れない或る物が有るんだね。」

「おまけに何方も文學者。」

満津子は疊みかけるやうに云つた。

「はつは。」

順吉も満津子の言葉につい笑はせられたものの胸の中はさう明るくはなかつた。

「だが何時迄小田原評定したつてつまらない。問題の解決點は此方の方法や態度にあるんでなく、先方の心の中にあるんだから、遮二無二此方でもう押し進むより他は無い。」

暫くして順吉は可成り苛々しい氣分を言葉に載せて叫んだ。

「さ、ですからその押し進み方なんですわ、やはり誰かにお願した方がどうしても好いと思ひますわ。」

「義姉さんそりや駄目だ！ 兄さんだつて何も困る事はないぢやないか。」

突然隣の部屋から秀則が顔を出した。

二人は驚いて顔を上げた。

「お前居たのかい。」

秀則はのそく入つて來た弟の姿をじろく見ながら、それでも微笑を含ませて云つた。

「居たとも、聞いてるだけ莫迦らしいや、兄さんにも似合はない卑怯な……」

秀則は順吉と満津子の横へ跌座を組みながら、

「卑怯に人手を頼まずとも……とか何とかと云ふ文」が何かの芝居にあるぢやないか。」

「卑怯とはちよつと酷いな。元氣一方で行かない處に此の問題の暗礁があるんだ。」

順吉は嘯いた。

「知つてるよその位の事は、暗礁があればこそ船を他人に任して置けないわけぢやないか。」

「それも一理だ。」

「一理二理どころぢや無いよ、考へても考へなくても分る事だがね……」

「ふんふん。」

順吉は何となく弟の口吻や態度が頼もしいやうな氣がして一々大きく頷いてゐたが、秀則は云

ひかけた言葉をちよつと折つて、

「尤も僕なんか兄さんと違つて折紙つきの類廢黨だから、進んで小面倒な事へは携はりたくないし、面倒になればさつさと手を引いて成行に任せる方なんだが、だから始のうちは兄さんや義姉さんの事も雲煙過眼視してゐたらう。それどころぢやない兄さんは戀を凝結させて悦ぶ哀れな人間だなど云つたりした位だ。處が見てゐると、兄さんも義姉さんも莫迦に眞劍だ、ちよつと類廢黨も動かされたね、どうも眞劍と云ふ奴は力が強い！」

と、諸誰交りにまくし立てながら好意のある眼を二人に向けた。

「仍で義を以て助太刀に現はれたわけなんだねえ。はは……」

順吉も快活な弟の調子に吾知らず同化してしまつた。

「で僕が卑怯だと云つたのはだね、第一兄さん達は物の判断を誤つてゐる。是が其處らの俗人共の態度なら一應尤もだと思はれるが、苟且にも兄さんは正義を貫き不正義を打ち壊す爲には、迫害も壓迫も厭はず飽く迄堂々の陣を張つて闘つてゐる人道の戦士だ。その兄さんが自分の最も大切な戀を妥協的態度で取り纏めやうとしてゐるのはどう考へて、解し兼ねる。餘りに結果ばかりにこだはつて戦々怯々としてゐる。成る程磯部がお十和小母さんや、野間さんを憎む理由はあ

らう、僕は磯部のその心持の善悪は扱て措いて絶対に否定しはしない。然し更に進んでそれを満津子さんに迄及ぼさうとするには絶対の反對をしなくてはならない。當然幸福なるべき兄さんや義姉さんを第二の野間さんとし又お十和小母さんとする事は、第二の磯部をも同時に作る事になる。磯部が他人を怨まねばならぬ程所謂磯部式の境遇に悲哀と憎惡とを感じてゐるならば、更に自分の手でその呪ふべき第二の磯部を作る事に何等の恥をも感じないだらうか第三者から見たつて許さるべからざる事だ。して見れば人道の戦士である兄さんが、今自分の足もとに横たはつてゐる不正義と妄執とに妥協的想度を執つて、どうしても斯うでも義姉さんと結婚さへ出来ればいいと考へる事は、兄さんの人格の大破産を語るものぢやなからうか。兄さんは磯部を救つてやらなければならぬ。進んで磯部と語つて彼と諒解し合ふだけの誠意がなくてはならぬ。此の機を逸してその機會は無いその誠實と熱意なく如何なる方法で義姉さんを得た處畢竟するに兩者の争闘はそれによつて増大される分とも減少する事は無い。兄さんは進んで會つて温い理解と同情とを以て磯部を温めて彼に苦惱や呪ひを溶かしておやんなさい。それだけの理解の無い兄さんとも違ふんだから。進んで兄さんの人格的理解力と包擁力を示したらいいでせう。不肖の弟だが僕もゐる。ね義姉さん。僕の言葉をよく味はつて見て下さい。」

秀則は滔々と解いた。或る晴れやかな悲愴な感じが順吉を動かした。その夜の話は具體的に何の纏まりもつかず、その次の夜も又その次もと云ふ具合に順吉兄弟や満津子が磯部に對する態度や方法の考をめぐらしてゐるうちに、全く豫期しない事件が突發した。しかもその事件は突風のやうに不意に彼等に襲ひかかつて、防禦や身構への餘裕を絶対に與へなかつた。

それは最初話を始めてから五日目の午前十時頃であつた。
恰度日曜日であつた。

美津枝は朝のうちから日本橋の伊澤の家へ、伊澤の母の病氣見舞に出かけて行つて、家の中には、順吉と秀則と女中だけが残つてゐた。

順吉は或る翻譯に取りかかつてゐたので、秀則を補助として朝から二人が一つ机で黙りこくつて仕事をしてゐた。

「FANTASTIC と、おい、どう譯したらいいだらうなア、氣まぐれか。」

順吉は顔をあげて秀則を見た。

「さうだなア、その場合氣まぐれも變だなア、空想的なではどうだい。」
「ん、さうだな。」

と二人が話し合つてゐる處へ、とんと二階を上つて來る足音がした。如何にも極てたらしいそのその氣急はしい足音を聞くと順吉はちよつと顔を擧めた。

「誰だね。」

と、呟くやうに云つてその方を見た瞬間、思ひがけなく満津子の上氣した顔が現はれた。

「あ、満津子かい。」

順吉は、何だと云ふやうな顔をした。毎日のやうにやつて來るのでさまで驚いた風もしなかつたが何となく常と違つた。そば／＼しい落着の無い風がその様子に見えたので、又顔を上げて、

「どうかしたのかい？」

と、そば／＼して順吉の横へ座つた満津子を見た。

「あのね大變な事が出來たのよ」

満津子は秀則に挨拶するのも忘れて息を靜めながら云つた。

「何だい。莫迦にそば／＼してゐるね。」

と、順吉は正反對に作り上げたやうな落着をぐつと見せた。

「何です義姉さん。どうしたんです。」

秀則は滿津子の横合からにこ／＼して云つた。

「え、あのね。」と順吉と秀則を當分に見ながら、何方へともつかず

「あのね、磯部が来たんですの。そしてね、え、昨夜突然やつて来たんです。そしてね、妾を何處かへ縁づけける事になつたから早速歸れとまるで無茶苦茶な話をするんですの、妾そんな事聞く事が出来ませんから此方から貴方との事を話してやらうと思つてね、え、そしたら向ふでちやんと知つてるんですの、有馬の事だつて、その前から峽風先生の處で遇つた事からそりやよく知つてるんですの、そして妙な皮肉な事を云つてね、妾の考ぢやね、磯部は別に何處へ縁づけやうなんて決まつては居ないのだが、妾を困らせるのに恰度好い潮時だと思つてやつて来たんだと思ひますわ。」

滿津子は氣急しけな昂奮の色を泛べて立て續けに語つた。

順吉と秀則は一々頷いて聽いてゐるたが、順吉の方はちよつと狼敗の色を泛べて、

「え、磯部が来たつて、そして是非お前を連れて歸ると云ふのかい？」

「え、どうしても連れて歸ると云ふんですの、ですから妾昨夜一晚中考へたんですがね、妾峽風先生の處へ暫く身を隠さうかと思ひますの。」

「それで出て来たのかい？」

「え、家を出る時運悪く女中に眼つかつたものですから、有吉さんの處へ行くからと云つて出て来たのは出て来たのですが……」

「そりや義姉さん駄目だ。」

秀則が口を挟んだ。

「身を隠すなんて間の抜けた話だ。相手が磯部だ。保護願なんて下らない眞似でもされた時にやそれこそつまらんどちやありませんか。」

「でもね。そらね、妾の考もあるのよ。此の間貴方が仰有つたやうにね、恰度好い機會だから順様に磯部と會つて貰つてあの人を説教して貰いたいのよ。それでね、順様の方から出かけて行つて貰へば押しかけた方が多少弱みがあるでせう。そら弱味ですわ、自分の家で話す方が餘つ程強味が出ますわ。ですから妾此處へ來ると云つて出て来たのでせう。すると磯部がきつとやつて來るでせう。さう云ふ具合に磯部を引き寄せてそして話して貰はうと思つたのよ。」

さう語つてゐながらも彼女は次第に落着を失つて、外のちよつとした物音にもはつとして眼を外らしたりした。

「あははア、義姉さんも随分策士ですねえ。」

秀則は彼女の顔を見た。満津子はちよつと含羞んで、

「でも……………何でせう……………」

とわけの分らぬ撥を合せた。

「然しそれはいいとして、その身を隠すと云ふのは一體どう云ふ方針に基いてるんです？」

順吉の云はうとする事を大抵秀則が云つて呉れた。

「そらね、餘り突飛のやうですけどもね。妾が家に居たら連れて行かれるでせう。それかと云つて此處に居れば、磯部だつて妾の手前何だか一種の權威を保つ必要があるから、打ちとけて皆さんと話す事が出来なくなるでせう。妙に硬ばつて来たらあの人は齒も爪も立たなくなるんですからね。で妾が側に居ては話が圓滑に運ばなくなるんですよ。ですから妾他に行く處も無い話の纏まる迄峽風先生の處で御厄介にならうかと思ひますの……………」

「ああ分つた。さうですか。いいでせう、ぢや一刻も早く行かれた方がいいでせう。折角の計畫や方寸が磯部と義姉さんがかち合つては無駄になりますからね。なに後は大丈夫です。好い機会ですよ。」

と、秀則は順吉をさし措いて一人で受け答へをした。

「まア待て待て。」

順吉が秀則を制した。

満津子は頼もしげな秀則の言葉に釣り込まれて、その方へばかり向いて話をしてるたが、ふと氣がつくと順吉をさし措いたやうで自分ながら落着いてゐない態度にちよつときまり悪さうな顔をした。

「ぢやお前は何等かの結果がきまる迄峽風氏の處に居る考かい？」

「え。」

「もし磯部が來なかつたら？」

「いえ、きつと來るんです。」

「さうかい仍でだ。來てからの話だが、どうしても磯部が頭として聞かなかつた時はどうする。」

「さうねえ。」

満津子もちよつと當惑した。

「そんな事を今云つたつて仕方がないぢやないか兄さん、それこそ要らない心配だよ。やつて見てからの事さ。」

秀則は順吉一流の用心深い、悪く云へば物を考へ過ぎて却つて自縄自縛の形になる兄を抵牾しがつた。

「結局するに、どんな事があらうとも義姉さんは兄さんとの結婚が出来なければ死んでも同様の體だ——こりや義姉さんが仰有つた言葉だが、何にせよ結局の目的はそこにあるんで、唯それを飽く迄正々堂々とやる爲に多少の心配もすると云ふに過ぎないんだ。餘り考へ過ぎちや却つて駄目だよ兄さん。」

秀則は何と云つても直接の當事者でないだけに元氣が好い。

さう斯う話してゐる間も満津子は磯部が來はすまいかと焦慮して、

「ね、妾、行つてもいいでせう。不可ないの貴方。」

順吉が腕を拱いて考へ込んでゐるのを見ると重つ 苦しい氣分になりながら訊ねるやうに云つた。

「さうするより他に仕方が無いだらう。」

順吉は軽く云つた。

そして満津子は兎も角峽風氏の處へ行く事にして上野驛へ出かけた。

「要するに、お互の信念さへしつかりしてゐれば結局は勝利なんだから、たとへ磯部が引摺つて歸つて結婚を強制したつて信念をぐらつかしてそれに従ふやうぢや駄目だぜ。」

順吉は玄關の處で満津子にそんな事を囁いた。

「そりや大丈夫、貴方だつてさうよ。」

「勿論。然し行つたら峽風先生に宜しく云つて呉れ、御無沙汰をしてゐますが悪しからずとお前からお託をしていてくれ。ぢや氣をつけてお行き。」

満津子は電車道の方へさつさと歩いて行つた。

やがて二階へ上つて來た順吉は机の前にどつかりと跌座を組んだ。

「とう／＼磯部に先手を打たれちやつたね。」

秀則は飽く迄餘裕のある口の利き方をした。

「作戦計畫が漸く熟した處へ、一瞬の差で先手を打たれたね。」

「が此方はその方が樂さ。然し義姉さんも案外好い頭をしてゐるね。或は兄さんよりは上手だ

ぜ。」

「馬鹿云ふない。」

「斯うして豫想しない事が起るので人生が益々面白いんだね。これが有り得べき事と承認される事が豫想通りに進行するものだつたら人生なんて面白くも何ともないんだがね。」

と二人が話してゐる時、玄關に人の聲がした。女中が應酬してゐる聲もした。

「来たよ。兄さん。」

秀則は階下の人聲に耳を澄ました。

「さうらしいね。」

順吉は一種の武者慄ひを感じた。

「確りしろよ。」

「莫迦、喧嘩ぢやあるまいし……」

順吉は壓しつけられたやうな苦笑を洩らした。

階下へ下りて行つた順吉がどう云ふ應對をしたのか、暫く話し聲がしてゐるが、間もなく磯部を伴つて二階へ引返して来た。

磯部は順吉兄弟に初対面であつた。順吉達の方でも、満津子からの話や、其他の人々の話を通じて、磯部の人物を好いから加減に頭の中で描き上げてゐたものの、現實の磯部を見るのはその時が初めてであつた。そして恐らく、順吉もさうであつたらうが、秀則にしても、彼等の頭ですつかり描き上げてゐた磯部の人物と、今眼の前に現はれた磯部とが全然別種の人間のやうな氣がした事であつた。

勿論、お互に話を通じて勝手に自分の想像で描き上げた人物なので、その想念には多少の相違はあつたらうが、何れにしても、初一步から好感を持てる人物を描き上げてゐなかつたのは紛れもない事實であつた。順吉は磯部と相剋した野間さんやお十和さんに非常な愛慕の念を以てゐたので、野間さんやお十和さんに對する愛慕が強ければ強いだけに、自分の頭に描かれる磯部は何處の部分からも親しみの見出せない種類の兇暴な執拗な醜い程主我的で、宗教がかつた深みだの、藝術的光彩や優雅だのの片つ影も無い男であつた。その上順吉は、戀人の満津子を完全に獲得するには何等かの意味に於て一度は相争ふ立場に出會さなければならぬ男だと豫期してゐたので、自分の頭で描き上げた磯部へ對して一種の仇敵氣分さへ感じてゐた。

秀則の方では、妙な運命の廻り合せから、世の中を拗ね切つた弱々しいいじけた心を守るのに

急がしい哀れつほい男を磯部として描き上げてゐた。が何れにしても順吉兄弟が初めて當の磯部と會つた刹那からその幻像の磯部がボロ／＼と崩れ落ちる壁のやうに剝けて遂には消えてしまつたのであつた。

が深入りして話に入ると、今度は反對に、眼の前に居る現實の磯部が消えてしまつて、その幻像の磯部が眼前に髣髴と現はれて、話してゐる事が、一切幻像の磯部を相手にした感じの言葉になるのも不思議であつた。

先づ第一に現實の磯部が、彼等の想念を覆したのは、磯部と云ふ男が、彼等の相手になつて闘ふ程の強さ或は頑強さを持つてゐない、むしろ青春期乃至壯年期の彼等から見て、憫れみを加へてやらずにはゐられない年輩の部類に入る男である事であつた。けれども實際はまださう老耄れた年輩でもなかつたのであるが、彼の内部に萌してゐる宗教心らしいものが非常に彼を柔和に且つ靜的に見せたのであつた。此の場合特に宗教心らしいと云つたのは、それが完全に宗教心と名づけられ得る程のものでもなく、又既成宗教に隸屬する凝り固つたものでもなく、人間が相當の年を拾つて人生苦樂の諸相に漸く客觀的な眼を投げ得るやうになつた頃、何に頼るともなく頼りたいやうな心寂しい冷やかな、物の哀れさを感じる心持を指したのである。

始め、階下で磯部の聲がした時には、順吉は一種の武者慄ひを感じて氣を自づと緊張させたのであつたが、扱て本人を前にして見ると、吾ながらその緊張振りが滑稽染みたと思はれる程拍子抜けがしたのであつた。

勿論それは何と云つても相當な取引をする大貿易商の主人と云ふだけに體も肥り氣味で、禿け上つた廣い額や、頬のあたりの膨らみなどもちよつと眼には重々しい感じを匂はせてはゐるが、それとて順吉から觀察すると、彼の地位や境遇が外部から捏ね上げたもので、内部精神の練磨された莊重さから來る重みではないので、本來彼の精神に皺を刻んでゐる衰へかかつた弱々しさを蔽ひ切る力は無かつた。

直ぐにも怯けさうな眼の光が此の男の氣の脆さを語つてゐた。その氣の脆さは若い時からの持ち越しか老境と云ふ時間の推積が彼に授けて行つたのか、其處迄の判斷はつかかなかつたが、何にしてもその眼の光は、豫め用意された順吉の戰鬪的氣分を霧散させるのに充分であつた。

「妾が居たら却つて硬くなるから……」と云つて磯部と一緒の座に居る事を嫌つた満津子の心使ひも順吉には始めて了解出來た。

表向きは、満津子の上に居て彼女を支配してゐるやうに見えて、其の實は反對に満津子に優越

感を持たれてゐる彼の生活も略想像が出来た。

「自分の弱さを蔽はうと焦慮るのは是日も尙足らずと云ふ程度の男だな。」秀則が先づ磯部を見た時の感じを強て文字に現はすとまアさういふやうな感じであつた。

「で、時には、その弱さを蔽はうとする程度が過ぎて、根性からの悪黨や、不人情な一徹者のやうに、まるで正反對に見做される事があるのだ。だから此の種類の男には先づ、その弱い性格に對する安心を與へてやる必要がある。お前のその性格は全く美はしい、決してその弱さを恥づるには及ばないと云ふ風の感じを此方が持つてゐると云ふ事を暗示的に知らせてやるのだ。すると非常に安心して無理な企をせず話せる。が然し一つ間違つて蓋を閉じさせると螺螄ぢやないがもう駄目だ、益意地を張り出して手がつけられなくなる。要するに此の種類の人間程興し易く又興し難い人間はないのだ。總てはきつかけの一言で堅くも柔くもなる。」

處で順吉も同じやうに考へたらしく、努めて相手が固くならぬやうにと心掛けて、先づ初對面の紋切型が終ると、すつかり碎けた調子で、

「外は随分未だお暑う御座んせうねえ。」

と親しい友達にでも云ふやうな事を云つた。

がその態度は豫期せない悪い結果を招いた。

第一磯部は順吉に顔を合す前から、順吉が新進の若い文學者で思想家である事に怯けて、玄關を入る前から一種の壓迫を感じてゐたので、意外な打ち解けた様子を示されると、それを逆に解釋して、若い癖に俺を見縊らうとしてゐるな！ と受取つたらしく、一種の不快な表情が彼の顔に泛び上つた。

「相當暑いですね。」と一應は調子を合せてをいて、

「處で満津子ですが、此方に居る筈に違ひないのですが……………」と、更に順吉の碎けた態度に構はず、横柄さうに云つた。

もう固くなりやがつた！

秀則は、底の見え透いてゐる磯部の四角張つた態度に嚇とした。

順吉は然し、餘裕のある落着を見せて、満津子が居るか居ないか其邊の事は明にせず——つまり磯部の間の趣には答へずに彼は彼の方向から話を持出して、相手にのしかかつて行つた。

「實はその満津子さんに就いてですが……………」

「はア。」

「或は多分御承知の事と思ひますが……」

「何をですか？」

「つまりですね。」

「はアはア。」

「簡単に申しますと、満津子さんと私とが最近貴方の御諒解を得て結婚したい希望を持ち合つてゐると云ふ事なのですが、實はもう二三日御上京が遅いと此方から御話に出る考をしてゐた處なんですが……」

「はアはア。」

「斯う妙な具合になつて來ると寔に話が厚かましい非禮なものになつて來ますが……」

順吉は早急にさうした話を持ち出した事を可成りくどくどしく辯解した。

或は磯部より兄の方が弱造かも知れないぞ！

秀則はくどくしい順吉の辯解めいた調子を聞いてさう思つた。

一氣に押切つちまへよ！

さう云ひたい位であつた。

そして一方が自分の兄で取り敢へず味方をしてやらなければならぬ人間で、一方の磯部が兎に角敵役であると云ふ事の、自分の立ち場ななどすつかり忘れて、二人の弱造の掛合に妙な興味を見出して腹の中で微笑みながら中心を離れた心持で見てるた。

磯部は、事實に於て、順吉と満津子との戀愛關係を知つて上京して來たので、相手の順吉が若手の思想家で小説もかけば實際運動もすると云ふ青年の事故、出合頭に、戀に熱し切つた順吉から、小難しい戀愛の御談議を吹つかけられる位には思つてゐた。そして又その方面の議論がかつた事などで正面から自分が太刀打出來ないのを知つてゐたので、ぐつと虚勢を張つてさう云ふ議論にはかまけず、警察の手にかけても満津子は連れて歸りますと大いに頑張つてやらう位の磯部の方寸であつた。

處が意外な事には、議論處ぢやない寔に氣の弱さうな優しい態度なので磯部は意外な感にうたれると同時に拍子拔のした氣がした。

それならば自分の方でも打ち解けた話をして宜いやうなものだが、仍でさう出來ないのが此種の人間の特徴である。のみならず長年虚勢の張りつこや權謀術數を以て人間生活の重大要素として、それに絶大な價值を認めさせられて來た實業家の磯部に其の場合のしかかつて來たのは、

順吉の親しみを含んだ態度に自分も心を柔らかくにして、みづちり語らうと云ふ心持でなく、相手のさらけ出した心につけ入つて之を威壓してやらうと云ふ、此の種の人間が——或は實業家だのと稱する此の階級の人間が、長年の虚偽に墮し切つた習慣から、殆んど本質に迄喰ひ入つた不純な心持であつた。

がそれは本来、自信のある威壓ではなく、相手が虚を示したからこそ湧いた心持なので、相手がかくると態度を變へて大上段から振り下したら又ぐらつく威壓なので、強さうな態度を示しながらも、順吉が逆襲しはすまいかと恐れ氣味の不安に用心深い眼を中心なしに動かして順吉の様子に注意してゐた。

だから此の種の奴は困るのだ！

秀則は、然し磯部を打ちのめしてやるよりも、その虚勢を思ひ上らして何處迄行くかを見てるたいやうな皮肉な興味が湧いて來たので、

「此の事に就いては兄と同時に僕からも御願しなければならぬのですが……早速と云ふのも非常に失禮な話で、勿論然し此の事に就いては兄も申しました通り此方から神戸へ出向いて御願する段取になつてゐた處へ反對に貴方の方から御出になつたので勢突飛な掛合になると云ふやう

な結果になりましたので其の間の事情は充分御諒解下さいますやうに……その上で兄と満津子さんの結婚に就いての御意見を伺ひたいものでございます、尤も念の爲めにこれは僕から申上げて置くのですが、兄と満津子さんとの間は既に立派な夫婦關係が生じてゐる事をも申上げます。」

秀則は、兄と磯部との間に、ちよつとした沈黙が割込んだ時口を挟んで見た。

「ははア……さう云ふ具合で満津子は此方へ御邪魔をしてゐたのですか。」

磯部はその事情を知つてゐて、それを引割くためにやつて來た事を飽く迄押し隠して、今更のやうに、順吉へとも、秀則へともつかず詰るやうな口吻を洩した。

「いや、一概にさうでもありませんが、前後の事情を御存知ないとすれば、話が唐突過ぎて御諒解に苦しまれるでせうがこれは何です……」

と順吉が、秀則の大膽な言葉を又辯解口調に出かけた處を、磯部は大きく遮つて、

「いや、そのお話は兎も角、此方では満津子を此度は至急連れて歸る必要があるのです、今日中には是非共神戸へ歸らなくてはなりませんから、そのお話は後日折を見てお伺ひするとしてませう。」

と、逃けた。然し未だ満津子を出して呉れとは云はなかつた。

「あさうですか、強つてと云ふのも失禮ですが、然し折角の機會ですからと存じまして……」
「そらさうでせうが、兎に角申しました通りそのお話は後日に願ひませう。」

「ぢや強いてお話もしますまいが、是だけはちよつと御聞かせ願ひたいものですね、つまり満津子さんと私との結婚に對しては貴方は絶対に御反對かどうかと云ふ事をですね……」

「さうですねえ、まづそれが事實問題として現はれた時には、寔にお氣の毒ですが、始めから満津子と貴方との關係に就いてはどんな要領か私は關係してゐないのでですから、その無關係な満津子との關係を楯に取られても何の効果もないと思つて戴かなければなりませんね。」

磯部は中心の掴めない文句を並べたが、その意味が反對の意志を含んでゐる事は順吉にも分つた。

「ぢや反對だと仰有るやうなものですねえ。」

「まアさう云へばさうですねえ。」

それつ切り二人の間に氣拙い沈黙が続いた。

順吉はふとその時氣がついて傍を見たが秀則は何時の間にか座を立つてゐて姿が見えなかつた。

磯部は、二人の間を鎖す息苦しい沈黙に苛まれるやうに、時々帯の間から時計を引き出して覗いたりした。

「するとですね。」

順吉が暫くして顔を上げた。

明け放した窓の外に赤い蜻蛉が一つ泳ぐやうな格好で飛んでゐた。

肥え太つた磯部の肩越しに、澄んだ秋の空が擴がつて、午後の陽の光が飴色に街の藁の上に流れてゐた。

「卒直に云ひますが、或は貴方は満津子さんの母に對する感情を、満津子さんや私に迄持ち續けてゐられるのではありますまいか？」

磯部はちよつと不快な顔をしたが、

「それは貴方の御忖度に任します。」

と投げ棄てるやうに云つて、内心白刃を當てられたやうにぎよつとした驚きと不安とを押しかくすやうに外の方に眼を向けた。

赤蜻蛉がまだ飛んでゐた。

「御村度に任す……と仰有ると、お十和小母さんに對しては好い感情を持つてゐらつしやらないのですね。」

「まアさうでせうね。事情を御存知なら訊ねられる迄もない事と存じますが！」

「さうだとすると、私も先づ悪く思はれてゐるのですね。」

「……………」

「然しそりや私としては非常に誤解されてゐるやうな気がしますがね。」

「誤解と仰有ると？」

「それはですね、私が貴方に對して同情、同情と云ふと非常に失禮ですが、私は貴方に對して好意的理解を持つてゐると云ふ事を知つて戴いてゐないと思はれるのです。」

「どうもよく分りませんね。私が何も貴方を誤解するののどののと云つた處、お會ひするのが初めてだし、又元來私の上京の目的が満津子を連れて返るのであつたのですから、誤解からどうするの斯うするのと云ふ譯でも何でもないのですからね。」

「そりや私もよく分つてゐますが、私の云ふのはさう云ふ意味ではなかつたのですが……」と暫くは順吉も口を結んだが「が先づ兎も角斯うしてお知合ひになつたのですから今後何分の御交

際を願ひたいものです。で面倒な話はよしませう……」

と、決心した心持を現はして満津子の事は切上げた。そして社交的な辭令で打ち解け振りを示した。

「それは私の方からも御願する處です。満津子の件は誤解のないやうに……」

と、磯部もそれに相應した挨拶をしてゐる時、女中が上つて來た。

そして順吉に向つて、

「あの、お客様でございますが！」と遠くから云つた。

「誰方が？」

「伊澤さんで……」

「さうか、何か用か？」

「さ、お急ぎのやうですが……」

「ふん、さうか、ぢや直ぐ下りる。」

と、順吉は應へて、

「ちよつと、失禮します。」

と、磯部の方へ云つてをいて階下へ下りて行つた。

磯部は、初め来た時から、此家へ來てゐる筈の満津子が姿を見せないのので、多分階下の部屋へ隠れてでもゐるのだと思つてゐた。で順吉が階下へ下りて行く後姿を見ながら、満津子と打合はせに降りて行くんだなと決めた。

そして急に空虚なひそまり返つた部屋で物忘れをでもしたやうなポカンとした顔をして、虚な眼を睜つてゐた。

順吉は又、妹の美津枝が朝から日本橋の伊澤の家へ伊澤の母の病氣見舞に出かけてゐたので、或は病人の急變でもあつて伊澤がやつて來たのかも知れない位に思つてゐた。

が降りて行つて見ると伊澤の姿も見えず、秀則が無言で順吉を呼ぶやうに頭を二三度頷かせて眼配せした。

「何だい？ え？」

と、順吉も聲を潜ませて、首を差し伸べて、立つてゐる秀則の方へ近づいて行つた。

「伊澤が來たと云ふのは嘘なんだ。ちよつと僕が用事が有つたんだよ。」

「あ、さうか、俺ア又伊澤の母でも急變があつたのかと思つた。」

二人は立つた儘體を寄せて、ひそ／＼話を始めた。

「處でね。」

「うん。」

「他の話でも無いが、どうだい、先生大いに強氣で出たね。」

と、秀則は二階に眼を上げて磯部の事を云つた。

「ん。」

「それでどうしたい結局は？」

「どうも斯うもないさ、巧に此方の鋒先を避けて相手にしないんだ。」

「ふん、ふん。」と秀則は、さもあらう、と云つた風の微笑を浮べて

「どうだい、仍でだね、此の際義姉さんを渡してやつたら？」

と、兄の決心がいつつゐるかを探るやうな眼をした。

「ん。」

「成る程彼奴弱造には違ひないが、意地はなか／＼強いや。仍で今此方から押を強く出るのは相手の意地を堅めさすやうなものだぜ。」

「や、それは俺も知つてゐる。何せ間が悪かつたのだ、此方から早く神戸へ押しかければ好かつたのだ。まア然し向ふの云ひ分だつて無理はないさ、あれでも相當な紳士の自覺を持つてゐるんだから、出會すなり、お前の娘を嫁に呉れろぢや、よし來たと云ふ譯にも行かないや。紳士として餘り輕卒な行動に見えるからね。それに普通の場合でもさうだが、況んや磯部と各關係者との間には宿命的な葛藤が複雑に蟠つてゐるんだからねえ。」

「各關係者は振つた文句だね、ハツハ、。」

「冗談ぢやないぜ。」

「まアさう云ふな、然し兎に角義姉さんを連れて歸るつてんだらう？」

「さうさ。」

「ぢや歸してやれよ。今日は素直に先方の云ふ通りにした方が好いと思ふね。そして徐ろに策戦を立てた方が得策だ。」

「得策不利は別として歸らせねばならない事情になつてゐるんだが、然し一つ俺の心配なのは満津子を無理にも他へ縁づけるやうな事はないだらうかと云ふ點なのだが……」

「そりや義姉さんの心一つさ。義姉さんさへ確りしてゐれば大丈夫さ。それ程強い根性があり

や、既に是迄に義姉さんの立場はわけもなく打ち碎かれてゐらア、義姉さん處ぢやない。おヤ和小母さんだつてもつと別な境遇に置かれてゐたに違いないよ。」

「……………」

「弱い男なんだよ結局するにね。」

「さうだ、その點は俺も感づいた。」

「然し兄さんも案外弱氣だぜ。」

「どうして？」

「いや、悪い意味の弱氣ぢやない、嘆稱すべき善良さがあると云ふ意味さ。」

「まア、そらどうでもいいや、が俺の方でも押強く出られない點もあるさ、相當の年輩の人間へ向つてだからな、さう手容く猫の仔を貰ふやうに、お前の娘を是非呉れろとも初對面から云へないぢやないか。」

「それやさうさ、で此の際無條件で磯部の要求を容れてやるのさ。」

「あゝさうとも、その決心はしてゐる。」

「ぢや早く行つて話を纏めちまへよ。」

「ん、ぢや二階へ行つてくるよ。」

「あ。」

「だが、お前の云ひ草ぢやないが、豫期せざる變轉が起きて、先方へ満津子は返したわ、満津子は無理矢理に他へ縁づかせられたわと云ふやうな事でもあるとたまらないね。」

と、順吉はいざとなるとちよつと不安げな顔をした。

「何だい、そんな考こそ無用だ、大抵の奴がそんな未練氣で事を失敗るのだ、殊に戀に於てね。そしてそれ程義姉さんの心持に對して兄さんは不安を持つてゐるのかい？」

「いや、彼女はそんな事はない。」順吉は狼狽して首を振つた。

「それなら宜いだらう。」

その時二階で磯部が大きな咳をした。

それは意味なく出たものではあつたらうが、何となく順吉の二階へ上つて來るのを促すやうにも聞こえた。

順吉は直ぐ二階へ上つて行つた。

「それでですね、磯部さん。」

二階へ上ると順吉は、満津子が朝やつて來たのは來たが、今居ない事、宇都宮へ行つた事などを一切話し。

そして、順吉としては返すにしても満津子と話したいのが腹にたつぶり有るやうな氣がするの

で、

「私が責任を持つて連れて販りますからどうでせう、明日の夕刻迄待つて戴けないでせうか、それも貴方御自身で御出でになりますか。」

と磯部の意中を窺ふやうな眼をした。

「さう云ふ事情ならば、恐縮ですが、さう願ひませうか。」

「ぢや、明晩迄待つて戴きませうか、或は單に電報でお呼び呼せになつてもですが、それでは満津子さんが歸つて來ない時私が使嫉して何とかしたやうに思はれるのも双方面白くありませんから、やはり私が出かけませう。でお話す可き筈の一件は又後日改めておきき願ふとしませう。」

と、云ふ調子でぐんぐん思ふ事を云つてをいて順吉は玄關迄磯部を送り出した。

磯部が歸つてしまふと、順吉と秀則とは二階へ又上つて行つた。

秀則はごろりと疊の上へ仰向きに寝て煙草を吹かし始めた。

「奴、或は此方の想像以上に腹黒い奴で、満津子を連れて歸つてから政略結婚でも強制するんぢやなからうか？」

順吉は秀則の肩の處へ跌座を組んで落着の無い眼を動かした。

「そんな事は無いよ。」

秀則は兄の不安を押へつけるやうに語尾を強めた。

「然し、あの連中は案外さう云ふ事には大膽になれるのだからね。」

「そらさうだ、然し今日の場合此方で讓歩したから圓滿に片附いたのだが、兄さんの方で頑張つたら、奴は警察の手を借りてでも義姉さんを引張つて歸つたらうぜ。」

「さうだらうか。」

「やるとも。」と秀則は自分の考を押してをいて、「あの連中に限らず、心的結合の出来ない奴は、金の力が法律の力で人を動かすより他に方法がないぢやないか、又もし人間のだね。」

「うん。」

「或は理想論だが、人間が萬人心と心で人生を押し渡つて行くやうになつたら法律なんて必要がないわけにならうぢやないか。」

「何だか危つかしい議論だね。」

「がまあそんな理屈はどうでもいいや、早く行つた方が好いだらう……」

「ん、ぢや出かけやう。」

「新婚旅行のつもりで、千も百もシエクスピア擬きの誓ひを交して來るさ、斯うなれば義姉さんの心一つが萬事を決するのだからね。はつは。」

秀則は大きく笑つた。が、それは言葉が示すやうな皮肉な意味を籠めてゐる態度ではなかつた。

全く順吉は満津子に會つたら斯うも誓はせやう。ああも誓はせやう、と思つてゐたので、さう云はれると心の底を偷見されたやうで苦笑せずにはゐられなかつた。がそれだけにお互に羞恥を催したり、硬ばつたりしない程度に、可成り突込んだ點迄を兄弟で理解し合つてゐる事が順吉には頼もしく嬉しかつた。

午後の五時頃になつて、伊澤の家から美津枝が歸つて來た時には、もう順吉は宇都宮へ發つべく上野驛へ出てゐた。或は四時五十五分の汽車に乗る筈の順吉は日暮里か田端あたりを走る車窓で物思ひに耽つてゐたかも知らない。

「秀兄さん、兄さんは？」

「兄さんか、居ないよ。」

「何處へ？」

「遠くへ行つちやつた。」

「遠くつて何處？ そんな事仰有らずに教へて頂戴。」

「何か兄さんに用が有るのかい。」

「え、用つて事もないんですけど……」

「無いんですけど有るのかい。はつはつは。」

美津枝は秀則に調弄はれながら秀則から今日の一件を詳しく聞かされた。

「ぢや、義姉さんは神戸へ歸つて行くのね。」

「さうだ。」

「……………」

「兄さんの方はそれとして、伊澤のおつ母さんはどうだつた。」

「それがね。」

「ん。」

「餘り良かないの。」

「さうか、そいつは困つたね。」

秀則は、伊澤の母が、死ぬる迄に是非美津枝を嫁として一目でも見度い、と行く度に云つてゐる事を知つてゐるので、今日の一件に對する美津枝の失望が、其點に糸を引いてゐる事を知つてゐた。それは順吉が結婚する迄女手の無い家なので美津枝を他家へ縁づかす事が可成り困難であつた。で美津枝としては順吉の結婚が一日でも早く運んで呉れる事を頻りに希つてゐたので、今即ち順吉の結婚が遅れば遅れるだけ自分達の結婚の方も遅れる事になつてゐたので、今日の一件をきくとつまらないやうな失望を感じたのであつた。

順吉が宇都宮へ着いたのは午後の八時であつた。

順吉は映風氏が退京してから、まだ一度も訪ねた事が無かつたし、殊に宇都宮と云ふ町へも初めではあつたし、見當がつかないで、改札口を出ると俥に飛び乗つた。

「西原町の片山映風と云ふ家へ行くんだが……」

と、順吉が蹴込みに足をかけながら云ふと俥夫はひよいと顔を上げて、

「へ、すると晝過ぎのお方と一緒にございますか？」と、訊いた。

「晝過の方と云ふと家内ぢやないかしら。」

「あ、奥様ですか、やはり私が乗つけまして先生の處へお連れしましたです。」

その時俵はもう大工町の通りへかかつてゐた。

「さうかね、そら不思議だ。」

順吉は實際不思議に思つた。

五六時間前に満津子が乗つた俵へ偶然又自分が乗るなんて事は、順吉に幸先の好い感じを與へずにはおかなかつた。

關東平野がせり上つた日光山脈の裾に緩傾斜をして並ぶ町の屋並の中を俵はどんく／＼驅けて行つて殆んど郊外とでも云ふべき處へ出て來た。

峽風氏の家は街道筋から畑中へ引つ込んだ處にあつた。

小さな平家建の家は夜の闇の中に埋もれて、幽かに洩れる灯が漸くその存在を示してゐた。

夫人を喪つてから峽風氏は、妹のおつ、うさんに二人の子供を任せてその儘獨身生活をしてゐ

た。順吉は暫く見ぬ間に寂しい獨身生活の影が峽風氏の中に深く食ひ込んで昔の峽風氏とも思はれぬ土臭い感じが忍び込んでゐるのを知つた。

そして此の初老の峽風氏がどんな眼で、自分と満津子との戀を見てゐるかが順吉にはうす／＼感じられた。

もう若い人間の持つやうな線の太い情熱は無かつたが、薄墨の繪に見る恬淡ながら汲んでも盡きぬ親しい平明な情味が峽風氏の態度や言葉の中に充ち流れてゐた。

順吉は峽風氏と満津子と自分とで其の夜遅く迄色々な事を話し合ひながら、戀に悶える若い僧を前に、高德な老僧が枯淡な言葉の中に慈愛に充ちた心靈の光を勻はせるやうな情景を何故ともなく胸に描いた。

順吉の執つた磯部に對する態度に就いては峽風氏も喜んだ。満津子も感情の上からは非常に厭がつたがそれも己むを得ぬ、だと云ふ事は分つてゐるので快く順吉の言葉に従つた。

その翌日になつて、順吉は直ぐ引返す考であつたが、都合のいい列車が無いのと、峽風氏が引止めるのと兩方で、兎に角夜になる迄に東京へ歸ればいいと決めてしまつた。

それで午前中峽風氏と彼等二人とは一緒に郊外の方を歩きながら又話し込んだ。

順吉も満津子も互に今夜は別れなければならぬと云ふ事を忘れたやうに楽しさうに語つたり戯れたりした。

「もう私のやうな年になると、未來に對する安心が卑怯にも出來上つてしまつて、唯回想追憶のみが生活に潤ひをつけるだけだね。」

峽風氏は何かの序に感慨めいた事を云つた。

「さうですかね。」

順吉は、自分と満津子との話したり並んで歩いたりする姿が、峽風氏の胸の中に、同じ氏の青年時代の回想を呼び起してゐる事を覺つた。

「然し先生、何だか滅入つた墓場のやうな町ですねえ。」

順吉は、都會慣れた眼にさう映るのかどうか、宇都宮と云ふ町は生氣の無い、そして又上品な静けさも無い、野末の墓場のやうな感じがした。

「さう見えるかね。然しもうこの年になるとどこに住んでも心持は動かないねえ。」

峽風氏は寂しさうに云つた。

前の夜から峽風氏は頻りに「此の年になると」と云ふやうな事を云つた。

順吉は時が人間に加へて行く力をしみんと見せつけられた。と同時に「俺達は若いのだ。俺達は若いのだ。」と叫ばずにはゐられないやうな自分の若さに對する歡喜と矜の意識とを潮のやうに胸の中に膨らませ紆らせた。

午後四時に近くなつて順吉は満津子と二人で峽風氏の家を出た。

「私も停車場迄送らうか。」と云ふ峽風氏を押し止めて、時間もまだ充分あるのでぶら／＼話しながら二人は歩いた。

暮れやすい秋の陽が眼の前になだれ下る市街の藁の上に飴色に流れて、透明な微風が空氣の澄んだ地と空との間に流れてゐた。

電車さへも無い閑寂とした市街はその外光に適はしい静けさを示してゐた。

「おや、お前それは何だい？」

順吉は、ふと、並んで歩いてゐる満津子の手にしてゐる小さな風呂敷包を指した。

「これ？」

満津子は彼女が羞んだ時の癖である下唇の隅を、皓い前齒で軽く嚙んで上眼を使ひながら、
「何でも無いの」

と、微笑を唇の隅に見せた。

「何でも無いつて、何かだらう。」

「これはね！」

「ん」

「手紙。」

「何の手紙だい？」

「貴方から戴いたお手紙なの。」

「僕がお前にやつた手紙だつて。」

「え、始めつからみんな持つてゐるの、大抵の時斯うして持つて歩くのよ。」

「ふん、そんなに澤山あるかねえ、そして又何故わざわざ持ち歩くんだい。」

「だつて妾の一番大切なものなのですもの」

満津子は掻き抱くやうにその小さい包みを胸に宛てた。

「僕よりもその手紙が大切なのかい。」

順吉は明るい気分になりながら柔らかな微笑を送つた。

「え、さうよ。」

と満津子も軽快な足どりになりながら、(さうではありません、一番大切な貴方の下さつたものだから大切なと云ふ意味です)と云ふ處をわざと、え、さうよと云つて順吉の顔を眩いけに仰いだ。

二人はもう今晚の荷旦の別れに就いては話を取り纏めてゐたので出来るだけそれにはもう囁れないやうにして、一分でも明るく楽しく過さうとする氣持をお互に抱き合つてゐた。

地方裁判所の御殿風の建築の前の高い古風な火の見櫓を仰いだり、一本道になつてゐる大通りの果に見える停車場の屋根を見たりしながら二人は急がない足を運んで行つた。

何物にも換へ難い寶のやうに、手紙の包を確りと抱き締めてゐる満津子の姿を見ると、順吉は、更に更に自分の熱愛が強く濃く彼女の美しい姿を包んで行くのを覺えた。

午後四時四十八分宇都宮發の上野列車が二人を載せて小山あたり迄來た時であつた。

乗客の眇い車室内には黄色い電燈が仄白い光を滲ませて、薄い影を作つてゐた。そして乗客の顔がほつと仄黄色な光の中に浮んでゐて、濁り切つた光線の中では他の乗客の顔もはつきりとは見えなかつた。

野面へは一面の夕霧が降りてゐて見渡す限り霧の海であつた。

突然その時順吉の傍に近寄つて來た脊の高い男が、自分の考を危ぶむやうな眼を彼に注いでゐたがやがて思ひ切つたやうに、

「失禮ですが、貴方は有吉君ではありませんか？」

と、順吉の顔を正視しながら、頬骨の高い頬のあたりに氣まり悪さうな手を宛てて聲をかけた。

満津子は色の黒いそして何となく険しさうな男の顔を順吉の肩に隠れて偷み見ながら不安さうな顔をしてゐた。

「は、僕は有吉ですが誰方でせうか。」

と、順吉は不審氣にその男を見た。

「やはりさうでしたねえ。宇都宮でお乗りになつた時からきつと、さうだとは思つてゐましたが……」

と、その男は急に人懐しけな碎けた語調になりながら、

「僕は池上ですが、池上幸一ですが……」

と、その男は、順吉の記憶の中にあるべき善の自分を思ひ出させやうと努めるらしく微笑みながら云つた。

「池上幸一君と？……あ、池上君か、忘れてゐた。失敬、失敬。」

順吉は吾ながら聲の大きいのに驚く程な聲をあけて云つた。

満津子は順吉の親しけな聲をきくと安心したらしく、身の緊張を解いて順吉の顔を見てゐた。

「久瀾だね。すっかり見忘れてゐた。實に奇遇だね。まア掛け給へ。」

と恰度空いてゐた前の座席を示しながら順吉は、突然出會した友の記憶を夢のやうに想起してゐた。

「忘れますよ、何分昔の事だから……」

と、池上は前へ腰を卸した。

彼の注意は順吉と並んで腰掛けてゐる満津子に直ぐと向けられた。

「全く遠い昔だ！」

順吉も池上と同じ言葉を感慨籠めて繰り返した。

池上は順吉の中學時代の同窓であつた。そして文學に熱中した少年時代の追憶の中には是非共

出て來なければならぬ友達の一人であつた。

輕妙な機智に富んだ邪氣の無い少年であつた池上とは中學卒業後に消息が絶えてゐた。にもかかはらず池上にも池上の生活が幾多の變轉推移を重ねてゐたのだ、恰度俺が生活してゐたと同じく——順吉は改めて池上を見た。

順吉の事は、順吉が語る迄もなく池上は新聞雜誌を通して相當に知つてゐた。

「君は本當にやつて呉れた。あの頃の友達で生き残つたのは君と僕とだけだものね。死んだ連中をひつくるめた働をして呉れたのは君一人だよ。僕なんか残つて残り甲斐のない方だ。」と、池上は、同人雜誌を六人で出してゐた頃のサークルを差してゐるらしかつた。

「さうだね、あの六人で君と僕だけだね生き残つてゐるのは、然し残り甲斐のないのは君一人ぢやないお互さ、然し君はどうしてゐるんだい？」

「僕が僕は中學を出てから、學資は無し、己を得ず條件附で學資を他から出して貰つて高工を出て、今陸中の××鑛山の穴住ひだ。」

「そりや結構だ。そして今何處へ行くんだ。」

「今鑛山の用件でちよつと東京迄出かける處なんだ。」

「さうか、何れにせよ意外の奇遇だね。」

順吉は少年時代の彼の佛が纔かに彼の鼻筋に残つてゐるだけで、もう充分鑛山技師らしい姿になり切つてしまつてゐる池上を瞞めながら云つた。

「僕は本郷の湯島にゐるから用事が濟んだり寄り給へよ。」

「知つてるよ、君の消息は大抵氣をつけてゐるよ、一作と雖も洩らさず讀んでゐるんだからね。なアに他の五人の仕残した總てを君がやつて呉れなくちやならんで、監視してゐるわけさとはは。」

順吉は、舊友が、しかも同じやうに藝術に志して、藝術から餘儀なく遠ざけられた池上が、自分の知らない土地で、熱心に自分の藝術を味はひ見守つてゐて呉れた事を聞くと百萬の讀者を持つてゐるよりも更に嬉しく思つた。

「此の方は？」

池上は順吉の傍にびつたり寄添つてゐる満津子を指した。

「あ、失敬、失敬、僕の家内だ、紹介するのを忘れてた。」

「あ、さうか、僕こそ失敬した。」

と、池上は順吉に會釋して、更に滿津子の方へふり向いて、

「失敬しました。僕池上と申します。有吉君の古い友達です。」と、氣輕に自分を紹介した。

滿津子は多少の狼敗氣味を押し隠して、

「左様でございますか、妾有吉の妻でございます。」

滿津子はさう云つてゐる間にも自分を包む幸福を夢のやうに感じた。

滿津子が第三者の前に自分を順吉の妻として示し得たのはその時が始めてであつたから。

實質に於て夫婦には違ひなかつたけれども、形式に於て未だ夫婦とはなつてゐないし、他人から完全に順吉の妻として扱はれた事は無かつたので、或る歡善が彼女の胸を打つのも無理のない事であつた。

上野へ着く迄順吉と池上は中學時代の話やら世間話を旺んに持ち出してゐた。

滿津子も時々華やかな口を出して二人の會話の間に挟んだりした。

上野へ着くと、池上は芝の方へ行くのだと云つて再會を約して品川行の電車へ飛び乗つた。

秋とは云へ、都會の夜の底にはまだ仄かに夏の匂が残つてゐた。

上野驛で池上と別れてから、順吉と滿津子は並んで、公園下から池の端へ出て湯島の家の方へ歩いて行つた。

汽車の中での幸福な明るい氣分にも似ず二人つ切りになると妙に寂しい氣分が迫つて來た。それはもう眼の前に別離が大手を擴げて控へてゐるのが、ひいやりと心を脅すからであつた。滿津子は強ひてそれに觸れるのを恐れるやうに汽車の中での明るい氣分を取り戻すに努めた。

「妾ね、池上さんが眞面目に奥さん奥さんと仰有るので何だか羞しくつて、そしてね、何だか池上さんを瞞してゐるやうでお氣の毒でしたわ。」

「ぢやお前は僕の妻ぢやないのかい。」

「それはさうですけれども。」

「だつたら宜いぢやないか。」

「だつて未だ結婚式も擧げてゐないのに……」

「そんな事どうだつて宜いや。」

順吉は自分の心にも云ひきかすやうに強く云ひ切つた。

「この儘二人で何處へ行つてしまひましょか。」

松住町の曲り角を電車道に沿つて右へ曲る時満津子は順吉へ靠れかかるやうにして云つた。
「行つても宜いね——行かうか。」

順吉も満津子の言葉の底に潜む心持がよく呑みこめたので苦笑して答へた。
兎に角二人は湯島の家へ歸つて行つた。

歸つて見ると磯部がちやんと來て待つてゐた。

その夜の十一時頃の列車で満津子は磯部に連れられて神戸へ歸つて行つた。

X X X X X X X

X X X X X X X

その後、計畫通り、順吉の方の側から磯部の方へ出かけて云つて満津子との結婚の交渉を開く筈であつたが、直ぐ後を追つかけるのも變だし、一應落着いてからの方が具合が好からうと秀則は云ふし又順吉の方でもその覺悟でゐたので十月頃迄は冗に時を過して行つた。

處がその内豫て伊澤の母から頻りに急き立てられてゐた美津枝と伊澤との結婚がどうしても延ばされない事情になつた。

と、云ふのは、伊澤と美津枝との結婚は双方の関係者も心から賛成してゐる處だし、早晚結婚

すると云ふ事は豫定の事實であつたのだが、順吉の家で女手が無い爲に、美津枝が家事萬端の切り切り盛りをしてゐたので、今美津枝を縁づかせると差し當りちよつと困るので、順吉が満津子と結婚して女手が出來たらといふ事に、双方共暗々裡に決めこんでゐたのであつた。

處が伊澤の母の病氣が次第に重つてくると、伊澤の母は、自分の息の有る間に美津枝の結婚を見て死にたいと云つて利かなくなつた。

仍で母思ひの伊澤は、母の要求を容れてお互に悦び合はうと思つたのだが、何せ順吉の事情が事情なので強とても云ひ出し兼ねてゐるが、黙つてもゐられないのでその話を順吉に話して見た。

順吉も伊澤の母の心持を思ふとどうかしてその希望を容れてやりたいので、順吉が結婚する迄伊澤と同居すると云ふ事に話を纏めて、一と先づ美津枝は日本橋の伊澤の處へやつた。そして別家する身柄になつてゐる伊澤が豫ての約束通り結婚後美津枝と一緒に池袋の新居へ移ると、順吉兄弟も湯島の家を引拂つて其方へ移つて行つた。

伊澤の母は間も無く満足して死んで行つた。

残つた伊澤夫婦も順吉兄弟も伊澤の母の満足を知つてゐるので思ひ切つて結婚を遂行した事を此の上なく満足に且つ愉快に思つた。

そんな事情で、満津子の方は暫く顧みる事が出来ずに時が経つて行つて十二月になつたが、愈伊澤の結婚生活に落着が出来る、今度は早速満津子の方へ皆して取りかかつて行つた。

そして順吉自身が出向くか、又秀則が行くかと云ふやうな事を談議してゐる處へ満津子から長い手紙が來た。

いつも満津子の手紙は、そちらの事件（伊澤の結婚問題）が片付き次第に妾の方を早く何とかして下さい、と云つた風の決まり切つた手紙であつたので順吉は別に注意もせず、それでも別れてゐる戀人の倂やかなつかしさを見出さうと一と先づ封を切つたが、それは豫期しない重大事を云つて寄越したものであつた。

満津子からの手紙が示す處によると、満津子は妊娠四ヶ月だと云ふのである。それも初めての經驗なのでそれ迄確りとした意識もなく放任してをいた處、どうも體が變なので、そつと産科の醫者に診せて漸く認識し得たのだと書いてあつた。

順吉は幾度も幾度もその手紙を読み返した。

何となく不思議なものの方が彼の心を揺がすのであつた。

「妊娠！」

順吉は、満津子の胎内に、自分の血を承けたものが、刻一刻その生命を育みながら新しい生活組織を作つて行つてゐる事を信じて宜いかどうかを疑ふ程、その事實を奇蹟のやうに感じた。そしてその奇蹟に對する感じは彼が今迄のどの場合にも感じた事の無い喜悅とも驚喜とも名づけやうのない強烈な本能的なものであつた。

手紙を読んだ彼の頬に、明るい調和に恵まれた微笑が靜かに漲つた。初戀から妊娠迄——その間の様々な思ひ出が一瞬の間に鋭い速力で以て電のやうに閃いた。

軽く閉じた眼の外に、一人の嬰兒の姿が、濃い夜霧に包まれた物體のやうに臍ろに泛び上つた。そしてそれは瑣骨迄露はに胸をはだけた満津子の肌に顔を埋めてゐるやうでもあつたし、たつた一人で立つて微笑んでゐるやうでもあつた。が何れにせよ、それは彼が是迄見た嬰兒——道の行きすりに、或は繪に寫真に——の總ての愛らしさと清純さと美とを具現した世にも稀な清らかな聖崇な嬰兒の姿であつた。

彼はその手紙を秀則にも伊澤夫婦にも惜氣無く見せた。

そして皆の前に彼が、恰も神聖な宣言のやうに云ひ放つたのは、

「直ぐにも満津子を引取らねばならぬ。」と云ふ強い決心に固められた言葉であつた。

そして彼はその夜早速にも神戸へ出かけて行くと言つて、

「なアに、幾ら磯部だつて子供迄出来て来てから、やるもやらぬも問題にならんぢやないか。」と昂然として云ふのであつたが、秀則は飽く迄冷靜な心境を失はずにちつと兄の様子を見てゐた。

順吉はすつかり昂奮してしまつて一人で喋舌つてゐるが、突然秀則は順吉の高つ調子を挫くやうに、

「神戸へは僕が行つてやらう。」

と、一人で呑み込んだやうに云つた。

「お前が行く？」

順吉は落着き拂つた物の言ひ方をする秀則に眼を大きく睜つた。

「あ、その方が宜いよ。」

秀則は飽く迄獨り決めな顔をして獨で頷いた。

「……………」

順吉は次第に自分の冷靜を取り返して來た。

「幸、休暇でもあるし、兎に角僕に任せ。責任を以て整理して來るよ。僕には僕の成算があるから。」

秀則は當初から順吉の戀愛問題に携はつてゐるので一種の興味も手傳つてゐたのであらうが如何にも自信有りさうに云つた。

仍で伊澤や美津枝も、結婚する當人が始めから掛合に行くのも慣習上妥當でないし、それかと云つて普通の結婚問題とも違つた複雑な経緯が有るので、間へ立つて貰ふ可き適當な人間も無いし、此の際、内容を詳しく知つてゐる上手腕も有る秀則が行つて掛合ふ事は一番至當な事だと思ふと、秀則に賛成したので一と先づ、それならば秀則を、と云ふので順吉も萬事を秀則に委す事にした。

そして愈秀則が神戸へ發つて行つたのは十二月の中頃の雪模様のした暗い、どんよりとした日の夕方であつた。

さう云ふ風で纏れ切つた順津子の問題も兎に角、だん／＼と纏まりが着いて行きさうな形勢になつて行くので、本來ならば順吉は快活な希望に満ちた顔をして行くのが當然でなければならぬのに、どう云ふものか順吉は日に日に憂鬱になつて行つた。

その徴候は、満津子が神戸へ引き連れて歸られた前から現はれてゐたので、始めのうちは伊澤や美津枝も、思ふやうに渉らない戀の悶えが順吉を集慮させたり、時に絶望的な悩みに陥し込んだりしてそれが彼を憂鬱にするのだとばかり思つてゐた處が、近頃になつてどうもそれとも違ふやうに思はれる節が多くなつて來たのであつた。

「ひどい、神経衰弱ですよ。」

森と云ふ伊澤の友達で地方の醫專を出たばかりの青年は來る度に美津枝にさう云つて、茶食を侷めたり、刺戟物を避ける事などを侷めたりした。

「君は、マルキシズムの信徒か、サンジカリストかアナキストか。一體何に屬してゐるのだ。科學的な教養のある君としてどうも旗色の不鮮明なのは解し兼ねられる態度だね。」

皮肉屋の田村は、社會運動に對する順吉の思想や行動に向つて嘲笑に近い皮肉を浴せる事も屢々であつた。

その度に順吉は次のやうに答へた。

「俺は唯、俺が斯うしなければ嘘だ！と思つた時、一切の學說に關せず自分の信する處を行ふだけそれが學說の系統の何に屬するかは些しも問題ぢや無い。」

順吉の言葉は詭辯でも何でも無かつた。

虐けられたる者に對する彼の正義觀念は既に少年の日にその出發點を切つてゐる。人道的愛熱は共に幼い昔にその烽火をあけてゐる。更に遡るならば、彼の父の人道的な熱情が彼の生命の胚胎の日に彼の心情に燃え移つてゐると云つても差支へない。

そしてその結論として生れたものは、強制された不合理な制度の不當要求や、創造意欲に伴ふ快樂を殺ぎ去つた勞働の拘束から人間を解放せなければならぬと云ふ事であつた。そして人間の個々人の幸福を通して人類全體が幸福である世界に迄撓め直して行かうとするのが彼の理想であつた。

彼はその理想の實現を期して總ての行動を執つた。

其處迄は彼自身可成り幸福であつた。確乎たる信念を抱いて、その信念のもとに動く事がどれだけ彼の生活を充實したものとしてゐたかは彼自身が一番よく知つてゐる。

處が、その信念が突然一つの障壁に打つかつた。

「自分の信じて切つてゐる事だつて畢竟するにAを以てBに換へる程度の小細工に過ぎないのぢやなからうか、或は將來に幸福の郷を理想とした處それも、今よりはもつと別の意味で味も匂

もない安逸酔世の郷を出現さす事になるのではなからうか？」

さうした懷疑がいつのまにか忍び込んで、ややともすると彼の信念に冷水を浴せるのであつた。

「たとへ物質的に権力的に人間の外部から襲ひかかる苦痛苛虐を除去し得たところが、それで完全に人類は救へるとは云へまい、人間自體が生れながらに持ち、育まれてゐる人間苦を迄消す事は出来まい。して見ればだ、俺の理想や熱情の總てはただほんの一次的のもので、決して恒久性を持つたものでは無いと云ふ事になる。」

彼は自分の全部に對して、さうした懷疑をふり濺いで見ると同時に、劇しい幻滅を感じるのであつた。それが彼を憂鬱にし、無氣力にするのであつた。そして講演會にしる、集會にしる、筆での意志表示にしる是迄のやうな熱情が感じられなくなつたのであつた。

それのみでなく、その懷疑を何とかして打ち破つて更に一步の高き地に微光なりとも認めやうとする焦燥が一層彼を憂鬱な思索に導くのであつた。

伊澤や美津枝も後には、漸く順吉の憂鬱の眞實相を臆ながら看取する事が出来たけれども、それが單に戀の悩みや憂ひでないだけに慰める事さへ協はぬ遙かの處にそれを眺めて居るより他は

無かつた。

一方、醫者の森が云ふやうに生理的には充分、神経衰弱症の徴候を現はしてゐるので、秀則も伊澤夫婦も、手の及ぶ方面だけは細心の注意や慰藉を怠らなかつた。

然し一方その否定的な憂鬱の中から、聽て何かの力強い恒久的なものが現はれ出さうな豫感を感ぜぬでもなかつた。

さうした心理状態にある時、灰色の曇雲に締めつけられた冬の天候や、意の儘に進展せぬ戀愛の行惱みやらが一層その憂鬱を擴大して行くのは仕方の無い事であつた。

神戸へ發つて行つた秀則から四日目に漸く初めての手紙が來たが、それは單に、途中無事で神戸へ着いて、順吉が夏行つて世話になつた安井の家へ腰を据えてゐると云ふ事を簡單に知らしたもので更に當面の目的である満津子の事に就いては何も書いてなかつた。唯終りの方に本日磯部氏と會見、明日更に會見する筈、と書添へてあるだけであつた。手紙の日附が受取つた前日になつてゐるので、順吉が第一信を受取つた日には、秀則は神戸で磯部と第二回の會見をやつてゐる譯である。

順吉はその頃癖になつてゐる、あてども無い散策に歳晚の街の方へぶらりつと出かけて行つ

た。

灰色に鈍り切つた空の下に人間が慌しく蠢いてゐた。

順吉は何處からか淺草方面行の電車に乗つた田原町で降りると彼は人混の中に錯雜交流する人間の吐息を聞いたり、活動寫眞の卑俗な、けれども夜の淺草に適はしい音響を聞いたりしてその界限をぼうつき歩いてゐた。

夜の八時頃であつた。

星は見えなかつた。

灯影の落ち布いた街路にチラチラと粉雪が零れてゐた。

順吉は身を竦めて足早やに六區を電車通りへ向けて歩いた。

雪は繁くなつた。

繁くなつた雪の中に電燈の光が夢のやうに浮んで、行く人の顔も何も近寄らなければ見えなかつた。

そしてその夜の順吉の陰鬱な氣分と同じやうに街も生氣の無い鬱陶しい光景となつた。

順吉は冷たく散りかかる雪に顔を濡らせながら歩いた。

一時間の餘も歩いたらう。黒いソフトの縁に重い程雪が溜まつてゐた。

彼はとある酒場へ入つて行つた。

大きな酒場ではなかつたが、小綺麗な、置物一つ、たとへば植木鉢の一つだつて、卓子だつて感じよく美しく置き並べる事に氣を配つてゐるらしくものの總てがそこでは快い調和を保つて整頓してゐた。

室の中には鐵製の暖爐が燃えてゐた。

四つしかない卓子の一つには三人の大学生が話し込んでゐた。

順吉は帽子の雪を拂ひながら暖爐の前へ椅子を持ち出して腰を掛けた。

解けた雫が肩から、腕からとポタリ／＼流れ落ちて赤熱した暖爐に落ちかかつてシュツ／＼と快い音を立てては消えた。

「寒いのねえ。」

給仕女が来て愛想よく云つた。

「ん。」

「お酒？」

「ん。」

順吉は漸く温い室内の空氣になづんで來た。そして料理場から漂つてくる甘酸いものの香さへ嗅ぐ事が出來た。

三人の大学生は彼にちよいとした一瞥を與へてをいて又話し出した。

一人の話し手を中心之餘程その話が興味を惹き起してゐるらしく二人は頷きく聽いてゐた。

順吉は酒のグラスを手にして聞くとともになしに彼等の話に耳を傾けてゐた。

「それ程單純な考しか持つてゐないのか。」
一人が云ふ。

「さうだとも、戀には一つの道と一つの意味しかない。」

「その一つの道とは？」

「それかい、選ばれたる唯一人を信じ愛する心と、それをぐらつかさないと云ふ事さ。」

「そして一つの意味とは？」

「戀によつて俺は生れ、又戀によつて俺は次の生を生む。永劫に亘つての人間の存在を保つ唯一つの力は戀である」と云ふ事さ。」

「それは戀の定義にはなるかも知れない。」

「立派な定義だ！」

右手にグラスを取つて唇にあてて、飲むでも無く飲まぬでも無く聞いている一人が、

「止せやい。又君の戀物語か。」

と、空間に眼を据えて叫んだ。

順吉は彼等の若々しい雰圍氣を遠くから親しみに満ちた眼をして眺めてゐた。

雪は相變らず降つてゐた。

靜かな沈み切つた、まるで何かにそつと壓へつけられてゐるやうな鈍重な靜寂の中を電車の音が靜かに遠くで軌つた。

湯島天神前の酒場だと彼はその時初めて氣が着いた。

氣が着いて見ると、彼は滿更見覺えの無い酒場でも無かつた。

そこには、英語の達者な洋妾上りのコケチツシユな女や、可成り有名な洋畫家と情事のあつた女などが居た事もあつた事を思ひ出した。

がその夜はもう彼女等は居なかつた。

今彼の前に暖爐を挟んで腰かけてゐる女は順吉は初めて見る女であつた。

三人の大學生の話は——雪の夜語り式にボツ／＼進行して行つた。

本當に人間の片割れと云ふものは一人しか居ない。人生の十字路で出會す女は生涯に一人しか居ないと考へてゐる男が居た。そしてその男は所謂その片割れと思つてゐる女に子供を一人残して死なれた。男は残された子供と共に彼女の追慕の中に憤ましく生きてゐた——一人の話し手がそんな事を話してゐた。

「うん、それから……」一人の聴手が促すやうに云つた。

遺された幼い子供は母を慕つて母ちやんはどうしたの／＼と呼び続けた。その時男は床の間の亡き妻の寫眞を子供に示した。あれがお前の母ちやんだ。お前が大きくなつたら歸つて來るからね。と若い父は云ひ聞かした。子供は生きた時の母に對すると同じやうにその寫眞に話しかけたり笑つたりして暮らしてゐた。男は——運命の女を信ずるその男は生涯獨身で亡き妻との戀を立て貫かうと思つてゐた。そしてさう思ふ事に一種の悲壯感を感じてゐた。——。

話し手の話は未だ續く。

が男は若い、彼は生きてゐる。獨身を許さない惱みが日に日に彼を苦しめ出した。其處へ或る女性が現はれて彼を戀し始めた。彼の血は抑へやうとしても湧く。然し彼は死んだ妻に對する愛

慕と、感銘とを以て無理にそれを抑へた。そして飽く迄、一戀一生の彼の神聖なと思惟してゐる信仰を貫く事に努めた——。

話し手の話は未だ續く。

十時近い雪の夜の酒場にももう客も新らしく入つては來なかつた。

順吉はぢつとその話に聞入つてゐる暖爐の向ふ側の女を見た。

女は銘仙の袴の上に對の羽織を着てその上へエブロンを掛けてゐた。水色がかかつた半襟の間から覗き出た頸はほつそりとしてゐた。その上に蒼白い瓦斯の光が流れて、何となく不幸さうな運命と生活の暗愁とを物語るやうな愁はしい感じが全體に滲み出てゐた。

「戀をした女だらう、そして不幸な結末に泣いた事のある女だらう……」

順吉が女を見ながらそんな事を思つてゐる間にも、話し手の話は續く。

——男は其女の戀の誘惑に負けまいと努めてゐた。寫眞の母を相手にしてゐた子供は父の心持に構はずその女が來る度に小母ちやん小母ちやんと云つてその女の懷へ飛び込んで行つた。先づ子供から懐柔した女は女性の持つあらゆる魅惑を大膽に男に浴せかけて行つたその時男は更に別の女に出會した。出會したと云つても、第三者を通じて話に聞いただけではあるが、七八つの頃